兩段、兩必の字兩安能の字、兩去の字、呼應を作す。章法井然、孔子曰く殷に三仁あり。此の後遂に完人無し、三閭若し豫め後世の鄙夫迂儒を知らば、必ず過論の者あらん。嗟乎漢唐後の論人、仲尼より嚴なり、吾其の自ら視、何等に居るを知らざるなり。

大獅子吼林曰く漁父の後に『燈』は直ちに「招魂」を以てし、而して招魂は屈原が作なりと論斷す。乃ち曰く古人招魂の禮、死者の爲めに行ひ、嗣で亦之を生人に施する者あり。屈原魂魄離散するを以て而して招く、尚ほ未だ死せざるにあるなり。林子の說考據無きにあらず、然れども今姑らく舊說に從つて之を九辯の後に付し、辯ずる所あらん。

卷の第八

九辯

王逸曰く九辯は楚の大夫宋玉が作る所なり。辯は變なり。『史記』曰く原死するの後、楚に宋玉、唐勒、景差の徒あり。皆辭を好み、而して賦を以て稱せらる。皆屈子の從容辭令を祖とす、終に敢て直諫する莫し。今玉が作る所の九辯を讀む、其の師が忠にして放たるを閔む。然れども三閭は煥として神明の若し。此れ亦淸は則ち寒潭千尺、峻は則ち天外三峯、九辯の後、豈復九辯あらんや。

悲哉秋之爲氣也　蕭瑟兮草木搖落而變衰　憭慄兮若在遠行
登山臨水兮送將歸

悲い哉秋の氣たるや、蕭瑟と草木搖落して變衰す、憭慄と遠行に在て山に登り水に臨んで將に歸んとするを送るが若し。

【句解】悲哉は一本悲夫に作る、悲夫が可なり、哀哉と悲夫とは一定の成語動かすべからず。

秋之爲氣也　王逸曰く寒氣聊戻、歲將に暮んとす。秋晩を以て一歲の暮と爲したること知るべし。蕭瑟兮　王逸曰く陰冷促急風疾暴なり、所謂凄氣が人に逼る貌、秋の氣に託して、列士の氣を想像する。繹衰　草色も樹葉も一齊に夏日と觀を異にす。憭慄は五臣云ふ猶ほ悽愴と言ふがごとし、又失意の貌。若在遠行　登山臨水兮　送將歸　王逸曰く遠客出で去て他方に之き、高に陞りて遠望江河を視、族親別れて逝て故鄉に還るなり。今謂ふ文字の如く解する必要なし、秋の氣と、人間の氣と、其の痛切なる調子を表出したるものなり。天地の氣は秋を以て悽愴の極とし、人の氣は遠行を以て悲愁の極とす、其の間の意味を取れば足る。衰と歸と韵。

汝寥兮天高而氣清　寂寥兮收潦而水清　憯悽增欷兮　薄寒之中ㇾ人　愴怳懭悢兮去ㇾ故而就ㇾ新　坎廩兮貧士失ㇾ職而志不ㇾ平　廓落兮羈旅而無ニ友生一　惆悵兮而私自憐

【句解】汝寥は王逸曰く曠蕩空虛なり。或は曰く蕭條無雲の貌。秋空の晴色を形容したるなり。汝寥たり天高うして氣清む、寂寥たり潦を收めて水清む、憯悽と增す欷く、薄寒の人に中る。愴怳懭悢たり故を去て新に就く、坎廩たり貧士職を失うて志平かならず、廓落たり羈旅にして友生無し、惆悵たり而して私に自ら憐む。

寂寥は宋玉又は寂漻ともあり。『說文』に寂は人聲無きなり、寥は空虛なり、漻は深淸なり、孰れの意味も通ずるなり。收潦而水淸　潦は雨水、雨水は濁るもの、然るに時正に秋晴、水も亦淸澄たり。憯悽は悲痛の貌。欷は泣歔なり。薄寒は少寒にあらず、薄は迫なり、寒氣が人に迫り當るなり。愴怳は失意の貌。懭悢は不得志の貌。去故就新は王逸曰く初會鉏錯し、志未だ合せざるなり。初會鉏錯するが故に別離の悲哀を生ずるに至る。坎廩は困窮、失志、不平の三解あり、俗語の不運の義も含む。失職　王逸曰く財を亡し物を遺し、寇賊に逢ふなり。官職を失ふとのみにあらず、廓落は王逸曰く妃を喪ひ耦を失ひ、塊然獨立なり。五臣云ふ空寂なり。今謂く是れ俗語の一物も無く「サツパリ」して居るの義に當る。羈は旅なり。旅は羈なり。共に「タビ」なり。單獨にして友生無し。惆悵は悲哀なり、此の一段秋の凄景と人の凄氣とを合して言ふ。淸と人と新と平と生と憐と韵なり。

燕翩翩其辭歸兮　蟬寂漠而無ㇾ聲　鴈靡靡而南遊兮　鶤鷄啁哳而悲鳴　獨申ㇾ旦而不ㇾ寐兮　哀ニ蟋蟀之宵征一　時亹亹而過ㇾ中兮　蹇淹留而無ㇾ成

燕翩翩として其れ辭し歸る、蟬寂漠として聲無し、鴈靡靡として南に遊ぶ、鵾鷄啁哳として悲み鳴く、獨旦を申ねて寐ず、蟋蟀の宵る征くを哀む、時亹亹として中を過ぎ、蹇淹留して成ること無し。

【句解】翩翩は飛ぶ貌。燕は春來つて秋歸る。蟬は夏生じて秋死す。鴈は陰起るときは南し、陽起るときは北す、寒を避けて煖に就くなり。靡靡は噳噳と同じ、其の鳴聲の形容。鵾鷄は鶤鷄と同じ、和名「タウマル」鶴に似て毛色黄白なり。啁哳は聲が繁細の貌、啁嘐と同じ、「カマビスシ」く悲鳴す。申旦 五臣云ふ申は至なり。朱子曰く申は重なり。屈復曰く申は致なり。此の至重致三說の中、今重の義を取る。所謂今日も明日もと連續して寐られざるなり。哀蟋蟀之宵征 蟋蟀は「キリギリス」にして、今の「コホロギ」の事なり。螽斯卽ち蚣蝑を「キリギリス」と訓するは可なり。蟋蟀を「キリギリス」と古へ訓したるは今用ひずして可なり。王逸曰く蠶蛾の夜行を見て、自ら放弃せられて、昆蟲と雙を爲すを傷むなり。或は曰ふ宵征とは七月野に在り、八月宇に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀我が牀に入るを謂ふなり。二義共に通ず。時は時節。亹亹は進む貌。過中は漸く衰暮、卽ち俗語の降り阪ならんとするを云ふ、而かも草澤に淹留して何の成す所無きなり。聲と鳴と征と成と韵なり。

屈復曰く物情の悲秋此の如し、我の悲秋更に深し、首句は悲秋を以て起し、下分之に應じ、一段合寫し、二段分寫し、三段又合寫す、然れども通章皆題前の虛寫なり。

悲憂窮戚兮獨處廓　有美一人兮心不繹　去鄉離家兮徠遠客　超逍遙兮今焉薄

悲憂窮戚たり獨り廓に處る、美なる一人あり心繹ず、鄉を去り家を離れて徠りて遠客たり、超として逍遙今焉に薄る。

【句解】戚は慼なり、痛と同じ。廓は空廓なり、孤立にして賴る處無し。有美一人 王逸曰く位尊く服好、懷王を謂ふ。朱子曰く美なる一人は屈原を謂ふ。悲憂の人も屈原なり、美人も屈原なり、王說は誤る。心不繹 繹は絲を抽が本義、「ノブル」陳、「ヲサム」理、今は解ずと義を取る、終身悲憂窮戚以て心の繹解せし時無し、而かも祖國を去て、遠く江南に來り處る。焉は五臣云ふ何なり、薄は止なり、焉を「コヽニ」此と訓すは文の味を損す、何處に薄止し玉ふぞやと、門人が師を想像する、以て文に味を生ずるなり。廓と繹と客と薄と韵を連續す。

專思君兮不可化　蓄怨兮積思　心煩憺兮

忘食事　願一見兮道余意　君之心兮與余異　車既駕兮朅而歸　不得見兮心傷悲

專ら君を思へども化す可らず、君知らず奈何かす可き、怨を蓄へ思を積む、心煩憺たり食事を忘る、願くは一たび見えて余が意を道はん、君が心余と異なる、車既に駕し朅て歸る、見ることを得ずして心傷悲す。

【句解】思君　思ふ者は屈原、思はるる君は楚王なり。而かも不可化　楚王の佞を信じ、忠を忌む心は變化せず。不知は王逸は解して不智と爲すものの如し、不智にはあらず、君が屈の情を知らざるなり。可奈何とは嘆息の外無きの言なり。蓄怨積思　王逸曰く恨を結んで心に在り慮憤鬱するなり。食事は洪子曰く食と事とを忘る。食の一事にあらず、一見して眞思を披陳せんと願ふも能はず。車は楚王の駕する車なり。朅は去なり、去て歸り、屈原に見ゆるを嫌ふとなり、宋玉が師に代つて師の情を敍ぶ。化と何と韵、事と意と異と韵、歸と悲と韵なり。二段美人君を思うて見ることを得ず。

倚結軨兮長太息　涕潺湲兮下霑軾　忼慨絶兮不得　中瞀亂兮迷惑　私自憐兮何極　心怦怦兮諒直

結軨に倚て長く太息す、涕潺湲たり下りて軾を霑す、忼慨絶て得ず、中瞀亂たり迷惑す、私に自ら憐むこと何ぞ極らん、心怦怦として諒に直し。

【句解】結軨は車の轄なり、軾板の處に木を兩方より遣り締たるもの、此の處に身を倚せて長太息する。涕は涕涙。潺湲は涕流の形容。霑軾「クサビ」に倚て流るる涕は「シキミ」を霑すとなり。忼慨は慷慨と同じ。絶は痛絶、絶無の絶にあらず。不得は志を得ざるなり。中は心中。瞀亂は昏亂と同じ。迷惑　彼に迷ひ、此に惑ふ、忼慨の心强く起るときは、前後彼此皆昏亂して定むる處無きなり。私自憐兮何極　自ら失志を憐む、他人の憐むを待たざるなり。怦怦は洪子曰く心の急く貌。或は云ふ心不足の貌。或は云ふ忠謹の貌。三義共に通ず。諒直は正直なり。屈復曰く怦怦諒直の心、私に自ら憐れむ、窮極の時有ること無きなり、倒句法なり。此の三段美人悲痛已む無きなり。宋玉、其の師が君を思ふの心を追述するなり。息と軾と得と惑と極と直と皆一韵を連續す。

皇天平分四時兮　竊獨悲此廩秋　白露既下百草兮　奄離披此梧楸　去白日之昭昭兮　襲長夜之悠悠　離芳藹之方壯兮余萎約而悲愁

皇天四時を平分す、竊に獨此の廩秋を悲しむ、白露既に百草に下りて、奄ち此の梧楸を離披す、白日の昭昭を去て、長夜の悠悠を襲ぐ、芳藹の方に壯なるに離て、余萎約して悲愁す。

【句解】平分四時　皇天よりすれば、春は春として芳を生じ、夏は夏、秋は秋、冬は冬と各の其の動あるを示す、然るに人間は竊獨悲此廩秋　秋の氣に觸れて春に對する情と一變す、是れ皇天の預かり知る所にあらず。廩は凛烈なり、秋氣凛然として寒きなり。白露既下百草　露は夜氣の液なれば春も下る、夏も下る、然れども白露は秋より外下ること無し、寒の爲め凝りて霜と爲るが故に百草皆枯る。奄は忽なり、遽なり。離披は梧や楸の分散する形容。早く凋み、其の凋樣の蕭條たるものは梧桐と楸梓となり。去白日昭昭　襲長夜悠悠　屈復曰く此の二句は人の將に死せんとするに喩ふ。白日は生、長夜は死、昭昭は明明と同じ、悠悠は遠遠と同じ。襲は洪子曰く因なり入なり、離は値なり。芳藹方壯は以て年少の盛美繁茂に喩ふ、人間も草木も共に同じ。余は宋玉自ら謂ふ。萎は萎枯。約は窮約なり。佛語を借りて之を言へば、秋の氣は非情も悲しみ、有情も亦愁ふなり。此の一段時に遭うて悲むに堪へたるなり。秋と楸と悠と愁と韵なり。

秋既先戒以白露兮　冬又申之以嚴霜　收恢台之孟夏兮　然

欿傺而沈臧　葉菸邑而無色兮　枝煩挐而交横　顏淫溢而將罷兮　柯彷彿而萎黃　葥櫹槮之可哀兮　形銷鑠而瘀傷　惟其紛糅而將落兮　恨其失時而無當

秋既に先づ戒むるに白露を以てし、冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす、恢台の孟夏を收めて、然く欿傺して沈臧す、葉菸邑として色無く、枝煩挐として交も横る、顏淫溢として將に罷んとす、柯彷彿として萎黃す、葥と櫹槮の哀む可し、形銷鑠として瘀傷す、其の紛糅として將に落んとするを惟ひ、其の時を失して當る無きを恨む。

【句解】白露の句は屈原が遠遷せらるるに喩へ、嚴霜の句は其の放逐せらるるに喩ふ。戒は人に警戒する也。恢台は黃山谷曰く恢は大なり、台は胎なり、夏氣大にして物を育するを言ふなり。君の仁恩を施して、人民を安寧にするは、亦猶夏の如くなるべきなり。然るに之を收むるは卽ち其の仁恩を施せざるなり、特に屈原の如き忠誠の士を憫まざるに對して言ふ。欿は陷と坎と同じ、傺は止なり住なり、夏氣は物を長養すべきなるに反對に之を落し入て沈臧するなり。臧は藏と通ずるなり。葉樹木とすれば葉なり、人とすれば顏なり。菸邑　菸は元來臭草の名、邑は草の傷壞するなり、「シボム」と訓して可し、樹葉は菸邑と謂ふ可し、顏色は憔悴と謂ふ可

し。煩挐は枝と枝とが摑み合ふが如きを言ふ、五臣云ふ煩挐は擾亂なり。顏は顏容なり。淫溢は積漸なりと注して、彌が上になることなり。罷は罷乏なり、毀疲なり。柯は柯條なり。彷彿は有るが如く、無きが如きの形容。萎黃は樹木の將に枯死せんとするなり。蔄は樹葉落ち盡くして枝の竦なり。櫹槮は樹の長き形容、葉が無くて、鬼手の如き枝が聳えて立つ狀。可哀となり。銷鑠は人の形の肉が落ち、皮膚のクヅレル樣を言ふ。瘀傷は病の爲め痍き、破れるなり。紛糅は紛亂雜糅なり。將落　人の將に毀ち落ちんとするは、樹木の將に枯死せんとするに同じ。恨失時無當　五臣云ふ其の明時を失し、賢君と相當らざるを悵恨なり。霜と臧と橫と黃と傷と當と韵なり。

擥騑轡而下節兮　聊逍遙以相佯　歲忽忽而遒盡兮　恐余壽之弗將　悼余生之不時兮　逢此世之俇攘　澹容與而獨倚兮　蟋蟀鳴此西堂　心怵惕而震盪兮　何所憂之多方　卬明月而太息兮　步列星而極明

騑の轡を擥て節を下し、聊か逍遙し以て相佯す、歲忽忽として遒盡く、余が壽の將らざらんことを恐る、余が生の時ならざることを悼む、此の世の俇攘に逢ひ、澹容與として獨り倚る、蟋蟀此

の西堂に鳴き、心怵惕として震盪す、何ぞ憂る所の方多き、明月を卬で太息す、列星に步して而して明を極む。

【句解】擥は擥持、手にて取るなり。此の擥字古より使用し來る、然れども擥を以て正とし、擥は誤なりと洪子の說なり。騑は驂馬なり。下節は按節なり、疾行せずして徐行するを言ふ、何故に徐行するや乃ち世に用ひらるる者にあらざればなり。逍遙と相佯は意義殆んど同じ、乙地にブラブラ、甲地にブラブラするなり。遒は迫なり、盡なり。弗將　不長と同じ。屈復曰く死して益あらしめば、時を失するも當る有り、今死して益無し、時を失して當る無きなり、己が死して國に益なきに喩ふ。故に逍遙相佯して、以て死せざるべし、忽ち念ふ歲忽ち遒り盡き、余が生の亦限り有るを恐るるなり、非情も有情も、其の運命の同一なるを見る。悼は痛悼。不時　生れて明君に出會せず良に時ならざるなり。俇攘は憂懼の貌、恇勷、趣躟、共に同じ、又狂遽の貌、世の動亂に逢ふと見て妨げなし。澹容與獨倚は王逸曰く煢煢獨立して朋黨無きなり。五臣云ふ、澹容與は徐步なり、倚は立なり。怵惕は震盪なり、震盪するが故に怵惕す、怵惕するが故に震盪するなり、動亂の世に遭うて、心が驚かされて靜かならざるなり。多方　憂が一事の爲めならず、萬事憂ひなり、是を以て多方と言ふ。卬は仰と同じ。極明　列星の下に

徐歩して、明月を仰望して太息し、以て永夜寐ず、乃ち天明に至るとなり。此の一段我が生の時を得ざるに就て其の情を敍ぶ。攘と堂と方と明と韵なり。屈復曰く首段四時を以て秋を起し、次段木の搖落を以て己が歲月を感じ、暗に秋字を含み、三段秋夜徙倚を以て、明かに秋字を點じて結ぶ。通章悲秋を合寫す。

竊悲夫蕙華之曾敷兮　紛旖旎乎都房」　何曾華之無」實兮　從」風雨而飛颺　以爲君獨服」此蕙兮　羌無」以異於衆芳」

竊に悲しむ夫の蕙華の曾て敷を、紛として都房に旖旎たり、何ぞ曾華の實無き、風雨に從つて飛颺す、以爲く君獨り此の蕙を服すと、羌以て衆芳に異なること無し。

【句解】●曾は重なり。●敷は布なり。王逸曰く蕙草芬芳は以て在位の貴臣を興して曰ふ。絅齋曰く君に比して曰ふ。恐くは誤る。王逸の貴臣に興する說可なり、臣下共が盛に花布くは是れ佞の致す所、忠臣より之を見れば竊かに悲しむ所以なり。●旖旎は王逸曰く被服宮殿に盛飾するなり。●都は大なり。●房は華房なり。卽ち貴人の花園を言ふ、花園に羣花が旖旎として開く、燦爛と開くと言ふがごとし、悲しいかな此の花は美麗なるが、實の無きを如何せん。而して風雨に堪ふる能はず、慘風凄雨至れば、忽ち飛颺し盡くし、何等の跡方も無し。●君獨服此蕙　君は屈

原を指すにあらず、楚王を指すなり。王逸曰く體正氣を受けて高明なり。王は屈原を指して曰ふと解するものの如し。大に誤る。下文を熟讀するときは其の誤顯然たるべし。●羌は鳴乎。●無異衆芳　佞臣の言に從ふ君は、別に君たるの智あるにあらず。是を以て衆芳と殆んど同一、共に愚なり、共に臭なり。房と颺と芳と韵なり。

閔奇思之不通兮　將去」君而高翔」　心閔憐之慘悽兮　願一見」而有」明　重無」怨而生離兮　中結軫而增」傷

奇思の通ぜざるを閔んで、將に君を去て高翔せんとす、心閔憐して慘悽たり、願くは一見して明あらん、重く怨無くして生離す、中結軫して傷を增す。

【句解】●奇思は俗思と反對、屈原が世にも珍らしき忠誠の思想を指して言ふ。●不通　王が其の奇思を容れず、是れ通ぜざるなり。●去君高翔　不通の君と共にする能はず、乃ち翔て遠去す。●一見有明　屈原が君を去るに臨み、忠誠の志猶ほ息まず、君に一見して自ら其の明を明にせんと欲する意を言ふ。原が言ふ所の句と意とを宋玉之を重用するに過ぎず。●重無怨而生離　此等の文字皆屈賦の中に在り、屈原が言ふ所を再言するのみ。中結軫增傷　軫は憂傷の脗をエグルが如きを言ふ。翔と明と傷と韵なり。

豈不鬱陶而思君兮　君之門以九重　猛犬狺狺而迎吠兮　關梁閉而不通　皇天淫溢而秋霖兮　后土何時而得漧　塊獨守此無澤兮　仰浮雲而永歎

豈鬱陶として君を思はざらん、君が門九重を以てす、猛犬狺狺として迎へ吠え、關梁閉て通せず、皇天淫溢として秋霖なり、后土何れの時か漧くを得ん、塊獨り此の澤無きを守る、浮雲を仰いで永歎す。

【句解】鬱陶は『尚書』に出る文字、曰く鬱陶乎余心とあり、胷中一杯に張り詰める憂心を以て君を思はざらんやとなり。君門九重　君は九重の深きに在り、謁見する能はず。猛犬は佞人に喩ふ。狺狺は犬の爭ひ吠ゆる形容、佞人が喋喋と讒言するに喩ふ。秋霖は連日の久雨を言ふ。漧は乾なり、佞人等は等しく、君の恩澤を蒙り、曾て乾くときなし。塊は「ツチクレ」以て屈原に喩ふ。屈原は彼の塊の如く、曾て澤を蒙るなし。是を以て浮雲を仰望して永歎するに至る。重と通と韵、漧と嘆と韵なり。以上君臣の隔絶せるを言ふ。

何時俗之工巧兮　背繩墨而改錯　卻騏驥而不乘兮　策駑駘而取路　當世豈無騏驥兮　誠莫之能善御　見執轡者非其人

兮　故跼跳而遠去　鳧鴈皆唼夫梁藻兮　鳳愈飄翔而高擧

何ぞ時俗の工巧なる、繩墨に背きて錯を改む、騏驥を卻て乘らず、駑駘に策うつて路を取る、當世豈騏驥無からんや、誠に之を能く善御する莫し、轡を執る者を見るに其の人にあらず、故に跼跳として遠く去る、鳧鴈皆夫の梁藻を唼ふ、鳳愈よ飄へり翔て高く擧る。

【句解】工巧　時俗は多く詐工、僞巧なり。繩墨は工人の背く可らざるものなり、然るに詐工僞巧の徒は此の繩墨に背きて以て得意とす。錯は錯置なり、法を置くなり、置くべき法を改むるは其れ時俗が工巧なればなり。時俗が正路を弃て、邪路を取るに喩ふ。騏驥は以て忠誠の士に喩へ、駑駘は以て讒佞の者に喩ふ。千里の能ある忠士は用ひられず、眼前の路すら明かならざる愚人は用ひらるるなり。跼跳は一本騙跳に作る。洪子曰く馬立て常ならざ、之を騙と言ふ。騙跳は躍なり、乃ち騙は踡跼にて「セグクマル」曲なり、前方へ足を出す能はざるの貌。而かも跳るは遠く去らざるを得ざればなり、勇躍して遠去するとは反對なり。鳧鴈皆唼夫梁藻　羣小を以て鳧鴈に喩ふ、重祿を以て梁藻に喩ふ。鳳高擧　鳳は何ぞ鳧鴈と同じく梁藻を唼ふを欲せんや、飛翔して去る。錯と路と御と去と擧と韵なり。一段賢者の用ひられざるを言ふ、一般を稱して言ふ、特に屈原のみを言ふにあらず。

圜鑿而方枘兮　吾固知其鉏錯而難入　衆鳥皆有所集兮　願銜枚而無言兮　嘗被君之渥洽兮　太公九十乃顯榮兮　誠未遇其匹合

圜鑿にして方枘、吾固に其の鉏錯して入り難きを知る、衆鳥皆集る所無し、願くは枚を銜んで言こと無けん、嘗て君が渥洽を被れり、太公九十にして乃ち顯榮、誠に未だ其の匹合に遇はず。

【句解】●圜鑿方枘の解は「離騷」に於て詳說せり。●鉏錯は齟齬と同じ。彼と此と全く反對なるを言ふ。●衆鳥は衆人。●鳳は賢人。●遑遑は惶惶と同じ。其の所を得ざる貌と注して、身の置き所無きなり。●銜枚　古代軍に用ふる箸の如き形の物を枚と云ふ。橫に之を銜む、兩頭に繩あり、項後に結ぶ、然るときは聲を發する能はず。●饒舌者は默する者に及かず。●嘗被君之渥洽　默するを以て無事と考ふれども、再思するに嘗ては君の渥厚洽澤を被むる身、何ぞ君の爲め言はざるを得んや。●太公は周の呂望、文王に遇うて九十顯榮を得たり。●誠未遇其匹合　太公も九十まで生きざるときは、其の匹合に遇はず、幸にして九十を過ぐ、是を以て西伯に遇へり。吾は太公の壽無し、何ぞ他日の匹合を待つを得ん。入と集と洽と合と韵なり。

謂騏驥兮安歸　謂鳳凰兮安棲　兮擧肥　騏驥伏匿而不見兮　鳳皇高飛而不下　鳥獸猶知懷德兮　何云賢士之不處

騏驥の安に歸んと謂ひ、鳳凰の安に棲と謂ひ、古を變へ俗を易へ世衰ふ、今の相者肥たるを擧ぐ、騏驥伏し匿れて見えず、鳳皇高く飛で下らず、鳥獸猶ほ德に懷くを知る、何ぞ賢士の處らずと云はん。

【句解】●安歸　●安棲　騏驥は遠く去る、其の去て歸る所は何處ぞや。鳳皇は高く擧がる、其の擧がり去て棲む所は何處ぞや。●變古易俗　愚俗の多くは古の法を變じて新を好み、常の俗を易て以て時世の風を貴む、世の盛に向ふにあらず、今日の馬を相し、人を相する者、古の王良の如き人無く、亦薦尹の如き人無し。是を以て外形に迷ひ、其の瘦馬を舍てて肥馬を擧げ、其の貧士を舍てて富人を取る。是を以て騏驥は伏匿して見えず、鳳凰は高飛して下らず。而かも君に德あるときは、鳳は來り舞ひ、驥は來り躍る。何ぞ德に懷かざることあらん。●賢士は處らざるにあらず、處する能はざるなり。是を以て君に德あらば、賢士は來り必ず此に處らん。文王出れば、太公亦出るを以て知るべきなり。歸と棲

と衰と肥と韵、下と處と韵なり。

驥不ニ驟進而求服ヲ兮　鳳亦不ニ貪餧而妄食一　君弃遠而不レ察兮
雖レ願レ忠其焉得　欲ニ寂漠而絕端ヲ兮　竊不ニ敢忘ニ初之厚德一　獨悲
愁其傷レ人兮　馮鬱鬱其何極

驥驟み進んで服を求めず、鳳亦餧を貪つて妄りに食はず、君弃遠て察せず、忠を願ふと雖も其れ焉ぞ得ん、寂漠として端を絕んと欲す、竊に敢て初の厚德を忘れず、獨り悲愁して其れ人を傷しむ、馮て鬱鬱と其れ何ぞ極らん。

【句解】●求服は我を服車の用に供せよと驥の方からは求めずとなり。●鳳も亦我を餧て吳れよとは乞はず。●願忠焉得　君が士を求めずんば、士は君を求めざるなり。忠士を得んと願はば君は宜しく君たるの德を以てすべきなり、然らずんば焉んぞ得んや。●絕端は緣故とか、因緣とかの意に見よ。緣故を絕て、人をして知らざらしめんと欲するが忠士の志なれども、如何せん。●厚德を嘗て被むり居りし緣故あるを。是を以て悲愁して極まり無きなり。食と得と德と極と韵なり。敢て初德を忘れず、是を以て遠去せざるの意を敍す。

霜露慘悽而交下兮　心尙弃其弗レ濟　霰雪雰糅其增加兮　乃
知レ遭ニ命之將一レ至　願徼レ幸而有レ待兮　泊莽莽與櫰草同死

霜露慘悽として交も下る、心尙ほ棄其れ濟ず、霰雪雰糅して其れ增加ふ、乃ち命の將に至らんとするに遭ふを知る、願は幸を徼めて而して待つことあらん、泊莽莽と櫰草と同じく死ん。

【句解】●棄は『說文』に幸なり。●弗濟　屈復曰く『晉語』に二帝師を用ひ、以て相濟と「注」に濟は當に讀で擠と爲すべし。『字書』に滅なり。滅せざるなり。霰や雪が雰雰として寒威增す加ふ。乃知遭命之將至　卒に誅戮に遇うて、身顚沛するなり。●徼は「モトムル」求なり。命の將に至らんとするを知るも、萬が一幸を求めて待つことあらんも。●泊は泊止。●莽莽は草の盛んなる形容、●櫰は野と同じ、野草と同じく卒に枯死するに至らん。草木が霜露霰雪に遇うて、或は强く被むるあり、或は弱く被むるありて、枯死の遲速は相違すべきも、要するに枯死と云ふ運命は免る能はず、以て憂國の忠士、衰亂の世に遇うて、己獨り生る能はざるを悲しむなり。濟と至と死と韵なり。

願自直而徑往兮　路壅絕而不レ通　欲ニ循一レ道而平驅兮　又未レ知ニ
其所從　然中路而迷惑兮　自厭按而學レ誦　性愚陋以褊淺兮
信未レ達ニ乎從容一　竊美ニ申包胥之氣晨一兮　恐時世之不レ固

願くは自ら直して徑往ん、路壅絶して通せず、道に循つて平驅せんと欲すれば、又未だ其の從る所を知らず、然れども中路にして迷惑し、自ら厭按して誦を學ぶ、性愚陋にして以て褊淺なり、信に未だ從容に達らず、竊に申包胥が氣の晨なるを美す、恐くは時世の固じからざることを。

【句解】自直徑往は人の紹介を待たず、自ら往くなり。而かも讒人の爲め路は壅がれて通ずる無し。循道平驅　普通の常道に循て驅るがよいか、而かも此の常道は我として其の從る所を知らず、彼も此も共に不可なり。中路に迷惑するが故に、強て歌なり詩なりを高吟す。厭按は其の「イラダツ」心を抑押なり。褊淺は深沈と反對の文字。褊は狹小、深沈寬大の量なきなり。未達從容　從容は卽ち深沈の人なり。竊美申包胥之氣晨　申包胥は楚の太夫。伍子胥罪を楚に得て、將に吳に適んとす、申包胥と別を告げ且曰く我必ず郢を亡さん。包胥が曰く子能く之を亡せ、我能く之を存せん。子胥吳に奔りて、吳王闔閭の臣と爲る。兵を興し、楚を伐て郢を破る。昭王出奔す。是に於て包胥、秦に之て救の兵を請ふ。秦庭に鶴立し、啼呼悲泣、七日七夜聲を絶たず、勺飮口に入れず、秦の哀公之を憫んで曰く、楚無道と雖も臣有て是の若し、存する可んやと、乃ち車五百乘を發し、楚を救うて吳の擊つ。六月吳の兵を稷に敗る。楚の昭王郢に復るを得。此の包胥の氣を晨なりと思ふ。乃ち之に傚はんと欲するも、時世の同じ

からざるを恐るとなり。包は昭王が重用したるを以て此の力を發揮せり。屈原は用ふる王無し、遂に包胥が事を學ばずとなり。固は誤字なり同に作るべし。通と從と誦と容と同と韵なり。楚亡びて己古人の能く存する如くなる能はざるを言ふ。

何時俗之工巧兮　滅規榘而改鑿　獨耿介而不隨兮　願慕先聖之遺教　處濁世而顯榮兮　非余心之所樂　與其無義而有名兮　寧窮處而守高

何ぞ時俗の工巧なる、規榘を滅して鑿を改め、獨り耿介にして隨はず、願くは先聖の遺教を慕はん、濁世に處して顯榮なるは、余が心の樂ふ所にあらず、其の義無うして名有らん與は、寧ろ窮處して高きを守らん。

【句解】規榘は前の繩墨と同じ。改鑿は前の改錯と同じ。濁世顯榮　無義有名　王逸曰く吳の太宰嚭の如き徒、是れなり。窮處守高　高節を守持する者、夷齊の首陽山に餓死する如き是れなり。先聖は卽ち夷齊の如き人を指して言ふ。鑿と錯と榘と高と韵なり。

食不厭而爲飽兮　衣不苟而爲溫　竊慕詩人之遺風兮　願託志乎素餐　蹇充倔而無端兮　泊莽莽而無垠　無衣裘以御冬

兮　恐溘死而不「得」見乎陽春」

食嬾も飽ことを爲ず、衣苟も溫なることを爲ず、竊に詩人の遺風を慕ひ、願くは志を素餐に託ん、塞充偃して端無し、泊莽莽として垠り無し、衣裘の以て冬を御ぐ無くんば、恐くは溘死して陽春を見るを得ず。

【句解】●嬾は卽ち偷なり、偷は盜なり、苟且なり。偷せずして食飽くは人道を損せざるも、偷にして飽き、苟くもして溫なるは共に小人の所爲。詩人君子は此の如きことを爲ず。『詩經』に○○○は彼君子兮、○○○不素餐兮の句あり、正しく食ひ、正しく衣る者は聖人も然り、君子詩人皆然るなり。之に反して素餐卽ち祿を偷みて食ふもの、惡人なり小人なり。此の小人近來學校の先生などぞに多くあり。宋玉をして見せしめば其れ何と謂ふや。志を素餐せざる人に傚はんことを願ふなり。●塞は鳴乎。●充偃は洪子曰く喜んで節を失する貌。尸位素餐は所謂不義にして富むの類。是の故に喜ぶべきにあらず、而かも之を懽ぶ小人の情然るなり。朱子は洪子の說を取る。絅齋曰く充偃は氣の屈託して、嬉しいことのないを云ふ。朱子に背かずや。無端は俗に云ふ「ハテシナシ」なり。不義にして富で「ハテシ」無きなり。●泊莽莽無垠　素餐せざるの人は、山野に幽處して鄰無きなり。垠は岸なり。御は禦と同じ、飢寒を禦ぐの縣衣の溫なる無し。●恐溘死不得

●●●見乎陽春　上文の霜露慘悽の句に應ず。陽春を待ずして溘然として死すべしとなり。溫と餐と垠と春と韵なり。屈復曰く楚の必ず亡ぶや、能く復興する能はざるを知るなり。此の章起句秋字を明點し、中二段悲字を單寫し、末段又冬春を以て秋字を夾寫す。舍て露さず、法の備らざるは無し。

靚杪秋之遙夜兮　心繚悷而有「哀　春秋逴逴而日高兮　然惆悵而自悲　四時遞來而卒「歲兮　陰陽不」可「與儷偕」

靚たり杪秋の遙夜、心繚悷して哀あり、春秋逴逴として日高し、然も惆悵として自ら悲む、四時遞に來りて歲を卒ふ、陰陽與に儷偕すべからず。

【句解】●靚は靜と同じ。●杪秋は晩秋と同じ。杪は末、末は晩なり。●遙夜は永夜と同じ。●繚は繳繚、心の活潑ならずしてクルクル纏うて解けざる貌。●悷は悲結なり。●逴逴は遠遠と同じ。春秋は遠慮會釋無く過ぎ去ること。●自悲する所以は志し立たざればなり。●遞は迭なり、春去て夏、夏去て秋と迭に交代するなり。●陰陽不可與儷偕　暑往寒來、追逐し難を言ふ。儷は「ナラブ」偕は「トモナフ」年歲は我と偕に去らず、吾は年歲と別れて獨り憂に留るとなり。哀と悲と偕と韵なり。遙夜自ら悲しむ、四時逝き易く、己逝き易からざるを言ふなり。

白日晼晚其將入兮　明月銷鑠而減毀　歲忽忽而遒盡兮　老冉冉而愈弛　心搖悅而日𢍰兮　然怊悵而無冀　中憯惻之悽愴兮　長太息而增欷

白日晼晚と其れ將に入らんとす、明月銷鑠して減毀す、歲忽忽として遒り盡く、老冉冉として愈よ弛ぶ、心搖悅として日に𢍰ふ、然も怊悵として冀ふ無し、中憯惻と悽愴と、長太息して欷を增す。

【句解】晼晚は景昳なりと注して、日影の昃を言ふ。何處と方角を定めず、次第次第に暗くなる形容、以て人の才力衰退するに喩ふ。明月銷鑠減毀　十五夜のみ圓滿にして鏡の如きも、十六十七と漸漸に光を減じ、形を毀く、以て人の顏色憔悴するに喩ふ。而して歲は忽忽と盡き、老は冉冉と至る。心搖悅而日𢍰　王逸曰く意中私に喜び想ひ用て施するなり。洪子曰く搖は動なり、愮は憂なり、喜悅の義無し。一本愮悅に作ればなり。今謂く洪子は王逸を嫌うて喜悅の義無しと言ふ。而かも悅の字に就て何等の解も下さず、原が意憂への中にも太公の如きの希望動き、確然たる事は無きも、多少は其の幸福を想像すること無しと斷ずべからず。然らば喜悅の意味ありと見て誤らずと信ず。然怊悵而無冀　然かも日に𢍰ふ所は遂に空想にて、又怊悵として冀ふの本心は有ること無し。一喜一憂、文の錯綜妙を極む。中は中心、憯惻は痛なり。悽

愴は悲なり、欷は嗟なり。毀と弛と冀と欷と韵なり。烈士暮年、壯心哀しむべし。

年洋洋以日往兮　老嵺廓而無處　事亹亹而覬進兮　蹇淹留而躊躇

年洋洋として以て日に往き、老嵺廓として處無し、事亹亹として進むことを覬ふ、蹇淹留して躊躇す。

【句解】洋洋は水の盛んなる形容。借りて以て年歲の堂堂と流れ去るに喩ふ。嵺廓は洪子曰く空なり。屈復曰く共に處るべきの人無きなり。事は萬事。亹亹は進む貌。覬は幸なり、希望なり。淹留躊躇　進むを冀うて、而かも淹留して躊躇す、良に哀むべきなり。處と躇と韵なり。

何氾濫之浮雲兮　猋廱蔽此明月　忠昭昭而願見兮　然霠曀而莫達　願皓日之顯行兮　雲蒙蒙而蔽之　竊不自料而願忠兮　或黕點而汙之

何ぞ氾濫の浮雲ぞ、猋として此の明月を廱蔽す、忠昭昭として見んことを願へども、然かも霠曀として達すること莫し、皓日の顯行を願へども、雲蒙蒙として之を蔽ふ、竊に自ら料らず忠ならんことを願へども、或は黕點として之を汙す。

【句解】氾濫は浮雲のハビコリて盛なる形容。猋は速疾の貌。何處とも無く浮雲が湧くかと思ふ間も無く、速疾に此の明月を廱蔽するとなり。忠良を明月に喩へ、浮雲を讒佞に喩ふ。忠昭昭 蹇蹇の誠を陳せんと欲するも、如何せん霠雲は日を蔽ひ、曀風は人を吹き、我が志は竟に達する能はず、霠も曀も共に陰黑なるを言ふ。皓日 蒙蒙は前文を重ねて布延す。黕は垢の全體が黑うなり燻たるを言ふ。汙は沾辱なり。上下天地、暗雲蒙蒙たり、忠臣用ひられざる所以なり。月と達と韵、之と之と韵なり。

堯舜之抗行兮　瞭冥冥而薄天　何險巇之嫉妬兮　被以不慈之僞名　彼日月之照明兮　尙黯黮而有瑕　何況一國之事兮　亦多端而膠加

堯舜の抗行なりし、瞭冥冥として天に薄れり、何ぞ險巇の嫉妬せる、被むらすに不慈の僞名を以てす、彼の日月の照明なる、尙ほ黯黮として瑕あり、何況や一國の事をや、亦多端にして膠加をや。

【句解】抗行は高行と同じ。瞭は明瞭なり。冥冥は暗暗とは異なる「ハルカ」又「カスカ」の意。薄天 其の德天に薄る。險巇は惑亂を好むの主、堯舜の如き無爲にして天下を治むる明主を嫉

妬するなり。堯舜に不慈や不孝の有るべき筈なし。而かも堯は不慈なり、舜は不孝なりと毒するに至る。僞名にあらずして何ぞ。堯は丹朱に天下を傳へざるを以て、舜は瞽瞍を立てざるを以てなり。日月すら黯黮たる時あり、況や人間の事をや。白もあり黑もあり、善もあり惡もあり良に多端なり。膠加 卽ち戾ること當然なり。君善にして臣惡なるも、戾なり。君惡にして臣善なるも戾なり。調子の合はざるものは皆戾るなり。上下の蒙蔽、恠しむに足らざるなり。天と名と韵、瑕と加と韵なり。

被荷裯之晏晏兮　然潢洋而不可帶　既驕美而伐武兮　負左右之耿介　憎慍惀之修美兮　好夫人之慷慨　衆踥蹀而日進兮　美超遠而逾邁　農夫輟耕而容與兮　恐田野之蕪穢　事緜緜而多私兮　竊悼後之危敗　世雷同而炫曜兮　何毀譽之昧昧

荷裯の晏晏たるを被れども、然も潢洋として帶ぶ可らず、既に驕美にして武に伐る、左右の耿介を負うて、慍惀の修美を憎む、夫の人の慷慨を好す、衆踥蹀として日に進む、超遠を美して逾え邁く、農夫耕を輟めて容與、恐くは田野の蕪穢せん、事緜緜として私多し、竊かに後の危敗を

悼む、世雷同して炫曜す、何ぞ毀譽の昧昧たる。

【句解】荷裯は蓮葉にて襖を作る。晏晏は柔美なる形容。被は服なり。潢洋は浩蕩と同じ。美なることは美なり、然かも人間の實際として此の如き物は不可帶となり。荷葉を服、破れざる者は蛙あるのみ。人之を帶ば忽ち壞敗す。驕美伐武伐る、暗に懷王を指す。負左右耿介　王自ら美武に矜誇す。而して左右の侍臣、耿介卽ち剛勇の士ありと負恃。憎慍惀之修美　王逸曰く孫叔敖と子文とを惡むなり。屈復曰く忠直慍惀の修美を憎むなり。慍は怒なり、恨なり。惀は惀思、思ふなり。然るときは屈原を指して言ふものと解すべし、王逸は誤る。好夫人慷慨　夫人とは左右の佞臣、彼等は僞慷慨を作して以て王に好るるなり。陰辨慶の類を指して言ふ。衆は多勢なり。踥蹀は元來馬の行く貌。今以て王の幄に佞人等が來往頻繁なるに喩ふ。而して王は苦口直諫の良藥を憎む。農夫輟耕容與　王逸曰く賦斂の重數に愁苦するが故に耕を輟めて容與するなり。朱子曰く國政を恤まずして嬉游するなり。王と侍臣は國政を恤まずして嬉游するも、農夫とは何等の關係なし。農夫の耕を輟むる所以は何ぞ。王逸の言の如く賦斂の重きを愁へて以て輟むるにあるか。又農夫も怠惰を貪ぼり、以て容與するか、或は王の國政を治めざるは、農夫が田を耕やさざるが如きものなりと喩ふる

か、文意明了ならず、後賢の是正を乞ふ所なり。蓋し農夫耕さずんば、田野の蕪穢は當然なり、五穀登るとき有ること沒し。事緜緜　絲の絕えざる如く事が永續する、緜緜として私事多きなり。私事は何ぞ、後宮の徒に阿付すれば、竟に高位高官に登るを得ることが出來る類、總て是れ私なり。竊悼　忠臣は此の如きことを見て竊かに悼む。後は一國の子孫を指す。危敗　親が惡黨にして、子孫に明君あるべからず、國の危敗知るべきのみ。雷同は善とも惡とも自分で判別する能力なきものが、聲の大なる者に贊成する、是を雷同と言ふ。而して此の無智の徒も炫曜するに至る。毀譽昧昧　善と惡とを分判する能はざる者、皆是れ昧昧なり。帶と介と慨と邁と穢と敗と昧と韵なり。暗君と愚臣と小民と共に非なるを悲しむなり。

今修飾而窺鏡兮　後尙可以竄藏
而難當　卒雘薇此浮雲兮　下暗漠而無光

今修飾して鏡を窺ふ、後尙ほ以て竄し藏る可し、願くは言を夫の流星に寄せん、羌儵忽として當り難し、卒に此の浮雲に雘薇せられ、下暗漠にして光無し。

【句解】修飾而窺鏡　王逸曰く言と行と面に副うて慙ざるなり。後尙可以竄藏　朱子曰く德を修め、政を行うて人言を聽き、往事を考へて以て自ら鑑みるなり。後尙可以竄藏　德を修め、以て忠臣の言

を聽かば、何ぞ南方に竄げ藏れて、最後に國亡ぶに到るの悲を見ざらんにと。寄言夫流星　前言を以て夫の流星に告げんと欲するも、流星は既に流れ去て、又値ふ可らず、國滅び將死するときは天必ず流星あるなり。●●倏忽は流星の速疾にして、當り難しとなり。遂に萬事浮雲の靉●●靆する所と爲て、下土は暗漠として光輝無し、忠臣遂に光を失するに至る。屈復曰く此に至る八辯、一段比と賦と相間る、て得べからざるを言ふ。藏と當と光と韵なり。屈復曰く諫んと欲し各の四句を以てす。二段八句中、比を以て二句に間へ、三段二句を比起し、賦六句、比二句、賦四句、末段皆賦、錯綜變化の甚し、亦是れ悲字を單寫す。

堯舜皆有レ所二擧任一兮　故高レ枕而自適　諒無レ怨二於天下一兮　心焉取二此怵惕一　乘二騏驥之瀏瀏一兮　馭安用二夫強策一　諒城郭之不レ足レ恃兮　雖二重介一之何益

堯舜皆擧任する所あり、故に枕を高うして自ら適す、諒に天下に怨無し、心焉ぞ此の怵惕を取ん、騏驥の瀏瀏たるに乘り、馭すること安ぞ夫の強策を用ひん、諒に城郭の恃に足らざるを、重介と雖も何の益かあらん。

【句解】●●擧任　堯は舜を擧任し、舜は禹を擧任し、之を信じ、之に任す。是を以て高枕にして

●●自適するなり。天下に怨無きときは、心中焉んぞ又怵惕卽ち驚くことも無く、畏るることも無し。●●瀏瀏は水の流るる形容。●●騏驥の如き名馬は、鞭を用ひずして、能く千里を奔る、之を馭するに強策を用ふる如きは駑馬のみ。名馬は何ぞ強策を用ひん。諒城郭之不足恃　德を以て化成する者は土階三尺にして足る。險阻は何ぞ恃むに足らん。雖重介之何益　甲鎧を被むる武夫も遂に益なきなり。孟子曰く天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと。適と惕と策と益と韵なり。

遑遑遑而無レ終兮　怃慴慴而愁レ約　生二天地一之若レ過兮　功不レ成而無レ効　願沈滯而不レ見兮　尙欲レ布二名乎天下一　然潢洋而不レ遇兮　直恂慈而自苦

遑遑遑として終り無く、怃慴慴として約を愁ふ、天地に生れて過るが若く、功成らずして効無し、願くは沈滯して見れざるも、尙名を天下に布んことを欲す、然かも潢洋として遇はず、直に恂慈として自ら苦めり。

【句解】●遑は遑轉、乃ち「メグル」なり、行て進まざる貌。●●翼翼は飛んと欲して羽を整ふる形、乃ち恭敬と注す。而も斷然と飛ぶ能はず。無終●●　乃ち「ハテシ」なきなり。●怃は悶怃、憂て以て

憤る義。惛惛は『說文』に憒憒なりと、心の動亂する貌。約は窮約、約の字は多義を有する字なるが、今は何物にか檢束せらるるが如きを愁ふとなり。セハセバシキを愁ふと又通ず。生天地之若過　王逸曰く人の天地の間に生る、忽ち雲馳せ、駟隙を過ぐるが若きなり。然るに「若シ過ルカ」と訓したる本あり誤なり。功不成而無效　天下に功を施せず、身に効無きなり。沈滯不見　縱令沈滯潛匿して見れざるも、尙欲布名於天下　名は功名なり。功名を天下に布かんと欲するは烈士の志皆然り。然潢洋而不遇　王逸曰く倀倡時に後れ、逮ぶ所無きなり。倀倡は戾なり。恢愍は惚愁なり、所謂愚昧なり、忠信を死守し以て自ら畢る。自苦を自若、又自善に作るは誤る。約と効と、下と苦と韵なり。

莽洋洋而無極兮　忽翱翔之焉薄　國有讒而不知察兮　焉皇皇而更索　竊戚謳於車下兮　桓公聞而知之　無伯樂之善相兮　今誰使乎譽之　桓公聞而知之　紛忳忳之願忠兮　妬被離而鄣之

莽洋洋として極り無し、忽ち翱翔し焉に薄ん、國に讒有れども察ことを知らず、焉んぞ皇皇として更め索めん、竊戚車下に謳ふ、桓公聞て之を知る、伯樂が善相する無くんば、今誰か之を譽し

めん、悶として流涕し以て聊か慮る、惟著意して之を得たり、紛忳忳と忠を願へども、妬に離て被れて之に鄣ふ。

【句解】洋洋無極　王逸曰く曠野に周行、將に何くに之かんとする。翱翔焉薄　四海に浮游して集る所無き也。有讒不知察　察は乘の古字、暗主が忠臣を用ふる能はざるの意。洪子曰く此句は曹子建以て屈子の語と爲す。皇皇は遑遑と同じ、急遽の形容。更は洪子曰く平聲と。乃ち「フタタビ」にあらず、「アラタメ」て索めんとなり。竊戚　桓公　齊の桓公、宋の桓公を攻め軍を馳するとき路旁に牧夫あり。歌うて曰く、南山燦たり、白石爛たり、中に鯉魚の尺半なるあり、生れて堯と舜禪とに逢はず、短褐單衣、纔かに骭に至り、脣より牛に飯して夜半に至る。長夜漫漫何れの時か旦ん、桓公其の凡人にあらざるを知て之を登用す。一匹夫の言も、聖道に合ひ、經術に應ずればなり。伯樂善相　薦代淳于髡に說て曰く、昔人駿馬を賣る者あり、三日市に立つ、人共に言ふこと莫し。伯樂を見るに及んで、環つて之を視る、去て之を顧みるに、價十倍す。足下臣を顧ふに意あるは、其れ伯樂か。伯樂曰く九方皐馬を相る、其の天機を觀る、牝牡驪黃の外に在り。誰使乎譽之　今の世に伯樂が如き者ありて、誰か之を譽むる者ぞ。流涕する所以は世に伯樂なければなり。著意得之　桓公が竊戚を得、駿馬を賣る者が、伯樂を得たるは、

平生賢を思ふの深きため之を得たるなり。著意は其れ平生の用心のみ。忳忳は朱子曰く專一の貌、忠を願ふが專一にして他意なきなり。妬被離而鄣之　讒人輩の嫉妬よりして、君と離れさする。鄣は鄣礙なり、忠を致すの鄣礙を爲すなり。之を他國に求むる能はず、本國の人、已に妬鄣するなり。薄と索と韵、之四字韵なり。

願賜不肖之軀而別離兮　放遊志乎雲中　乘精氣之摶摶兮
騖諸神之湛湛　驂白霓之習習兮　歷羣靈之豐豐　左朱雀之
茇茇兮　右蒼龍之躣躣　屬雷師之闐闐兮　通飛廉之衙衙
前輕輬之鏘鏘兮　後輜乘之從從　載雲旗之委蛇兮　扈屯騎
之容容　計專專之不可化兮　願遂推而爲臧　賴皇天之厚德
兮　還及君之無恙

願くは不肖の軀を賜うて別離せん、志を雲中に放遊し、精氣の摶摶たるに乘て、諸神の湛湛たるを騖す、白霓の習習たるに驂して、羣靈の豐豐たるを歷、朱雀の茇茇たるを左にし、蒼龍の躣躣たるを右にす、雷師の闐闐たるを屬けて、飛廉の衙衙たるを通ず、輕輬の鏘鏘たるを前にし、輜乘の從從たるを後にす、雲旗の委蛇たるを載て、屯騎の容容たるを扈ふ、專專と化ふ可らざる

を計る、願くは遂に推て臧と爲ん、皇天の厚德に賴り、還て君が恙無きに及ばん。

【句解】　不肖之軀　所謂骸骨を乞丐して自ら退き去る。遊志雲中　王逸曰く上豐隆に從つて觀望するなり。精氣は日月を謂ふ。摶摶は團團と同じ、日月の圓形を言ふ。湛湛は厚集の貌、音は「イウ」なり、「タン」にあらず。習習は飛動の貌。豐豐は多きを言ふ。茇茇は飛揚の貌、朱雀の星が飛び揚がるなり。躣躣は行く貌。蒼龍も星なり。闐闐は雷の轟聲。衙衙は風伯即ち飛廉の行く貌。鏘鏘は輕輬即ち輕車の鈴の聲。從從は輜乘即ち車前に輣し、車後に衣する者の鸞聲。委蛇は雲旗の盤紆する貌。容容は羣馬前後に分布して列する貌。專專之不可化　專專は純一なり。王逸曰く我が心石に匪ず、轉すべからず、決して變ぜざるを言ふ。臧は善なり、自ら信ずる所を善と固執するなり。厚德　皇天の厚德を賴と爲す、皇天の德を以て、我が君が恙なき時に一たび之に謁見せんと願ふなり。恙は蟲が人の腹に入て、人の心を食ふもの、古は多く穴居す。是に於て皆問ふ恙なきやと。無事と言ふがごとし。屈復曰く身を乞ひ遠く去らんことを願ふも、而かも終に君を忘れず、楚王恙なきの先に早く死なんと欲するの言外に在り。九篇中悲秋の二字或は分合長短、比賦兼陳、而して藕斷ち絲聯り、深く諷諭の旨を得、亦善く其の志を述ぶと謂ふべし。

卷の第九

招魂

王逸曰く招魂は宋玉が作る所なり。朱子曰く招魂は屈原が作る所。屈復曰く招魂は三閭が作る所。悔翁は朱子を祖述するが爲めに朱文を抄略して新注を作る。故に其の說は全く朱子にして自家の發明する所は微塵も無し。唯獨り此の招魂に於て朱子に服せず、林西仲に從ふ。善に從ふと謂ふべし。林子曰く古人招魂の禮、死者の爲めに行ふ、嗣で亦之を生人に施する者あり。屈原魂魄離散するを以てして招く、尙未だ死せざるに在り。但此の篇千數百年來より、皆以て宋玉の作る所と爲す。王逸茫と攷據無く、遂に其の端に序す。試に問ふ太史公屈原が傳贊を作つて曰く、余招魂を讀で其の志を悲しむ。原が志を悲しむを謂ふか、抑も玉が志を悲しむか、此本辯を置くを待ず。乃ち後世相沿て改めず、世俗魂を招く、皆他人の口を以てするにあらざるは無し。知らず古人文を以て滑稽す、不可なる所無し。且生て自ら祭る者あり、則ち原放るる後、愁苦宣洩すべき無く、題を借り意を寄す。亦其の自招を爲

すを嫌はざるなり。杜子美の「彭衙行」に湯を煖めて我が足を濯ひ、紙を剪て我が魂を招く。是れ道路勞苦の餘、此の禮を爲し、以て之を祓除慰安す。何ぞ嘗て自招にあらずや。篇首の自叙、篇末の亂詞を玩するに、皆君の字を用ひず、朕の字吾の字を用ふ、斷じて他人の口吻に出るにあらず。舊注支飾すべき無く、皆謂ふ宋玉原に代て詞を爲す。此の一番の回護を多とす。故に余其の原が自作たるを決する者は、首尾に自叙亂詞あり及び太史公傳贊の語確として據る可きあるを以て也。若し玉が作に係らば、首尾解說通じ難きは論なし。卽ち篇中亦當に古禮に倣ひ自ら其の招の詞を致すべし。巫陽下招を借るを待ず、游戲に涉るを致す、且許多の畏るべく、樂しむ可きの事を撰出す、茫と知らず、原が立志、九死も未だ悔ず、威の爲めに惕ず、利の爲めに疚からず、其の招を爲すの術、乃ち疎なるなきか。通篇段落甚だ明、開口魂魄離散の因を叙し、轉じて帝巫陽に告て、四方上下に招くに入る。而して故堂居室の樂を以て、招の詞と爲す。又室中堂中の二處を分出す。件件巧妙、人に快樂比無らしむ。而かも終り亂詞の悲愴を以て結と爲す。蓋し懷王秦に留りて返らず、而して君正に臥薪嘗膽の時なるべし。猶ほ江南荒寂の境に向て、夜遊遠獵す。先後從車の中、子蘭、上官靳尙の輩の如きに過ぎず。美政聞くこと無く、國事日に非なり。魂若し歸來せば、觸目傷心、是れ快樂を虛詞と爲す。江南を哀しむ

を實事と爲す。江南を哀しむは、正に楚を哀しみ其の身を愁苦に終る所以。魂魄の離散、帝亦原を如何ともする無き也。或は其の詭怪の談、荒淫の志を爲すを譏る。豈離騷天問に引く所の鬼神異物、皆實に有る所にして詭怪にあらざるか、篇中所謂脩門に入り故居に反は、楚王召還して大に用ふるを指して言ふ。所謂豹飾の侍、步騎の羅は、官屬侍衞從つて以て入朝するを指して言ふ。卽ち帝云ふ所、我之を輔んと欲する者此なり。丈夫志を時に得、社稷を安んじ、民生を奠めば、管仲の三歸、魏絳の女樂の如き皆固より有る所、分を踰るを嫌はず、又何の荒淫か之有らん。世儒目豆の如く、且文義を看る不明、是の說あるべし、之を置て論せざるべし。林子の說上の如し。屈悔翁は全く此の說を取る。而して太史公を贊して曰く嗚乎子長は善讀と謂ふべし。余今卽ち此に是を付し、其の說は林子に依る。朱子の說は舉ぐるに及ばず、知らんと欲する者は『朱註』を見よ。

朕幼清以廉潔兮　身服義而未沫　主二此盛德一兮　牽二於俗一而蕪穢　上無レ所レ考二此盛德一兮　帝告二巫陽一曰　有レ人在レ下　我欲レ輔レ之　魂魄離散　汝筮予レ之　巫陽對曰　掌夢上帝　其命難レ從　若必筮予レ之　恐後二之謝一　不レ能二復用一巫陽一焉

朕幼より清く以て廉潔、身義を服して未だ沫らず、此の盛德を考ふる所無く、長く殃に離うて愁苦す。帝巫陽に告げて曰く、人有り下に在り、我之を輔んと欲す、魂魄離散す、汝筮して之に予よ。巫陽對て曰く、掌夢上帝、其の命從ひ難し、若し必ず筮して之に予ば、恐くは之が謝に後れん、復巫陽を用ふる能はず。

【句解】朕は我なり、幼少なり。求めざるを淸と曰ひ、受けざるを廉と曰ひ、汙れざるを潔と曰ふ。身服義而未沫　服は行ひなり。沫は昧と同じ。日中に沫を見る、沫は微昧の明なり、有か無か判じ難き程度の色を沫と言ふなり。屈原が義を行ふこと極めて明白なるを言ふ。此盛德は淸廉潔義等を總じて言ふ。牽於俗蕪穢　盛德を主とすと雖も、俗の汚濁の牽掣する所と爲る。而かも我が主とする所は奪ふ能はざるなり。上無所考此盛德　上は君を指す、外形を讒佞に蔽はれ、俗に蔽はれるが故なり。長離殃愁苦　離は値なり、殃は禍なり。林子曰く禍を受く、止一次ならず、愁苦日久し、魂魄離散する所以。此れ自ら招魂の由を敍し、口を開いて朕の字を道出す。亂詞又吾の字を道出す、明明に自ら招く。帝は天帝。女を巫と謂ふ。陽は其の名。帝の言を設爲するなり。有人在下　人は屈原を云ふ。我は天帝なり。欲輔之　之を輔ける意は何ぞ、此の盛德あればなり。魂魄　王逸曰く魂は身の精なり、魄は性の決なり。五藏を經緯し、

形體を保守する所以なり。離散するは身將に死せんとするなり。筮予之　魂魄の在る所を占して、其の身に反さしむ。上は考察するなし、帝は已に考察す。巫陽乃ち天帝に對て曰く、掌癭上帝　其命難從　朱子曰く此の一節巫陽が對語曉る可らず、恐くは脫誤あらん。林子曰く人生魂交れば則ち夢あり、死せば則ち魂散じて升る。皆帝之を司どる。故に掌夢と曰ふ。巫陽の意、死して招魂は掌夢者の事、今其の人未だ死せず、而して生招す、則ち帝命從ふ可らざるなり。若必筮予之　恐後之謝　若し其れ筮すとせば時間を要す。長時間を要すとせば、既に謝世卽ち死の後に至るの恐あり。然るのみならず、其の技拙なりとして復巫陽を用ふる能はざるに至らん。林子曰く此を案ずるに未死の招たるを知る、上考ふる所無く、而して巫陽又早く已に之を考ふ。沫と穢と苦と韵、輔と予と韵、從と陽と韵なり。一段自ら其の生招たるを明らかにす。

乃下招曰　魂兮歸來　去君之恆幹　何爲乎四方些　舍君之樂處　而離彼不祥些

乃ち下て招いて曰く、魂や歸り來れ、君が恆幹を去て、何爲乎四方にする、君が樂處を舍てて、彼の不祥に離ふ。

【句解】乃下招曰　巫陽は其の所在を筮するを待ずして、遍く之を四方に招かんとする。王逸

曰く巫陽天帝の命を受け、因て下りて屈原が魂を招くと。天帝の命を受けてと見るは少しく惡しし、帝命の可否を俟ずして徑に下ると見るが可し。魂兮歸來　正しく魂を呼び歸さんとして、大聲に之を叫ぶ。去君之恆幹　恆は恆常、幹は幹體なり、君は屈原を指す。何爲乎は和語の「ドウシテ」又は「ナゼ」に當る。四方　一の恆幹を守るべき筈なるに、ナゼ四方を流離し去るや。些は『說文』に語詞と。沈存中が『夢溪筆談』に云ふ今夔峽湖湘及び南北江獠人、凡そ禁咒の句尾、皆些と稱す、乃ち楚人の舊俗と。朱子曰く西域咒語の末皆娑婆訶と云ふ。亦三合して些と爲る。梵語の上には二合引と云ふことあり、三合と云ふことは無し。朱子梵語を詳知せずして臆斷を下す、驅烏も之を笑はん。例せば娑婆は娑嚩とも書き、此の二は合して梵字として[illegible]の一字と爲る、而して訶は[illegible]として獨立す、三合する所以の理なし。屈原の時代佛經未だ傳はらず。而して此の咒語あるは漢土に於て特に發りしものと思ふ、西域の影響ありしにはあらず。或は想ふ『說文』解して語詞と曰ふ。乃ち賦に兮の字を用ふる如く、音の調子を取るものにて、些は佛典の娑婆訶の如く意義を有するものにあらずと。猶ほ後賢の叱正を俟つ。舍君之樂處　離彼不祥　王逸曰く何爲ぞ君が楚國饒樂の處を舍て、陸離不善の鄕に走り、以て衆の惡みに犯觸するやと。林子曰く樂の字上の愁苦に應ず。蓋し愁苦は則ち魂散、樂は則ち魂聚、故に下文

種種の樂を以て之を招く。離は罹と同じ、不祥は四方賊姦多きを以てなり。語を換へて之を言へば、樂しき生を舍て、不祥なる死に就くやとなり。王解は林解に及ばず。方と祥と韵なり。

魂兮歸來　東方不可以託些　長人千仞　惟魂是索些　十日代出　流金鑠石些　彼皆習之　魂往必釋些　歸來歸來　不可以託些

魂や歸り來れ、東方以て託す可らず、長人千仞、惟魂是れ索む、十日代り出て、金を流し石を鑠かす、彼皆之に習る、魂往けば必ず釋ん、歸り來れ歸り來れ、以て託す可らず。

【句解】不可以託　託は寄託、東方の俗、其の人義なし、命を託し、身を寄す可らず。惟魂是索　東方に長人國あり、其の人身の長千仞、人の魂を索めて是を食はんと欲す、其の人畏る可し。十日代出　流金鑠石　王逸曰く東方に扶桑木あり、十日卽ち十箇の太陽竝で其の木の上に在り。次を以て更行し、其の熱酷烈、金石の堅剛なる皆爲めに銷釋す。彼皆習之　彼の長人國の者は皆習慣なれば意とせざるも、魂往必釋　他國より往く者は其の魂必ず銷釋す、其の熱畏る可し。託と索と石と釋と韵なり。

魂兮歸來　南方不可以止些　雕題黑齒　得人肉以祀　以其

骨爲醢些　蝮蛇蓁蓁　封狐千里些　雄虺九首　往來儵忽　吞人以益其心些　歸來歸來　不可以久淫些

魂や歸り來れ、南方以て止る可らず、雕題黑齒、人の肉を得て以て祀る、其の骨を以て醢と爲す、蝮蛇蓁蓁、封狐千里、雄虺九首、往來儵忽、人を呑んで以て其の心を益す、歸り來れ歸り來れ、以て久しく淫る可らず。

【句解】南方の俗、東方の義無きが如く嘗て信無きなり、其の風俗は如何。題額に雕畫し、齒を黑く染る。人の肉を料理して、以て神を祭祀し、人の骨を醬醢と爲し、之を食ふ、其の人畏る可し。朱子曰く今湖の南北、人を殺して鬼を祭る者あり、卽ち其の遺俗と。所謂今日の苗人種を指すものの如し。蝮蛇は「マムシ」。蓁蓁は其の多く聚る形容。封は大なり、大なる狐が千里に健走する。雄虺も蛇の一種なり、一身にして九首あるなり、此等の動物が騰梁して以て人を呑んで以て其の飢に充てんと欲す、其の物畏る可し。南方の不祥も東方と同じ、久淫する所にあらず、歸れよ歸れよと招くなり。止と祀と醢と里と韵、心と淫と韵なり。

魂兮歸來　西方之害　流沙千里些　旋入雷淵　靡散而不可止些　豕而得脫　其外曠宇些　赤螘若象　玄蠭若壺些　五

穀不」生　蓁菅是食些　其土爛」人　求」水無」所」得些　彷徉無」所」倚　廣大無」所」極些　歸來歸來　恐自遺」賊些

魂や歸り來れ、西方の害、流沙千里、旋りて雷淵に入る、糜散して止る可らず、委にして脫するを得るも、其の外曠宇、赤蝗象の若く、玄蠭壺の若し、五穀生せず、蓁菅是れ食ふ、其の土人を爛らす、水を求むるも得る所無く、彷徉と倚る所無し、廣大極る所無し、歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら賊を遺さん。

【句解】●西方之害　今日の蒙古人の害を說くものの如し。●流沙千里　●旋入雷淵　淵は『文選』に泉に作る、唐の高祖李淵と稱するを避けてなり。淵を以て古來稱するを可とす。沙漠の中に此の畏る可き淵あるとなり。一一地理に合すの要は無し。●糜散は身體が爛壞するなり。沙漠も亦南方の害と同じく、或る熱の一帶に至れば、身體爛壞して、止息すべき所無しとなり。雷の字、淵の字に拘泥する者は眞意を得ず。●委は幸と同じ。●得脫　險處を幸にして脫するを得るも、身外は唯茫茫たる曠宇　卽ち大野なり、大野には人は住せず、住する者は何物ぞ。●赤蝗　卽ち赤色の蟻、其の大象の若し。●玄蠭　卽ち黑色の蜂、其の大壺の若し。脚下の害物に蟻あり、頭上の害物に蜂あり、而かも荒土五穀は生ぜず、食ふ所の物は何ぞ。●蓁菅　卽ち茅の類、牛の食ふ

物を以て人も亦食はざるを得ず。而して其の酷熱は人を爛らす。飮むに水無く、休息せんと欲するも好樹の倚る可き無し。是を以て早く歸れ歸れよ、久しければ必ず賊害に逢はん。西方の不祥、東南二方と異ならざるなり。里と止と韵。宇と壺と韵、食と得と極と賊と韵なり。

魂兮歸來　北方不」可」以止些　歸來　不」可」以久些

魂や歸り來れ、北方以て止る可らず、增氷峨峨たり、飛雪千里、歸り來れ歸り來れ、以て久しう す可らず。

【句解】●北方は今日の滿洲を指すものの如し。●峨峨は氷を積で山の如きを言ふ。●飛雪は千里、其の寒氣畏る可し。北方の不祥、西東南と同じ。到處盡く不祥なり。止と里と久と韵なり。

魂兮歸來　君無」上」天些　虎豹九關　啄害下人」些　一夫九首　拔」木九千些　豺狼從目　往來侁侁些　懸」人以娭　投二之深淵一些　致命於帝一　然後得」瞑些　歸來歸來　往恐危」身些

魂や歸り來れ、君天に上ること無かれ、虎豹九關、下人を啄害す、一夫九首、木を拔く九千、豺狼從目、往來侁侁、人を懸け以て娭む、之を深淵に投じ、命を帝に致す、然して後瞑るを得、歸

り來れ歸り來れ、往ば恐くは身を危くせん。

【句解】君無上天　地上の東西南北、皆往く莫れと禁じ、復に天にも上る無かれと禁ず。天門の九重、虎豹之を守り、下人卽ち下界より來る者を鳥の啄むが如く、人を齧害して鬪に入らしめず、其の上に一夫にして九首なるあり、朝より暮に至る、大木を拔くこと九千條。其の嚴、其の强畏る可し。其の上に豺狼あり、目を從て人を窺ふ。從は卽ち竪なり。而して往來すること倀倀として多し。懸人は人の首を樹に懸ける意なるか、豺狼が其の首を人に懸ける意なるか、恐くは後說然らん。娭は嬉と同じ。投之深淵　豺狼が人を首に懸け、而して之を深淵の底に投擲するなり。致命於帝　下界より來りし人を此の如くにして退けたりと天帝に告命するなり。然後得瞑　瞑は眠と同じ。豺狼が此の事を帝に以聞したる後、眠に就くなり。危身は一本忘身に作る。危を以て可とす。天上も不祥なり往く可らず。天と人と千と倀と淵と瞑と身と韵なり。

魂兮歸來　君無下此幽都些　土伯九約　其角觺觺些　敦脄血拇　逐人駓駓些　參目虎首　其身若牛些　此皆甘人　歸來歸來　恐自遺災些

魂や歸り來れ、君此の幽都に下る無れ、土伯九約、其の角觺觺、敦脄血拇、人を逐て駓駓、參目虎首、其の身牛の若し、此れ皆人を甘しとす、歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら災を遺ん。

【句解】幽都は地下、地下は幽冥なり、故に稱す。佛經で言へば地獄なり。土伯は后土の侯伯、佛經で言へば閻魔王とか冥官とか云ふの類、又は牛頭馬頭の鬼類を言ふ。約は屈、九つ屈る角を所有するなり。觺觺は角が銳利なる形容。敦脄血拇　敦は厚、脄は背、拇は王逸も朱子も共に手の大指と。林子曰く足の指なり。普通は手の指なり。今は逐人駓駓と下句に有るを以て林子は足指と解す。駓駓は人を逐うて走る捷疾き形なればなり。然れども人を攫まんとする勢は手に有て足にあらず。乃ち血き手を以て人を逐ふと解すべし。參目は三目、虎の如き首、而して身體は牛の若きなり。此皆甘人　人を甘愚するにはあらず、人の肉を甘美となすなり。幽冥の鬼畏る可し。災は當害、早く歸らずんば當害を遺さんと告げる、此れ地下の不祥を言ふ。都は宜の音、乃ち都と觺と駓と牛と災と韵なり。

魂兮歸來　入修門些　工祝招君　背行先些　秦篝齊縷　鄭綠絡些　招具該備　永嘯呼些　魂兮歸來　反故居些

魂や歸り來れ、修門に入れ、工祝君を招き、背行して先づ、秦の篝齊の縷、鄭の綠絡ふ、招具該

備し、永く嘯呼す、魂や歸り來れ、故居に反れ。

【句解】修門は郢の城門、卽ち楚の都。工は工巧、祝は男巫、乃ち招魂する祝巫なり。背行は「ウシロムキ」なり。後人より見れば、前人は皆背行なり。先は面が魂に向つて引導を爲すなり、案内するなり。篷は落なり、又籠なり。落も籠も竹を以て丸く編んだ器。縷は縷綫、緜は纏なり。絡は絡縛なり。秦と齊と鄭とは國の名、又其の國に產する特具なればなり。林子曰く魂行て空に乘る、故に篷縷を設けて綫と爲し、緜絡を笮と爲す。世の爲る所の浮度の若き是れなり。

招具該備　該と備と同義なり。今人が用ふる意義の該にはあらず。乃ち上の篷や縷の類、皆完備したるなり、何時魂が歸るも易易として歸れるなり。嘯呼　王逸曰く長嘯大呼以て君を招くなり。朱子曰く嘯呼は所謂皐なり。林子曰く嘯呼は卽ち古人北面して號を皐と曰ふなり。反故居　郢の城中の祖居、招魂の禮此に至りて畢る。下文は祖居中に於て、分つて其の樂を言ふ。上下四方、皆其の故居に及ばざるを言ふ。門と先と韵、絡と呼と居と韵なり。

天地四方　多賊姦些　像設君室　靜閒安些　高堂邃宇　檻層軒些　層臺累榭　臨高山些　網戸朱綴　刻方連些　冬有突厦　夏室寒些　川谷徑復　流潺湲些　光風轉蕙些　氾崇蘭

些　經堂入奥　朱塵筵些

天地四方、賊姦多し、像君が室に設け、靜閒と安んず、高堂邃宇、檻軒を層ね、層臺累榭、高山に臨み、網戸朱綴し、刻方連る、冬は突厦あり、夏は室寒し、川谷徑復、流潺湲、光風蕙を轉じ、崇蘭汜たり、堂を經奥に入る、朱塵筵せり。

【句解】天地四方　多賊姦　上文の東西南北と上下、蛇も狐も虎も豹も皆賊姦の中に收む。像設君室　林子曰く楚の俗、人死せば則ち像を設け以て祀るなり。高堂は室の如し。邃宇は深屋なり。檻は檻楯なり。軒は樓板卽ち緣の廻りの板。層臺は室の如し。累榭　『說文』に榭は臺に屋あるなり、又水邊の臺を榭と曰ふ。累は層と同じ。臨高山　林子曰く高く山上に出で下に臨むなり。網戸は木を以て門扉を爲り、刻して方目と爲し、羅網の狀の如くならしむ。而して朱色を以て之を綴る。朱子曰く朱丹を以て其の交綴の處を飾り、其の刻する所の方をして相連屬せしむるなり。冬有突厦　冬の寒を防の溫室あるなり。夏室寒　盛夏暑の熱する時、則ち陰堂を洞達して其の寒涼を內るなり。川谷徑復　流潺湲　林子曰く川谷の水を激導し、徑に過ぎて其の中に回復す。清淺にして流急なり。光風は王逸曰く雨已み日出て而して風き、草木光有るなり。轉蕙　風氣轉汎、蘭

蕙の叢に薄るなり。氾崇蘭　王逸曰く氾は氾氾、搖動の貌、崇は高なり。林子曰く氾氾は輕く度るの貌。風が蘭に輕く度るなり。奥は西南の隅を言ふ。朱塵は朱塗の承塵。筵は竹を以て製したる蓆なり。皆光風の吹き入るものなり。此れ故居堂室の樂む可きを言ふ。姦と安と軒と山と連と寒と湲と蘭と筵と韵なり。

砥室翠翹　挂曲瓊些　翡翠珠被　爛齊光些　蒻阿拂壁　羅幬張些　纂組綺縞　結琦璜些

砥室翠翹、曲瓊を挂け、翡翠珠被、爛として光を齊くす、蒻阿壁を拂ひ、羅幬張る、纂組の綺縞、琦璜を結べり。

【句解】砥室は砥石で磨くが如く、室は奇麗なり。翠は青羽の雀、翹は鳥尾長毛なり。曲瓊は玉鈎、玉の挂針鈎なり。翡翠は赤羽の雀、卽ち「カハセミ」。珠被は珠の被なり。被は卽ち衾なり。此の如き類のものが、一齊に映發し爛として光彩を發す。蒻阿　蒻は葭の類、席に製すべきもの。阿は曲隅、座敷一面に張り詰め、而して壁に開披し、紛塵を受けしめず。羅幬は綾羅の襌帳を言ふ。其の羅幬を張るに纂組、卽ち五色の絲で編んだ紐を以てす。綺縞は薄き絹と、細き絹なり。琦璜　卽ち又玉を以て飾るなり。瓊と光と張と璜と韵なり。

室中之觀　多珍怪些　蘭膏明燭　華容備些　二八侍宿　射遞代些　九侯淑女　多迅衆些　盛鬋不同制　實滿宮些　容態好比　順彌代些　弱顏固植　謇其有意些　姱容脩態　絙洞房些　蛾眉曼睩　目騰光些　靡顏膩理　遺視矊些　離榭脩幕　侍君之閒些

室中の觀、珍怪多し、蘭膏明燭、華容備る、二八の侍宿、射遞に代る、九侯の淑女、多く迅衆あり、盛鬋制を同うせず、實に宮に滿つ、容態好比、順にして代を彌ふ、弱顏固植、謇其れ意あり、姱容脩態、洞房に絙なり、蛾眉曼睩、目光を騰ぐ、靡顏膩理、遺視矊たり、離榭脩幕、君が閒に侍す。

【句解】室中には珍奇にして、又怪異の物觀るべき多し。蘭膏は蘭香を用て膏を煉なり。然るときは燭光が明發するなり。華容は美華の姿容、卽ち美人を言ふ。二八は二列に八人づつ竝ぶ。王逸曰く大夫は二列の樂あり。故に晉の悼公、魏絳に女樂二八、歌鍾二肆を賜ふ。若し厭射するときは、卽ち遞に代る。新趣を以て、故觀に代る所以。九侯淑女　九服の諸侯。商の九侯の女、之を紂王に入る。而して淫を喜ず、淑たる所以。今此の淑女が、多く有り。迅衆は五臣曰

く其の來ること迅疾、此に衆多なり。朱子曰く未詳と。林子曰く迅衆は奔走傾捷、衆に過ぎるなり。盛鬋　鬋は鬢なり。不同制　其の鬢の飾理法が皆同じからず、束髮あり、島田あり、銀杏返しあり、一樣ならざるを言ふ。實滿宮　後宮に充滿す。容は姿容、態は態度、好は好愛、比は比親、順は順柔、彌は竟。代人の來るまで各の其の職に從ふ。五臣は順を順序と爲す。今朱子に從うて、柔順と爲す。上の射遞代の句に根す。弱顏は柔和の顏。固植は其の心底の堅固なるを言ふ。謇は王逸曰く正言の貌。五臣曰く正直の貌。林子曰く難言の貌。朱子曰く語詞。今朱子の語詞卽ち「アア」を以て可とす。林子曰く美人口を啓んと欲して難きが若く、甫て聲を聆て味あるなり。此の如く解するは朱子の如き沒風流者の知る所にあらず。余は寧ろ沒風流者に從ふ。姱容は麗容。脩態　絚洞房　王逸曰く絚は竟なり、房は室なり、復美好の女あり、其の貌姱好多意、智に長じ、羣聚羅列、竟に識る洞達房室に滿つるを。曲解に近し。五臣曰く洞は深なり。洪子曰く洞房叫窱にして幽邃。朱子曰く洞は閉なり。林子曰く絚は緩なり、美容を以て、其の態を脩飾す。旣に代つて洞房に歸る。舒緩迫らざるの意あり、上文の容態の二字に根す。林子の解を以て可とす。洞に深閉の意あるは疑ふ可きなし。仙女が十二洞天に在などと一般、多少艷味を有する字と心得べし。曼は長細の貌。睒は謹視の貌。騰光　騰は發なり。美

人の目人を視るに光を發し、俗語の目千兩なる所此に在り。靡顏は面の肌理が精緻なり。膩理は細滑なりと注して、肉に膩氣ありて、「コッテリ」とすることなり。遺視は竊視と注して、孰視の反對なり。瞭は王逸曰く脈なり。『廣韵』曰く瞳子の黑なり。又眇遠の貌。林子曰く脈は藏府の氣たり、四支に分流するもの、竊視の間に審にせざるはなきの意。此の說當る。朱子も竊視と注す。離榭は俗語の「離レ座敷」を言ふ。脩幕は長幕、長き幕を張りてあるなり。侍君之閒　離れ座敷の幕中に在て、君が閒暇あり代を命ずるを俟て、又往て之に侍するなり。以上室中の侍女に就て其の姿態より、一一の動作も分割して言ふ。怪と備と代と韵、衆と宮と韵、衆と韵を合す。房と光と韵、瞭と閒と韵なり。

翡帷翠帳　飾二高堂一些　紅壁沙版　玄玉之梁些　仰觀二刻桷一
畫二龍蛇一些　坐レ堂伏レ檻　臨二曲池一些　芙蓉始發　雜二芰荷一些　紫
莖屛風　文緣レ波些　文異豹飾　侍二陂陀一些　軒輬既低　步騎
羅些　蘭薄戶樹　瓊木籬些　魂兮歸來　何遠爲些

翡帷翠帳、高堂を飾る、紅壁沙版、玄玉が梁、仰ぎて刻桷を觀れば、龍蛇を畫けり、堂に坐し檻

に伏し、曲池に臨めり、芙蓉始て發き、芰荷に雜る、紫莖の屛風、文波に緣る、文異の豹飾、陂陀に侍す、軒輬既に低て、步騎纙る、蘭戶と薄て樹う、瓊木の籬、魂や歸り來れ、何ぞ遠きことを爲ん。

【句解】翡帷翠帳は翡翠帷帳の析字法なり。玄玉梁　梁の色、淺黑にして玄玉の如し、是れ塗堊の勻稱と。枏は和訓「タルキ」、天井の枏を觀れば、彩色の龍蛇が畫きある。堂上に坐し、檻前に伏して臨めば其の下は川谷の流を引て曲池を作るにあり。而して池中には芙蓉あり、芰荷あり。又紫莖の屛風、卽ち水葵、鳧葵、防風荇菜あり。而して葵の文采、風起り水動き、卽ち波に緣て生ず。波が其の葉上に緣て、紋皺を生ず。皆曲池中の玩ぶべきもの。文異豹飾　侍陂陀　從臣皆豹虎の文、異彩の飾を以て、以て君に侍して陂陀の側に遊ぶなり。軒は藩車、卽ち車端に欄干の有る車。輬は臥車、夏乘るが主意なれば頗る輕爽を以て製る車。既低は人が乘れば昂なり。人未だ乘ざるが故に低なり。步騎羅　步する者、馬に乘る者、等しく羅列するなり。蘭薄戶樹　五臣曰く木の叢生を薄と曰ふ。林子曰く薄は迫なり。戶に迫る卽ち戶に接近して種てあるなり。林說可なり。瓊木は嘉木を總稱して言ふ。纙は皆嘉木を以て作る。出入往來の路、結構完備せざるは無し。何遠爲　五臣曰く此

の如きの居、以て安居すべし。何を用て遠去することを爲んや。堂と梁と韵、蛇と池と荷と波と陀と羅と韵、籬と爲と韵なり。

室家遂宗　食多方些　稻粢穱麥　挐黃粱些　大苦醎酸　辛甘行些　肥牛之腱　臑若芳些　和酸若苦　陳吳羹些　胹鼈炮羔　有柘漿些　鵠酸臇鳧　煎鴻鶴些　露雞臛蠵　厲而不爽些　粔籹蜜餌　有餦餭些　瑤漿蠁勺　實羽觴些　挫糟凍飲　酎淸涼些　華酌既陳　有瓊漿些　歸反故室　敬而無妨些

室家遂に宗とし、食多方なり、稻粢穱麥、黃粱を挐ふ、大苦醎酸、辛甘行る、肥牛が腱、臑若と芳し、酸若の苦を和し、吳羹を陳ぬ、胹鼈炮羔、柘漿あり、鵠酸臇を膞にす、鴻鶴を煎る、露雞臛蠵、厲して爽ず、粔籹蜜餌、餦餭あり、瑤漿蠁勺、羽觴に實り、糟を挫して凍飮す、酎淸涼たり、華酌既に陳ね、瓊漿あり、故室に歸り反れ、敬して妨無けん。

【句解】室家遂宗　食多方　朱子曰く室家は宗族なり、宗は尊なり。君既に歸來せば室家の衆、皆來り尊宗して當に爲めに食を設け、其の烹飪多く方法あるを言ふ。稻粢は稻餠なり。穱は早

熟の麥なり。挐は糅なり、中へ混交するなり。黃粱は洪子曰く黃粱は蜀漢商浙の間に產す。香美諸粱に逾ゆ。號して竹根香と爲す。『爾雅翼』に粱に黃と白と靑との三種あり。其の性涼たり故に粱と稱すと。種種の穀を合せて、飯と爲すの事知るべし。苦は「ニガシ」醎は「シホハユシ」酸は「スシ」辛は「カラシ」甘は「アマシ」是を五味と爲す。以て前句の五穀に對す。肥牛之腱　筋肉の大なるものを腱と曰ふ。臑若は肉の耎き貌。或は曰ふ臑は耎なり。若は杜若なり。肉と杜若と混じて烹るときは、肉の腥氣を去ると。和酸若苦　陳吳羹　吳國の人が料理法に工妙なる、酸と苦を調和して、極めて美味なる羹を作るとなり。胹は和訓に「ユビク」乃ち煑熟するなり。鼈は煑熟し、羔「ヒツジ」は炮、卽ち之を蒸し燒にす。柘漿　柘は一本蔗に作る。藷蔗の汁を取て漿飮と爲す。鵠は鴻鵠。酸は酢漿を以て之を烹て羹と爲すなり。臇は臑臛、少水なり。鳧は野鴨なり。鴿は洪子曰く麋鴰なり。王逸曰く鶴なり。林子曰く倉黃なり。膏を用て鴻と鴿とを煎る。露雞は巢屋を內にせず、外に作りて置くとの說なり。臛は「アツモノ」なれど、羹の「アツモノ」は菜あり。臛は菜無きなり。蠵は大龜の屬。厲は烈なり。王逸曰く楚人羹の敗を名けて爽と曰ふ。老子曰く五味は人の口を爽はしむ。此の烈しき汁を飮んでも口は決して敗爽ずとなり。粔籹は和訓「オコシゴメ」又は「マカリモチ」。洪子曰く吳に之を膏環と言ふ。蜜餌は飴餅

を言ふ。餦餭は乾餳なり。以上十六句皆食ふ所以のもの。瑤漿は漿の色、玉の如きなり。蠠は通じて幕に作る。朱子曰く疏布を以て尊を蓋ふなり。勺は酒を挹む器、王逸の勺は沾なりと注するは未詳。和訓「ヒサゴ」なり。近時活版の『楚辭集注』に勾に作るは誤なり。羽觴は「サカヅキ」、勺は挹む器、羽觴は飮む器、羽の字を觴に付したるは、古は鳥形に作りしを以てなりと。挫糟　王逸曰く挫は捉なり、其の糟を捉み去るなり。凍飮は凍かにして飮むなり。酎は醇酒。王逸曰く盛夏には則ち覆蹙乾釀を爲し、其の糟を去て、唯其の醇酒を取り、以て之を冰上に置き、淸涼と爲し之を飮む。華酌は洪子曰く華は采なり。酌に酒を盛り觴を行るなり。陳は陳置。瓊漿は卽ち瑤漿、酒を挹み、酒を飮む、唯是れ意の欲する所。六句皆飮む所以のものを言ふ。歸反故室　敬而無妨　故室に在ては、子孫事を承け、恭敬し、盛食を設け、曾て禍害あること無きなり。方と粱と行と芳と羹と漿と鴿と爽と餭と觴と涼と妨と韵なり。

肴羞未通　女樂羅些　敶鐘按鼓　造新歌些　涉江采菱　發揚荷些　美人既醉　朱顏酡些　娭光眇視　目曾波些　被文服纖　麗而不奇些　長髮曼鬋　豔陸離些　二八齊容　起鄭舞些　衽若交竿　撫案下些　竽瑟狂會　搷鳴鼓些　宮庭震

驚發激楚些　吳歈蔡謳奏大呂些

肴羞未だ通せず、女樂羅なる、鐘を撞ね鼓を按ち、新歌を造す、涉江采菱、揚荷を發す、美人既に醉ふ、朱顏酡たり、嫉光眇視、目波を曾ぬ、文を被むり纖を服す、麗にして奇ならずや、長髮曼鬋、豔として陸離、二八容を齊へ、起て鄭舞す、衽交竿の若く、撫案して下る、竽瑟狂會し、鼓を揗鳴す、宮庭震驚し、激楚を發す、吳歈蔡謳、大呂を奏す。

【句解】肴羞未通　林子曰く羞は進なり。通は徹去なり。所謂酒燕最中なり。女樂　佳人が樂を奏するなり。涉江も采菱も揚荷も三皆歌の名。此の三樂共に是れ新製の歌、古製の歌にはあらず。美人既醉　朱顏酡　酡は酒の爲めに赭色面に著るなり。嫉光は嬉光。眇視は眺視なり。目曾波　半醉半醒して、嬉戲の目光、波紋の轉ずるが如きを言ふ。被文服纖　麗而不奇　美人が被服する所の者、綺繡にして纖細、頗る靡麗にして且珍奇なり。不奇は「奇デハナイカ」の意なり。長髮曼鬋　豔陸離　美人の鬢髮、陸離として光輝を搖かすなり。二八は二列に八人づつ一齊に身容を整ふなり。而して起て鄭國の舞を爲す。衽は衣襟なり。舞人が衣襟を廻轉して相交はる狀、竹竿の若く、撫案下　手を以て其の節を舞案し、而して徐に下り行く。竽は「フエ」瑟は「コト」。狂會　狂は其の猛を曰ふ。揗は急に擊て梭擲の勢の如くなるもの、乃ち竽と瑟

と鼓と此の三、音を合す。激楚は歌曲の名。此の歌曲は高張急節の奏、以て他の諸曲と和す。林子曰く激楚は淸凄の曲名、竽鼓の響過大にして宮庭の人、動じて且駭かざるは無きを以て、又淸凄の曲を發し以て之を止む。是の說或は然らん。吳と蔡は國の名。歈と謳は共に歌なり。奏大呂　大呂は六律の名。正雅の音、淸凄の曲、蔡二國別調の歌を以てし、卒に六呂の正音に歸して方に止む。此れ堂中歌舞の工妙を分割して言ふ。羅と歌と荷と酡と波と韵、奇と離と韵、舞と下と鼓と楚と呂と韵なり。

士女雜坐　亂而不分些　鄭衞妖玩　來雜陳些　激楚之結　獨秀先些　篤簸象棊　有六簙些　分曹並進　遒相迫些　成梟而牟　呼五白些　晉制犀比　費白日些　鏗鐘搖簴　揳梓瑟些

士女雜坐し、亂れて分たず、組纓を放擲して、班として其れ相紛る、鄭衞の妖玩、來りて雜陳す、激楚の結、獨秀先ず、篤簸の象棊、六簙あり、曹を分ち進を竝べ、遒く相迫る、梟を成して牟、五白を呼ぶ、晉制の犀比、白日を費す、鐘を鏗ち簴を搖かし、梓瑟を揳す。

【句解】士女雜坐　亂而不分　林子曰く歌舞既に畢り、猶ほ歡を盡くす能はざるを恐る。故に

歌舞の美人、賓客と雜坐し、次序を定めず、分を忘るるを以て樂と爲す。●放●●組●纓●●班●其●相●紛●放は放解、隲は陳列、組は以て衣を束ぬ、纓は以て冠を繫ぐ、諸を他處に放陳して、衣冠を除去し、心身共に寬なり。班紛乃ち勅任官も奏任官も區別を徹廢して游ぶなり。●鄭●衞●妖●玩●來●雜●陳●激●楚●之●結●鄭衞は二國の名。妖玩は妖冶にして玩ぶべきの女。此の二國は有名な淫國にて、流行歌、卽ち新聲は多く此に出づ。來雜陳 所謂黑人以上の黑人が來つて雜厠俱に坐す。激楚之結 激楚の音を發するの女が結髮、卽ち束髮し。獨秀先 衆女の中に於て、此の女最も秀絕するなり。王逸曰く鄭衞の妖女、服飾に工、其結形を殊にし、能く楚人を感せしむ。故に之を異とし、之を先進せしむるなり。●籠●は竹の名、蔽は卽ち簙なり。●象●棊●は今日の將戲ならんも、雙六との說もあり。象牙を以て棊を作る故に曰ふ。簙は今日の骰子、古代は竹を以て算木の如きものを用ひしものの如し。六箸を投じ、六棊を行る故に六簙と曰ふ。●蔫●先●進●燕終りし後、此の博奕を爲す。●分●曹●竝●進●進は「ススム」と動詞に訓むか、又進卽ち名詞と爲すか。林子曰く曹は偶なり、決賭の財を進と曰ふ。「進ヲ竝べ」と「竝ビ進ム」とは大に相違あり。余は博奕の法を知らず、故に是非を定むる力無きも、今姑く林子に從ふ。●遁●相●迫● 決賭する者遁く相窘迫するなり。●成●梟●而●牟● 洪子曰く『漢書』に梟騎、『注』に云ふ梟は勇なり。林子曰く簙頭の梟形を最勝と爲す、倍勝を牟と曰ふ。●絢●

齋曰く梟は賽の目の名ならん。梟勇を成して進む者は牟と。明白に解し易し。賽の目の名なぞと臆斷は無用なり。●呼●五●白● 簙に記が五箇ありて之を打つものが簙の名を呼びかけるなりとの說なり。●費●白● 寸陰尺璧なる光陰を消耗する。●揳●は轢なり、梓製の瑟を掻き鳴らすなり。●搖●は動なり。簫は鐘を懸る格、俗に「ツリバシラ」是れなり。●揳●は轢なり、梓製の瑟を掻き鳴らすなり。林子曰く堂中の六簙尙ほ未だ散せず、而して堂下又鐘を擊ち、以て催し堂に上り縱飮せしむるを言ふ。以上堂中戲玩の畢るを言ふ。●分●と紛と韵、●陳●と先と韵、簙と迫と白と、日と瑟と韵なり。

娛酒不廢　沈日夜些　蘭膏明燭　華鐙錯些　結撰至思　蘭芳假些　人有所極　同心賦些　酎飮盡歡　樂先故些　魂兮歸來　反故居些

酒を娛で廢ず、日夜を沈めり、蘭膏明燭、華鐙錯り、至思を結撰し、蘭芳假る、人極る所あり、心を同じうして賦す、酎飮歡を盡し、先故を樂まん、魂や歸り來れ、故居に反れ。

【句解】●娛●酒●不●廢● ●沈●日●夜● 酒に沈湎して日夜に飮を已ざるなり。●蘭●膏● 蘭膏は香なり。●明●燭● 明燭は輝なり。●華●鐙● 華鐙は燭を置くの錠、夜飮には必須の具。●結●撰●至●思● ●蘭●芳●假● ●人●有●所●極● ●同●心●賦● 林子曰

く此の時に當りて其の深至の情を結構撰述して、蘭芳を借りて詞と爲し、以て相樂む。蓋し同心の言爲る、其の臭蘭の如し。傾倒の極にして賦を作るなり。要するに調子の合ふ者と文賦を同じうし以て樂むとなり。●●●●酎飲盡歡　樂●●先故　林子曰く宴飲の歡、此に至りて已に盡く、他の爲めの故にあらず、祖先此に在り、故舊此に在るを以て、樂自ら已む能はざるあるのみ。先故は祖先と舊故となり。此の如くにして娛樂すべし。魂や歸り反れと之を招く。夜と錯と假と賦と故と居と韵なり。林子曰く高堂邃宇の句より此に至る、俱に不必然の詞を設爲す。且原が志室家聲色に在らずして、君を致し民を澤するに在り。此を以て之を招く、豈能相動ぜん。但篇首、帝告巫陽、我欲輔之の語あるは、則ち魂身に歸反せば、必ず帝の輔る所と爲て、其の志を行ふことを得ん。安富尊榮、奢を窮め欲を極むと雖も、泰と爲さざるなり。巫陽の詞此に止る。

亂曰　獻歲發春兮汩吾南征　菉蘋齊葉兮白芷生　路貫廬江兮左長薄　倚沼畦瀛兮遙望博　青驪結駟兮齊千乘　懸火延起兮玄顏烝　步及驟處兮誘騁先　抑騖若通兮引車右還　與王趨夢兮課後先　君王親發兮憚青兒　朱明承夜兮時不可淹

皐蘭被徑兮斯路漸　湛湛江水兮上有楓　目極千里兮傷春心　魂兮歸來哀江南

亂に曰く、獻歲發春汩として吾南征す、菉蘋葉を齊して白芷生ず、路廬江を貫き長薄を左にす、沼畦瀛に倚り遙望博し、青驪結駟千乘を齊うす、懸火延起して玄顏烝す、步驟處に及び誘騁先だつ、騖るを抑へ若へ通じ車の右を引いて還る、王と夢に趨りて後先を課す、君王親發して青兒を憚す、朱明夜に承で時淹うすべからず、皐蘭徑を被ひ斯に路漸す、湛湛たる江水上に楓あり、目千里を極め春心を傷しむ、魂や歸り來れ江南を哀しむ。

【句解】●●亂曰　此の二字の解は前にあり。●●獻歲　獻は獻進なり。去年に比し一年を加ふ故に曰ふ。●●發春　卽ち初春なり。屈原が江南に遷りしは仲春なり。●●汩　汩疾なり。●●南征　江南に放逐せらる。●●菉蘋　白芷は正に是れ新春の景物。●●廬江　長薄　共に池名なり。●●廬江は『前漢書地理志』に陵陽の東南より出て北江に入る。今日の安徽省廬州府廬江縣の西、百二十里に當る。●●長薄は詳知する能はざるも之を左方に見て行くとすれば、廬江と遠からざるならん。乃ち其の歷程なり。●●●倚沼畦瀛　王逸曰く沼は池なり、畦は猶ほ區のごとし。瀛は池中なり。楚人池澤の中を名けて瀛と曰ふ。林子曰く倚は倚立なり、路上或は沼畦瀛の間に立て而して遙望すれば、人

民無く見る所甚だ廣博なり。和訓に「沼ニ倚リ瀕ニ畦シテ」としたる本あり。今用ひず。青驪は青馬と黒馬となり。結は連結、駟は四馬。齊千乘　時に夜獵する者を見る、駿馬も多く、亦從車同行の者多し。楚王が從者と畋獵の樂の事を言うて以て之を招くなり。縣火延起　玄顏烝處處に燈火を縣て、其光延起して天に映じ、玄天色を變じて紅天と化するを言ふ。步及驟處誘騁先　朱子曰く徒步の者、能く疾行して驟馬至る所の處に至る。誘は前導なり。疾行する者は、先て獵する者を誘導するなり。抑騖若通　引車右還　王逸曰く抑は抑止なり、騖は馳騖なり。若は順なり、妄に馳驚するも獵の功は無し。是を以て獵事を順通して、車を引て右に轉じ、以て獸の左方を射らしむるなり。古代射儀の方此の如きなり。與王趨夢　課後先　夢は雲夢澤なり。洪興祖が江南と江北とに就て細辨あり。王逸曰く楚八澤中を名けて夢中と爲す。所謂澤は江南より江北に跨るもの、今日の湖北省德安府雲夢縣治、唐の孟襄陽の氣烝雲夢澤、波撼岳陽城是れなり。乃ち此の雲夢に王と共に獵して、各の後先を爭ひ日課と爲したるなり。君王親發　王が自ら矢を發つ。憚は王逸曰く驚なり。五臣曰く憚は懼なり。林子曰く矢を負うて懼れて走るなり。春に當り放たるるの時、頃襄江南に至りて夜獵す。而して心益す傷む、魂離散する所以なり。靑兕は牛に似て一角靑色、重さ千斤。朱明承夜　夜獵する者、白日は猶ほ獵

し易し、日夜獵して止まざるなり。時不可淹　王逸曰く淹は久なり。歲月逝往、晝夜相續ぐ、年命將に老んとす、久處すべからず、當に急に來歸すべし。是の解可なり。五臣及び朱子は是の解を取らず、屈原が意を得ず。皐蘭被徑　皐は澤なり、被は覆なり、徑は路なり。斯路漸漸は沒なり、人の知らざる中に蘭が延びて、深く徑路を沒するに至る。漸は漸沒、又は漸入、水が流れて路上に入るなり。湛湛は水の多き貌、楓は木の名、秋に至りて葉丹し、漢宮多く之を植う。水に沿うて、而かも乾燥の地を愛する木なり。目極千里　王逸曰く湖澤博平、春時草短かし。千里を望見し、人をして春心を傷ましむるなり。林子曰く此の時遙に望み、亦堂室無し、亦酒食無し、亦歌舞なし、亦宗族無し、巫陽招く所の言を思はば、夢方に覺が如く、勢必ず得ず、能く傷心絕んと欲する無からんや。魂兮歸來哀江南　林子曰く國に畏弼無く、而かも令尹子蘭及び諸の讒諛日に君を禽荒に導びく。魂兮歸來、行ふ所度なし。江南の奥區彫喪し、索寞此に至らしむ。眞に哀しむ可し。魂卽し歸來せば、惟愁苦に終らんのみ。此れ奈何ともすべき無きの詞なり。征と生と韵、薄と博と韵、乘と烝と韵、還と先と韵、淹と漸と韵、楓と南と韵なり。屈復曰く此の段頃襄が不共戴天の仇を忘れ、而して猶夜獵荒遊す。此れ三閭の目を極めて春心を傷ましむる所以なり。文章起結の神妙、騷經の筆墨と異無し。

卷の第十

大招

王逸曰く大招は屈原が作る所なり。或は曰く景差と。疑ふらくは明むる能はず。洪興祖曰く屈原が賦二十五篇漁父以上是れなり。大招恐くは屈原が作にあらず。」朱子曰く大招は何人の作る所なるを知らず。或は曰く屈原と。或は曰く景差と。王逸が時より已に明にする能はず、其の原が作なりと謂ふは其の詞義高古、原に非んば及ぶ莫しとするにあり。原が作にあらずと謂ふは、原が賦二十五篇、騷經より漁父に至る其の目已に充つとするにあり。景差が作なりと謂ふは則ち絶て左驗無し。是を以て讀書の者、往往之を疑ふ。今宋玉が大小言の賦を以て之を考ふれば、凡そ差が語は皆平澹醇古にして、意亦深靖閒退なり。詞人墨客の浮夸豔逸の態を爲さず。然して後知る、此の篇は差が作たること疑ひ無きを。其の言ふ所、未だ神怪の惑、逸欲の娯を免れずと雖も、然かも小招に視ふときは則ち已に遠し。其の天道の諷伸動靜に於て、蓋し粗其の端倪を識るが若し。國體時政に於て、又頗る其の先後する所を知る。要するに儒者の窮理經世の學

に近しと爲す。予是に於て竊かに感ずることあり。之を出して以て後の君子を俟つ。林子曰く大招の一篇王逸既に謂ふ屈原の作る所と。又或は景差と言ふを以て疑を爲す。尙未だ其の差が作たるを決せざるなり。嗣で差の語、皆平澹醇古を以て、遂に差が手に成ると定むる者あり。（朱子を指す）全く其の篇中の文義を顧みず。總て「漢志」に屈原二十五篇を賦するの語あり。漁父以上既に其の數に滿ち、而して招魂と大招の兩篇、未だ著落あらざるを以ての故に、一は之を宋玉に歸し、一は之を景差に歸するのみ。而して李善又大招の篇名を以て、招魂を改めて小招と爲す。試に問ふ、玉と差と、皆屈原が徒、若し其く、玉の招は小たるべきや。後人其の說を守り敢て變せず、相沿て今に至る。反て許多の强解を添出して、附會穿鑿し、靈均絶世の奇文を把て、埋沒殆んど盡く。殊に歎ずべきなり。玄る者の先に在り。孟堅之を時論に參するに此の如く。遂に二十五篇の數を執り、以て左驗と爲して可なるや。且九歌十一篇、此より前淮南と劉向と皆之を定むるに九を以てす。『漢志』之に因る。若し之を二招に合せずんば僅に二十三篇のみ。卽ち二招は二十五篇の內に在りと謂て方に其の數に足して可なり。玉と差とに於て何ぞ涉らん。王逸は原が作たるを知ると雖も、又言ふ

放流九年に作り、自ら其の魂を招くと。宋の晁補之其の原が作たる疑ひ無きを決す。但其の何人を招くを知らざるのみ。皆確論にあらず。余謂ふ原放流より以後、念念懷王を忘れず、其の生きて楚國に還ることを冀ふ。鬱じて客死して歸葬寂と一言無きの理無し。骨肉土に歸す、魂魄之かざる無し。人臣君を以て歸と爲す。屋に升り危を履み、北面して皐ぶ。自から已む能はず。特に之を大と謂ふは、自招に別つ所以、乃ち君を尊ぶの詞なり。篇中段段の細敍は皆是れ懷王に對しての語。開首提出する魂無逃の三字は俊ち是れ懷王秦を逃るる隱衷、生前の神、死後の魂と、總て一念の轉ずる所と爲る。四方の招ある所以なり。云ふ所の飮食の豐、音樂の盛、美人の色、苑囿の娛、皆向日固より有する所、其の中亦各の制あり。招魂と大に相同じからず、逸欲を爲すならず。末の六段に至りて、親を親とし、民に仁、賢を用ひ不肖を退け諸侯を朝し、三代に繼を說出す。分明に五百年の興を把て、坐して懷王の身上に在り。異樣の歌動に屬すと雖も、其の實は三代の天下を得る、實に此に外ならず。此皆帝王の事、原豈能く自ら爲んや。舊注（朱子）認めて景差が原を招くと定む。楚王擧用等の語を硬添せざるを得ず。以て文義通じ難きを致す、最も怪しむべきもの。開首魂無逃の三字は乃ち禁止の詞、卽ち下文、無遠遙、無東無西、無南無北の義なり。竟に解して春氣奮發し、魂魄の已に散じて、而かも未だ盡きざるもの、

亦時に隨て感動して逃る所無しとするに至る。（朱子）獨り思はず、魂魄旣に散せば安んぞ所謂未だ盡きざる者あらん。若し果して逃るる所無くんば、卽ち亦他に往く能はず、來歸する能はず。何ぞ必ず其の遠遙する無きを戒しめ、又無益の招を爲さんや。且時に隨て感動する四字と語意絶て相接せず、總て題目を錯認して、原未だ死せずして景差之を招くと以ふに因ての故に乖謬支離此に至る。王逸が、玄冥の神徧く行て天地の間に凌馳し、其の陰氣を收め、閉て之を藏す、故に魂以て逃る可らずと謂ふが若きは、其の荒唐辯を待たず、亦辯を屑よしとせざるなり。」屈復曰く大招は三閭懷王を痛むの文なり。祭と曰はざるは體にあらざればなり。篇首無逃の二字已に明かに秦に逃るる事實を黜す。後段賢を用ひて不肖を退け、三公九卿を立、三王を尙ぶ。豈人臣が事ならんや。此の如きの資あり、而して秦に客死す。良に痛むべきなり。文甚だ平澹、意甚だ深微、愈よ平澹、愈よ深微、讀む者愈よ解し難し。而して議論愈よ紛紛。以上四家の說各の其の執る所あり。尙ほ林子が示す所の七十二家の說を探れば、發明する所あるべし。要するに臆に憑り穿鑿し、趾を削り履に適く者も無きにあらず。今時西村天囚氏は頗る楚賦に精通せり。其の著はす所の『屈原賦說』に於ても、數十家の異同を辨せり。而かも此れは是、彼れは非と斷ずる能はず。千載の後に生れて、千載の前を量る、誰か日光を眼前に視るが如きを得ん。

暗中摸索、或は尾或は端、其の握る所のものあれば乃ち足る。此の大招、屈作なりとし、景作なりとし、其の見ありと雖も、是れ亦暗中摸索、眞を握り得たりと言ふべからず。余は今假りに王逸に從て之を屈作と爲して讀む。屈として讀むときは神味の湧然たるを覺ゆ。宋玉とし、景差と爲すときは、一變して神味索然と爲る。其の是非は後來の君子を俟つ。

青春受謝　白日昭只　春氣奮發　萬物遽只　冥淩浹行　魂無逃只　魂魄歸徠　無遠遙只

青春謝を受け、白日昭なり、春氣奮發して、萬物遽ふ、冥淩浹行して、魂逃るること無れ、魂魄歸徠せよ、遠遙する無かれ。

【句解】青春　王逸曰く東方春の位其の色青し。謝は去なり。林子曰く物冬寒に到りて凋謝す。春至りて之を受け、日光地を照し漸く溫なり。王逸曰く盛陰已に去、少陽之を受く。則ち日色黃白、昭然光明、草木の類、皆氣を含み、芽蘖して生ず。魂魄も亦宜しく陽氣に順じて長養すべきを言ふなり。洪子曰く只は語の已む詞。林子曰く『詩經』に止字を用ふるの義。懷王秦より歸葬の候を點出す。春氣奮發　萬物遽　王逸曰く遽は猶ほ競のごとし。春陽の氣奮起し、上帝和氣溫燠を發洩し、萬物蠢然競起して生じ、各の滋茂せんと欲す。以て言ふ精魂亦宜し

く精明を奮發し、己盛壯ならしめよとなり。冥淩浹行　林子曰く淩は歷なり、幽冥の中拘繫せらるる無く、其の歷る所に任せ、以て周浹卽ち徧行くべし。而して魂は逃れて右方左方する無かれとなり。此の解王逸も朱子も共に異なる。林子の解を以て第一とす。林子曰く案ずるに懷王趙に走り、而して追はれ再び秦に入り、而して病死す。則ち魂の逃を思ふこと知る可し。無逃の二字便ち其の懷王を招が爲めに作れるを定む可きなり。魂が逃を思ふときは招くも能はざればなり。所謂畏れずして浹行するは可なり。畏れて逃竄するは不可なりとなり。故に「逃ル無シ」にはあらず、「逃ル無カレ」なり。魂魄歸徠　無遠遙　林子曰く遠去を待ず。已上是れ大招の冒頭、屈悔翁の新注全く朱子を奉ず、而して此の解全く林子を取る。是を是とする學者の本分此に在り。昭と遽と逃と遙と韵なり。

魂乎歸徠　無東無西　無南無北只　東有大海　溺水浟浟只
螭龍竝流　上下悠悠只　霧雨淫淫　白皓膠只　魂乎無東
湯谷寂寥只

魂や歸徠せよ、東する無かれ西する無かれ、南する無かれ北する無かれ、東に大海あり、溺水浟浟たり、螭龍竝び流れ、上下悠悠たり、霧雨淫淫と、白皓膠たり、魂や東する無かれ、湯谷寂寥

たり。

【句解】魂乎歸徠　以下十三字、林子曰く上文の無遠遙の意を申ねて、總て一句に下を起す。屈復曰く無北の北は西に叶ふ。古樂府に魚戲蓮葉北と。亦是れ法に叶ふ。摠て四方を提ぐ。下分之に應ず。溺水　能く人を溺沒する海水あるなり。其の流迅疾にして澌澌たり。螭は無角の龍。螭と龍と竝流するが如く、水が長く悠悠と流るるなり。淫淫　霧や雨の久日を經て歇まざるの意。白皓膠　王逸曰く皓膠は水の凍る貌。林子曰く其の霧雨の氣色、合して白皓と成る、膠粘の分たざるが如きを言ふ。膠が粘がねばるが如しと解するは、水の凍ると解するより景に於て凄慘たり。湯谷は日の出る所、卽ち暘谷なり。人跡の到らざる所、是を以て凄寂悽寥たり。此れ東方の往く可らざるを言ふ。澌と悠と膠と寥と韵なり。

魂乎無」南　南有」炎火千里
鯛鰅短狐　王虺騫只　魂乎無」南　蜮傷」躬只

【句解】炎火千里　東方の水盛に對し、南方は火盛を言ふ。蝮蛇は毒蛇、和語の「クチバミ」なり。蜒は長曲の貌。蟲類が寒地には少なく、暖地には盛んに長大と爲る。蜿は蠕動の貌。鯛は魚の名、皮に文あり。鰅魚は音庸の鳴く如し。又曰く鯛鰅は狀犁牛の如し。（洪興祖）林子曰く鯛鰅は狐の類。短狐は卽ち蜮、蜮ははまぐりに似て水中に出る怪物。『說文』に蜮は三足、一名射影、人の岸上に在る、影水中に見ゆ、人影を投じて之を射る、或は含沙射影と言ふ。孫思邈云ふ、亦射工と名く。其の蟲、目無くして耳利し、能く聽く、人の聲を聞て、俛ち口中の毒を以て人を射る。王虺は蟒卽ち大蛇なり。騫は擧なり、三物皆頭を擧げ、人の肉を食はんと欲す。南方の害此の如し、亦往く可らず。蜮と蜮と騫と躬と躬を官の音に叶しめ以て韵とす。

魂乎無」西　西方流沙　漭洋洋只　豕首縱目　被髮鬢只　長爪鋸牙　談笑狂只　魂乎無」西　多害傷只

【句解】流沙は沙漠を指すにあらざるも沙漠の意ありと見るも妨げなし、沙漠の害を擧ぐ。漭は洪子曰く水大の貌。林子曰く大野なり。今謂く流沙は水に乏し、大野と解すべし。洋洋は廣大涯無きなり。豕首縱目　首は豕に目は縱卽ち竪、而して被髮は鬢亂、而して爪は長く、牙は

鋸の如く、諛笑する樣、形容すべき無き怪神が乃ち此の流沙に居り、人に害傷を加ふること多し。西方も其れ亦往く可らず。洋と鬤と狂と傷と韵なり。

魂乎無北　北有寒山　逴龍赩只　代水不可涉　深不可測只
天白顥顥　寒凝凝只　魂乎無往　盈北極只

魂や北すること無かれ、北に寒山あり、逴龍赩たり、代水涉る可らず、深うして測る可らず、天白うして顥顥、寒うして凝凝たり、魂や往くこと無かれ、北極に盈てり。

【句解】逴龍は王逸曰く山名、其の山赤色草木を生ぜず。赩は赭赩、赤くして怒るが如きなり。代水は屈復本に代氷に作る。水を以て可とす。深きが故に涉るを得ず、亦測るを得ざるなり。顥顥は白光を形容す。凝凝は寒氣の結ぶ形容、水凍の貌と言ふは恐くは非なり。盈北極　寒氣の結ぶは北極を以て頂點と爲すの意。林子曰く寒氣滿ちて北極に至りて方に止む。人必ず其の凍を受る能はざる者此れ北方の往く可らざるを言ふ。已上の四段自招の詞に比するに、甚だしき詭異無く、其の天に上り地に入るを言はざる者は、天上地下、人見ることを得ざるを以て、必ず神恠の談を造出するは、君に對する莊重の體を失するあり。此れ酣酌至當の者、昔人（朱子）其の平澹醇古なるを謂うて景差が作る所と爲すは、大に謬る。赩と測と極と韵なり。

魂魄歸徠　間以靜只　自恣荊楚　安以定只　逞志究欲　心意安只　窮身永樂　年壽延只　魂乎歸徠　樂不可言只

魂魄歸徠せば、間以て靜なり、自ら荊楚に恣にし、安以て定なり、志を逞し欲を究めて、心意安し、身を窮め永く樂んで、年壽延ぶ、魂や歸徠せよ、樂言ふ可らず。

【句解】閒以靜　魂魄歸來するときは、只閒なり只靜なり、全く他の憂患無し。自恣荊楚　安以定　王逸曰く四方は害多し、以て游ぶべからず。獨り荊楚は樂饒く、以て意を恣にし之に居るべく、安定にして危殆無し。林子曰く國に享用す、以て意に任せ拘無く、身危殆せざる可し、故居に歸れと言はざるは、國を以て家と爲せばなり。卽ち此の一句、更に其の懷王を招くが爲めに作るを決す可し。逞志究欲　逞は快、究は終なり。林子曰く下文の十三段を伏すと。年壽延　林子曰く既に死して壽と言ふは乃ち其の君を死すとするに忍びざればなり。下文の曼澤怡面の一段を伏す。樂不可言　總て歸國の樂を言ふ。下文方に分て之を言ふ。靜と定と韵、安と延と言と韵なり。

五穀六仞　設菰粱只　鼎臑盈望　和致芳只　內鶬鴿鵠　味豺羹只　魂乎歸徠　恣所嘗只

五穀六仞、菰粱を設く、鼎臑望に盈ち、和芳を致す、鵾鴽鵠を内て、豺羹を味ふ、魂や歸徠せよ、嘗むる所を恣にせん。

【句解】五穀は種種の説あり、今稻と稷と麥と豆と麻と爲す。六仞は穀を積むの多きを言ふ。設は施設。菰粱は蔣實、又雕胡卽ち「アハ」の一種なり。鼎臑は鼎鑊中に煮熟する所の羹湯なり。盈望は一望皆是れなり。和致芳 王逸曰く醯酸を致すなり、芳は椒薑を謂ふなり。林子曰く又之を調和し其の芬芳を致すなり。俗語の鹽梅を能くすることなり。何ぞ醯酸と椒薑とを指すならん。內鵾鴽鵠 洪子曰く內は納と同じ。鵾は鵾鵠なり、鴽は鳩に似て小、青白なり、鵠は白鵠と黃鵠とあり、和名「ククヒ」なり。此等の鳥類を烹て以て豺の羹と調理法を取る。豺肉ならば日本人に於て誰か眞に之を食ひしものあるや。肉味の如き其の美惡我輩の知る所にあらず。恣所嘗 林子曰く此等の肉皆人の必ず食ふ所のもの、故に嘗と曰ふと。粱と芳と羹と嘗と韵なり。

鮮蠵甘鷄　和楚酪只　醢豚苦狗　臑敦蓴只　吳酸蒿蔆　不沾薄只　魂兮歸徠　恣所擇只

鮮蠵甘鷄、楚酪を和せり、醢豚苦狗、敦蓴を臑にす、吳酸蒿蔆、沾薄ならず、魂や歸徠せよ、擇ぶ所を恣にせん。

【句解】鮮蠵は一に鮮蠵に作る、生潔なる大龜を曰ふ。甘鷄は鷄の肥たるもの、肉美故に甘と曰ふ。酪は乳漿なり。醢は「ヒシホ」肉醬なり。苦は膽を以て漿に和す、狗の膽と豚の醢と相和して調理す。臑は「ナマス」。敦蓴は一名を蓴荷と曰ふ。葉初生の甘蔗に似て、根は薑牙に似たり。蓋し切て以て香と爲す。蒿蔆は葉艾に似て水中に生ず、脆美にして食ふべし、吳人善く羹と爲すと。酸は其の味より來る、乃ち「ヨモギ」なり。不沾薄 沾は汁の多きなり、薄は味の無きなり、所謂水臭う無くして正に是れ甘美なり。恣所擇 來りて己が好む所の食物を擇べとなり。酪と蓴と薄と擇と韵なり。

炙鵠烝鳧　煎鴻鶬只　煎鱄鰿臛　煎雀甘鼈只　遽爽存只　魂乎歸徠　麗以先只

鵠を炙り鳧を烝し、鴻鶬を煎る、鱄鰿を煎り雀を鼈にし、遽爽存す、魂や歸徠せよ、麗て以て先んせん。

【句解】炙は燔肉なり。鵠は和名「ヒバリ」然れども一本鶴に作る。鳧は鳧鴨なり。烝は火光なり、炮爛と成語して鶉肉を湯に沈めるなり。鱄は鯖に同じ鮒魚なり。鼈はあつものなり。林子

曰く恆味を以て一び煎臛を經、爽烈の致、遽かに其の中に存するなり。麗以先　麗は一本進に作る。饌の至美なるもの、故に先と曰ふ。屈復曰く『老子』云ふ五味は人の口を爽からしむ。爽は爽快の味なり、麗は類なり、此れ味の美なるもの故に先と曰ふ、以て之を招く。陳と存と先と韵なり。

四酎幷孰　不レ翌レ嗌只　清馨凍歙　不レ歠レ役只　吳醴白蘖　和二楚瀝一只　魂乎歸徠　不二遽惕一只

四酎幷せ孰し、嗌に翌らず、清馨凍歙、役に歠しめず、吳醴白蘖、楚瀝に和せり、魂や歸徠せよ、遽惕せざらん。

【句解】四酎は則ち四重釀を言ふ。朱子曰く秦の月令に云ふ春之を釀して孟夏に始めて成る。漢も亦春を以て釀し、八月に乃ち成る。幷孰　林子曰く每重俱に孰過するなり。不翌嗌　美酒なるが故に滑に口に入て、曾て苦翌ならざるなり、嗌は喉なり。清馨は酒香の清烈芳馨を言ふ。凍歙は冷酒として飲むを言ふ。歙は飲と同じ。其の强烈なるを以て熱飲するときは恐くは過盛耐へがたければなり。不歠役　下役の者之を飲めば、醉ひ易く儀を失す、是の故に與に歠ざるなり。吳は吳國、醴は「コザケ」一日一宿の酒、白は白色、蘖は「モヤシ」麴なり、「カウヂ」なり。

和楚瀝　瀝は清酒なり。林子曰く吳醴を以て楚造の酒に參入す。別に是れ一種、前に比すれば稍清し。不遽惕　林子曰く酒は以て憂を解く可し、此を得ば、惶遽悚惕の患無かる可し。已上飲の以て自恣すべきを言ふ。嗌と役と瀝と惕と韵なり。

代秦鄭衛　鳴竽張只　伏戲駕辯　楚勞商只　謳和二揚阿一　趙簫倡只　魂乎歸徠　定二空桑一只

代秦鄭衛、鳴竽張る、伏戲の駕辯、楚の勞商、謳て揚阿に和す、趙簫倡ふ、魂や歸徠せよ、空桑を定めん。

【句解】代も秦も鄭も衛も國名、此の四國の樂。鳴竽張　以上四國が製する所の笙竽を鳴張するなり。伏戲は古の伏羲なり、卽ち始めて瑟を作りし人。駕辯と勞商は共に曲名。駕辯の曲を作り、譜を瑟に入れて之を彈ず、楚人之に因て勞商の曲を作る、又古樂なり。謳は手に樂器を持たず口のみ謳ふなり。揚阿は卽ち陽阿、前に辨ぜり。趙は國名、趙に出る簫を吹て謳の倡と爲す、所謂合奏なり。空桑は或は謂ふ楚地の名、或は謂ふ琴瑟の名と。林子曰く楚の勞商の、古瑟に合するや否やを辨定するなり、竽簫の若きは時樂、本定音あり、唯之を聽くのみ。故に但、瑟を定むと言ふ。屈原が懷王の魂魄を招きて、共に瑟を調べて宜しからずやとなり。張と

商と倡と桑と韵なり。

二八接武　投詩賦只　叩鐘調磬　娭人亂只　四上競氣　極聲變只　魂乎歸徠　聽歌譔只

二八武を接して、詩賦に投す、鐘を叩き磬を調べ、人を娭しめて亂む、四上氣を競ひ、極聲變す、魂や歸徠せよ、歌譔を聽け。

【句解】●二八は歌女十六人、●接は連接なり。●武は迹武なり。●投は投合なり。●詩賦は古代の雅樂、卽ち關雎鹿鳴の類、之を分奏するなり。●金を鐘と曰ひ、石を磬と曰ふ。●亂は亂理なり。●四上は王逸曰く上の代秦鄭衞の四國を言ふなり。洪子曰く代秦鄭衞の鳴竽と、伏戲の駕辯と、楚の勞商と、趙の簫となり。朱子曰く四上は未詳。林子曰く歌の四面合奏する、上至高に達するなり。●競氣は爭うて力を用ひ以て其の氣を致すなり。此れ乃ち猶ほ秦月遏雲の響、故に四上と曰ふ。●競氣と曰ふ。以上諸家の說、各の當る所あり。要するに上の至極の聲、又變調を成す、故に極聲變と曰ふ。●四國の歌を二八の歌女が合奏するが故に氣を競ふと曰ふに歸著するものなり、非常の相違あるにあらず。●聽歌譔　王逸曰く譔は具なり、衆樂を觀聽して具はらざる無きを言ふ。林子曰く譔は述なり、歌中述る所の意を聽くなり。林子曰く已上音樂の以て自恣すべきを言ふ。招魂篇に

女樂を言ふは、新歌鄭舞に在り、此は則ち舞を言はず、重を伏戲の古瑟を定むに歸す、招魂篇に自作同心賦と言ふ。此は則ち二八投詩賦と言ふ。蓋し樂を定むるは乃ち帝王の事、國君食を侑むるの樂あり、故に飮食の後に接敍す、卽ち此れ尤も其の懷王を招くが爲めに作るを決すべし。賦と亂と變と譔と韵なり。

朱脣皓齒　以姱只　比德好閒　習以都只　豐肉微骨　調以娭只　魂乎歸徠　安以舒只

朱脣皓齒、姱以て姱なり、德を比して閒を好み、習うて以て都、豐肉微骨、調うて以て娭む、魂や歸徠せよ、安じて以て舒ん。

【句解】●朱脣皓齒は美人の容貌を言ふ。●姱は好貌、「ウツクシ」なり。●姱はオゴルに足るべき美なり。●比德好閒　●習以都　洪子曰く『漢書』に閒雅甚都と。林子曰く比は同なり、衆女皆閒靜の德を喜び、而かも輕佻ならず、且威儀に習うて鄙野ならざるなり。從來都は「ミヤビヤカ」と訓す。●豐肉微骨　●調以娭　王逸曰く美人肥白潤澤、小骨厚肉、肌膚柔弱、心志和調、宜しく燕に侍して居り、以て自ら娭樂すべきなり。●安以舒　身其の所に止り其の意を舒ぶるを得るなり。姱と都と娭と舒と韵なり。

嫮目宜笑　娥眉曼只　容則秀雅　稦朱顏只　魂乎歸徠　靜以安只

嫮目笑ふに宜し、娥眉曼たり、容則秀雅、稦して朱顏なり、魂や歸徠せよ、靜にして以て安し。

【句解】嫮は嬔と同じ、目の好き貌、笑ふ際の美目盼たるを言ふ。曼は長なり、眉毛の長うして輕細なるなり。容は容姿、則は則法。稦は幼なり。朱顏桃花の如き顏色なり。靜以安林子曰く心他擾無うして其の神を馴伏するを得。曼と顏と安と韵なり。

姱修滂浩　麗以佳只　曾頰倚耳　曲眉規只　滂心綽態　姣麗施只　小腰秀頸　若鮮卑只　魂乎歸徠　思怨移只

姱修滂浩、麗以て佳たり、曾頰倚耳、曲眉規たり、滂心綽態、姣麗施せり、小腰秀頸、鮮卑の若し、魂や歸徠せよ、思怨移らん。

【句解】姱は美貌、修は容儀、滂浩は廣大、美人が身の高きを言ふ。麗は王逸は美麗と解す、林子は附依と解す。曰く麗以佳とは自ら德性を治め、寬能く人を容る、其の類と附依し、佳にあらざる者無し。乃ち「日月天ニ麗ク」の麗と同じく、平聲に讀むなり。他の物と能く調和するとの意なり。余は王逸の美にして佳と爲すの說を取る。朱子が一辯無きは不審し。曾頰は面

容圓滿、所謂重たげに見ゆるなり。倚耳は耳朶大にして物に倚るがごとき貌。曲眉は王逸曰く正圜の貌、絕殊なり。規は「マドカ」と訓すと雖も、所謂灣形の「マドカ」を言ふなり、日月の圓の如きにはあらず。滂心は心の大なるを言ふ。綽態は綽約の姿態、乃ち「シトヤカ」なり。姣麗施は姣は好なり、天質美なる上に裝を施せざる無きなり。小腰秀頸　腰は細小、頸は長秀、是れ鮮卑族の狀貌なり。鮮卑は山の名、卽ち內蒙古に在り。『史記』に所謂東胡是れなり。史家傳ふる所に由て之を見れば、東胡が匈奴に擊破せらるるや、烏桓山方面に走りしを烏桓部と爲し、鮮卑山方面に走りしを鮮卑部と爲すと。然り匈奴の東胡を逐うて走らせしは秦漢以後の事とす。秦漢以前に鮮卑なる種族あるを知る者はあらず、又知る道理無きものなり。假りに朱子の說卽ち此の大招を景差の作とするも、屈原が門人、秦漢の際の人にあらず。然らば則ち此の大招は屈が作にもあらず、又景が作にもあらず、全く漢以後の作と爲さざるを得ず。王逸が僞作せしものか、王逸の前に人在て之を作りしものなるか、今遽に斷案は下しがたし。『前漢書』（九十）に黃金犀毗一の語あり。師古曰く犀毗は胡帶の鉤なり。亦鮮卑と曰ふ。亦師比總と謂ふ。一物なり、語に輕重あるのみと。孟康曰く犀毗は要中の大帶なりと。然らば今謂ふ所の鮮卑は種族の人を指すにあらずして、其の大帶の美を指すものなるやも知る可らず。林子曰く鮮

卑は衰帶頭なり、此の帶約して之を束ぬ、面容圓滿と。是の說以て信を措くべきなり。●●思怨移は王逸曰く移は去なり、美女の以て憂を忘れ、怨思を去るを言ふなり。林子曰く宮に入らば妬る、恩移らば怨生ず、一たび思ひ此に及ばば則ち是の女得易からず、誠に樂むべきなり。今王逸を以て可とす。林子の解繫に過ぐる無きや。佳と規と施と卑と移と韵なり。

易中和心　以動作只　粉白黛黑　施芳澤只　長袂拂面　善留客只　魂乎歸徠　以娛昔只

易中の和心、以て動作す、粉白黛黑、芳澤を施す、長袂面を拂うて、善く客を留む、魂や歸徠せよ、以て昔を娛まん。

【句解】●●●易中和心　●●●以動作　林子曰く其の中心、樂易和平、之を行動作止の間に施し、人と相宜しきなり。心中柔和なれば、外形も自ら其の柔和が顯はれるとなり。●●●粉白黛黑　粉面白くして玉の如く、黛眉を畫き鬢黑きなり。●●施芳澤　芬香膏澤を以て、之を衣に施するなり。●●長袂は長袖なり。●●●拂面　●●●善留客　宴に侍し長袖を飜して以て舞ふ。客をして留戀去るに忍びざらしむ。以娛昔　王逸曰く昔は夜なり、一本夕に作る。林子曰く以て寢に侍す可きなり。夕と言ふも何ぞ必ず侍寢ならん。但今夕を娛まんと見て可なり。作と澤と客と昔と韵なり。

青色直眉　美目嫮只　靨輔奇牙　宜笑嗎只　豐肉微骨　體便娟只　魂乎歸徠　恣所便只

青色眉に直る、美目嫮たり、靨輔奇牙、笑に宜し嗎たり、豐肉微骨、體便娟たり、魂や歸徠せよ、便ずる所を恣にせん。

【句解】●●靨輔は和語の「エクボ」なり、輔は酺と同じ、頰の前に在り。奇牙は皓齒の意に見よ。嗎は嗎然、和語の「ニッコト」笑ふ貌。林子曰く靨輔の八字は上文の嫮目宜笑の二句を申ぬと。豐肉は身の肥滿するなり。●●微骨は骨の細きなり。便娟は好き貌。恣所便　林子曰く此は乃ち本質自然の美、便安する所に任從せて之を用ふ。林子曰く已上五段皆美人の以て自恣すべきを言ふ。招魂篇の美人は止其の歌舞の妙を形容す。此は則ち初め德を比するを言ひ、次は姱修を言ひ、又次は易中和心を言ふ、俱に性情の上に在て描寫す。而かも穠朱顏の一句を以て錯綜插入し、語語鄭袖姝妬讒を行ふと對針す。且鄭袖王に事ふる日久し、其年を論せば亦廢す可し、自然の美ある者、別に便なる所を擇ぶべし。卽ち此れ更に其の懷王を招くが爲めに作るを決すべきなり。王逸曰く選ぶ所の美女五人、儀貌各の異なり、魂の所安を恣にして、以て棲宿に侍するを言ふ。嫮

と嗎と娟と便と韵なり。

夏屋廣大　沙堂秀只　南房小壇　觀絕霤只　曲屋步櫚　宜擾畜只　騰駕步遊　獵春囿只

夏屋廣大にして、沙堂秀たり、南房の小壇、觀霤を絕つ、曲屋の步櫚、宜しく畜を擾くべし、騰駕步遊、春囿に獵す。

【句解】夏屋は大屋なり。沙堂は沙を以て磨して瑩平ならしむるなり。秀は異秀。林子曰く此れ離宮を言ふ。南房　王逸曰く房は房室。小壇は小堂なり。洪子曰く壇は音善と。觀は樓觀、二重三重の建築物を總て觀と曰ふ。上りて以て觀望すべき義より來る名詞なり。霤は洪子曰く屋水の流なり。林子曰く南に向ふの房、又屋せざるの平臺あり。房上の樓簷、水を捲て別に通じ、平臺に濺滴せざるなり。絅齋曰く二階作りの樓閣が餘りに高くして雨の滴が絕えて見えぬ樣にあるなり。此の說は林子の說に及ばざるなり。曲屋は周閣なり。步櫚は一本步壇に作る、長廊を言ふ、步行すべきものなり。擾畜は禽獸を馴養するを言ふ。洪子曰く畜は音嗅、『爾雅』に牛馬羊豕は畜と說き、麋鹿虎豹は獸と論ず。六畜は本六罾に作る。後乃ち畜養の字を借りて之を爲ると。騰駕步遊は或は馬を騰せて遊び、或は步に任せて遊ぶなり。春囿は春園なり、囿

は苑に垣あるを言ふ。林子曰く未だ囿に至らざるときは車に乘り、既に囿に至れば步行す。方に其の遊の樂を盡くすべく、獵して搜玩至らざる所無し、田獵者の若く然り、眞の獵にはあらず。王逸は眞の獵の若く解す。林子此の說ある所以なり。秀と霤と畜と囿と韵なり。

瓊轂錯衡　英華假只　茝蘭桂樹　鬱彌路只　魂乎歸徠　恣志慮只

瓊轂錯衡、英華假なり、茝蘭桂樹、鬱として路に彌つ、魂や歸徠せよ、志慮を恣にせん。

【句解】瓊は玉なり、轂は車の「コシキ」なり。衡は車の「クビキ」なり。錯は錯雜。英華は美麗の意。假は大なり。林子曰く騰る所の駕乘、玉を以て轂を飾り、金を以て衡を錯る、大に光耀あるなり。茝蘭は香草、桂樹は香木。鬱は鬱鬱然、卽ち香草や香木の叢生する形容。彌は彌滿なり、步道此の如く芳香あるなり。恣志慮　其の賞玩に任し、以て平昔の憂を舒ぶべきなり。假と路と慮と韵なり。

孔雀盈園　畜鸞皇只　鵾鴻羣晨　雜鶖鶬只　鴻鵠代遊　曼鷫鷞只　魂乎歸徠　鳳凰翔只

孔雀園に盈ち、鸞皇を畜ふ、鵾鴻羣晨、鶖鶬を雜ふ、鴻鵠代遊し、鷫鷞を曼しむ、魂や歸徠せよ、

鳳凰翔る。

【句解】●畜は畜養、園中に種種の鳥類が游戯する狀を言ふ。●鸞皇は鸞鳥と鳳皇となり。林子曰く鸞は鳳皇の佐と。●鵾は鵾雞、●鴻は鴻鶴、●鶾晨は曉旦に鳴くを言ふ。●鶖鵝は和名「シギ」水鳥なり。●代遊は交代に遊戯するなり。●鷫鸘は和名未だ詳ならず、古代に五方神鳥の說あり。東は發明、南は焦明、西は鷫鸘、北は幽冒、中央は鳳凰、相傳ふ鸑鷟は長頸綠身、其の形雁に似たりと。●囿中に此の如き鳥があるなり。●鳳凰翔 林子曰く鳳道あるときは見る、囿中に在らず、王楚に歸り必ず能く治を致すを以ての故に翔るなり。下文の六段を伏す。已上の二段離宮苑囿の以て自恣すべきを言ふ。招魂篇、先づ堂室を提出し、著實に描寫し、然して後、美人宗族飮食歌舞の娛を落入す。此れは則ち甫に歸徠と言うて便ち飮食歌詩を敍し畢り、方に轉じて離宮苑囿に入る。蓋し懷王の宮殿現に存す、別に堂室を營むを待ざるなり。●即ち此れ要に其の懷王を招くが爲めに作るを決すべし。王逸曰く鸞皇以下皆大鳥以て仁智の士に喩ふ、楚國の賢多きを言ふ、魂宜しく來歸すべし。今言ふ楚國に賢多しと言ふは屈原の欲せざる所、決して此の如き比喩にあらざるなり。皇と鵠と鵝と翔と韵なり。

曼澤怡面　血氣盛只　永宜厥身　保●壽命一只　室家盈庭　爵

祿盛只　魂乎歸徠　居室定只

曼澤怡面、血氣盛ん、永く厥の身、壽命を保つべし、室家庭に盈ち、爵祿盛ん、魂や歸徠せよ、居室定めん。

【句解】●曼澤は顏面の光澤が曼く持續するなり。●怡面は懽怡の面なり。●血氣盛 林子曰く心寧ければ身養ふべし。●保壽命 林子曰く身養へば年延ぶべし。●室家は宗族。●爵祿盛 宗族皆朝に在て富貴を受く。此れ親を親とするの道、治を致すの本なり。●居室定 林子曰く爵祿の厚薄を以てして其の居室の小大を定むるは、其の才を別ちて其の功を勵ます所以なり。此の段上を結び下を生ず。●盛と命と定と韵なり。

接徑千里　出若雲只　三圭重侯　聽類●神只　察篤●天隱一　孤寡存只　魂乎歸徠　正始昆只

接徑千里、出ること雲の若し、三圭重侯、聽こと神に類す、察して天陰を篤うし、孤寡存す、魂や歸徠せよ、始昆を正うせん。

【句解】●接徑は楚國の徑路相接するなり。●千里 千餘里の路遠きも、民出て徑に行く者甚だ多し、地廣く民衆し、此れ皆有爲の資なり。●三圭は公と侯と伯となり。公爵は桓圭を執

り、侯爵は信圭を執り、伯爵は躬圭を執るなり。重侯は子爵と男爵となり。或は言ふ、重侯は貴族なりと。或は言ふ、陪臣なりと。要するに楚國、王號を僭す、是を以て之に事ふるもの公侯伯子男の五爵を僭稱せしなり。聽類神　朱子曰く聽察精審にして、神明の如きなり。公侯の其の民に於て之を聽察すること神明に類すとの意。林子曰く類は祭の名、神を祀るは民を治むる所以、重臣從祭は此れ有爲の輔なり。朱林二家其の解を異にす、今朱子を可とす。林子は鑿に過ぐ。篤天隱　孤寡存　天は早死の人、隱は志を得ずして逃れし人、孤は幼にして父無き者、寡は老て夫無き者、此等憐む可き人に皆其の情を篤うするなり。始昆は其の初始を正うし、又其の後昆を正しうせんとなり。雲と神と存と昆と韵なり。

田邑千畛　人阜昌只　美冒衆流　德澤章只　先威後文　善美明只　魂乎歸徠　賞罰當只

田邑千畛、人阜昌なり、美衆流を冒て、德澤章なり、威を先にし文を後にし、善美明なり、魂や歸徠せよ、賞罰當らん。

【句解】田は田野、邑は邑居、畛は和訓「ナハテ」『說文』に井田の間の陌とあり、田上の道と注するが普通なり。畛は「マツル」と訓して鬼神を郊野に畛祭する義あり、今の文とは關係せず。人は人民、阜昌は盛熾なり。楚國の田野城郭、道路、都邑、皆廣大にして人民は熾盛、他國より樂の饒きを言ふ。但孤寡存するのみならず。美冒衆流　德澤明　林子曰く民の流品齊しからず。皆美政あつて以て之を覆冒す、故に世に德澤が明なるなり。先威後文　民を治むるに先づ威武を以て之を嚴にし、後に文德を以て之を化す、而して始めて善美明なり。君民共に善美の中に動作するを得るなり。賞罰當　賞罰の平當なるは政法の行はる所以なり。昌と章と明と當と韵なり。

名聲若日　照四海只　德譽配天　萬民理只　北至幽陵　南交阯只　西薄羊腸　東窮海只　魂乎歸徠　尚賢士只

名聲若日の若く、四海を照す、德譽天に配す、萬民理る、北は幽陵に至り、南は交阯、西は羊腸に薄り、東は海を窮む、魂や歸徠せよ、賢士を尚ばん。

【句解】名聲若日　照四海　天下の明王は此の如くなるべきなり。德澤と善美と章明の極なり。德譽配天　萬民理　林子曰く覆冒する所のもの屆らざる無し。此に至り亦賞罰を待ず。幽陵は幽州、今日の直隸省順天府大興縣の西南。交阯は交趾と同じ、今日の安南國交州府の西。羊腸は山の名、今日の山西省太原府太原縣の西北。窮海　東方は唯海水あり山岳なし。此の東西

南北は楚國を中心としての方位なるは勿論なり。●尙は尙進。林子曰く德譽遠播すれば則ち四方の賢士、必ず爭うて之に歸す、故に得て尙ぶ可きなり。海は喜の音に叶はしめ、以て理と陞と士と韵を合す。

發政獻行　禁苛暴兮　誅讒罷兮　直贏在位　近禹麾兮　豪傑執政　流澤施兮　魂乎歸徠　國家爲兮

【句解】●發政獻行　林子曰く上より法令を布くを發政と曰ひ、下より治狀を進むを獻行と曰ふ。●禁苛暴　苛は苛虐又は苛暴又は苛煩と成語して、上より下を殘酷に取扱ふことなり。是を禁ずと言ふは卽ち寬大の處置を取るなり。●誅讒罷　俊傑を擧用して政治機關を運轉せしめ、無能にして徒らに尸位素餐する徒を誅退せしむるなり。陞は陞階、壓は壓抑、政堂に在る諸官を威壓する有能の士、讒は讒非、罷は罷駑、無能の士は他を讒非することを知る。是を以て他より亦讒非せらる。而かも己が爲す所は罷駑、聊かも用に立たざるなり、誅ざる可らず。●直贏は正直にして餘裕綽綽たる、有能の士を言ふ。●在位　近禹麾　王逸曰く禹は聖王人を知るに明なり。麾は擧手なり。忠直の人顯位に在り、而して餘の賢俊以て之が儲副と爲らば、誠に夏の禹王が指麾士を取るに近し。一國の人悉く之を進むるなり。朱子曰く禹麾は未詳。林子曰く直士位に在て邊境の遠きを極む、凡そ位に在る者然らざるは無し。禹麾は禹が指麾する所の處を謂ふ、遠の極なり。王解も通せざるにあらず、然れども林解正を得たるを覺ゆ。●豪傑執政　流澤施　前の擧傑は登用する人の方より言ふ、此の豪傑は登用せられたる人に就て言ふ。已に登用せられたる以上は惠澤を遠邇に及ぼして、四方其の施を受けざるは無きなり。●國家爲　爲は治爲なり、此の如くならば楚の國家大に治らんとなり。暴を眉の音に叶へ、罷と麾と施と爲と韵なり。

雄雄赫赫　天德明只　三公穆穆　登降堂只　諸侯畢極　立九卿只　昭質既設　大侯張只　執弓挾矢　揖辭讓只　魂乎歸徠　尙三王只

【句解】●雄雄赫赫　天德明なり、三公穆穆、堂に登降し、諸侯畢く極り、九卿を立て、昭質既に設け、大侯張り、弓を執り矢を挾み、揖して辭讓す、魂や歸徠せよ、三王を尙ばん。●雄雄赫赫は王逸曰く威勢盛なり。楚王雄雄の威、赫赫の勇あるを言ふ。●天德明　天に

配するの德、勢盛を以て益す明、天下誰か服せざる者あらん。三公は太師と太傅と太保、是れ周官なればなり。後漢には太尉と司徒と司空を三公と稱す。北魏の代太師太傅太保は三師と稱す。穆穆は和美の貌。周官の制に倣うて、變理を論道するなり。登降堂　政堂を上下するなり。諸侯畢極　畢は盡なり、極は至なり。天下の諸侯盡な至りて楚に朝するなり。立九卿　周の代、三孤と六卿あり、合して之を九卿と曰ふ。三孤は少師と少傅と少保なり。六卿は冢宰卽ち天官治を掌る。司徒卽ち地官教を掌る。宗伯卽ち春官禮を掌る。司馬卽ち夏官兵を掌る。司寇卽ち秋官刑を掌る。司空卽ち冬官工を掌る。楚乃ち周に倣うて此等の官を備ふ。純乎として一代の興王と爲らん。昭質は洪子曰く質明にして、始めて事を行ふ。朱子曰く昭質は射侯畫く所の地、白質赤質の類を言ふが如し。是れ的を當る向ふの粉地を言ふ。射を學ぶ者、的無くんば能はず。政治を行ふ者も亦的無くんば能はず。昭明卽ち善良なる的有るときは自ら善射する所以なり。此の的卽ち目當を設け、而して大矣　卽ち射る所の布、虎侯豹侯の類の如きを言ふ。王逸曰く王者は當に諸侯を制服すべし。故に布を名けて侯と爲し之を射る。旣に設けて張る、諸侯を制服する所以。『周官考工記』及び『禮記射義』に詳悉なり。執弓挾矢　正に射を行はんと欲するの諸侯が、互に禮を守る。揖は挨拶なり。辭讓は互に先を讓るなり、我先きに射

んとするが如き無作法は爲さざるなり。戰國の世此の禮廢せるものの如し。是を以て此の禮を起すは卽ち先王の昭世を興すなり。尙三王　尙は尊尙、禹と湯と文王を三王と稱す。此の三王を以て法と爲さば、天下は必ず治るなり。林子曰く已上の五段民を養ひ、民を教へ、賢を擧げ能に任じ、國家を治め、諸侯を朝し、三代に繼ぎ興るを言ふ。其の自ら荊楚に恣ままにし志を逞し欲を究め、盡さざる所無しと謂ふ可し。語語皆帝王の事、原の能く自爲する所にあらず。讀で此に至れば、則ち懷王を招くが爲めにして作ること、問を待すして自ら明なり。屈復曰く七段皆帝王の政、此を以て懷王を招く、其の心の悲痛何如と爲すや。明と堂と卿と張と讓と王と韵なり。

卷の第十一

惜誓

王逸曰く惜誓は誰が作る所なるを知らず、或は曰ふ賈誼と、疑ふらくは明む能はず。朱子曰く惜誓は漢の梁の太傅賈誼が作れる所、史漢誼が傳に於て此の篇無し。故に王逸或は誼が作と云ふと、謂ふと雖も、疑うて明にする能はず。獨洪興祖以爲らく其の間の數語、弔屈原賦と、詞指略同じ。意ふに誼が作たること疑ひ亡き者なり。今其の辭を玩するに實に亦瓌異奇偉、計るに誼にあらずんば能く及ぶこと莫し。故に特に洪が說に据て并せて傳中の二賦を錄して以て一家の言に備ふと云ふ。(以上朱子)賈誼は洛陽の人。漢の文帝其の名を聞き、召して博士と爲す。超て太中大夫に遷る。其の言を納用して、議するに公卿の位に任ずるを以てす。周勃、灌嬰、張相如、馮敬の屬、賈が年少重用せらるるを毀つ。文帝竟に之を疎んじ、其の獻策を用ひず。賈を以て長沙王の太傅に移す。三年復召して以て梁の太傅と爲す。數ば天下の事を論じて、匡建する所あり。後梁王勝、馬より墜て死す。賈自ら傅と爲りて無狀を傷み、常に哭泣、後歲餘にして

亦死す、年三十三。劉向言ふ賈が論の如きは甚だ美、古の伊尹管仲も未だ遠く過ぐる能はざるなりと。今惜誓を以て賈が作と爲すは、余も亦深く信ずる所。明の張天如が漢魏百三家集を編し、而して此の惜誓を賈が集に收む、識ありと謂ふ可し。

惜余年老而日衰兮　歲忽忽而不反　登蒼天而高擧兮　歷衆山而日遠

余が年老て日に衰ふるを惜む、歲忽忽として反らず、蒼天に登りて高く擧り、衆山を歷て日遠し。

【句解】●惜誓●　王逸曰く惜は哀なり、誓は信なり、約なり。懷王己と信約して復之に背くを哀惜するを言ふ。古は君臣將に共に治を爲す、必ず信誓を以て相約す。然して後言乃ち之に從ひ、身以て親む。蓋し懷王始ありて終なきを刺すなり。朱子は此の二十七字を注するに、設言、高上り高う上らうと。今言ふ此の數文字は彼の「惜誦」より來るものなり。惜誦以致レ愍　發憤以抒レ情、指二蒼天一爲レ正　乃ち天を指して誓を爲し、其の發憤、其の抒情、我が志は高遠なるなり。而かも其の志は遂ぐる能はず、年先づ老い、日先づ衰へ、歲月遂に忽過して反らず、益す以て哀惜すとなり。賈が屈に代て其の哀を言ふ。絅齋の如く平易に讀むべきものにあらず。反

と遠と韵なり。

觀二江河之紆曲一兮　離二四海之霑濡一　攀二北極一而一息兮　吸二沆瀣一以充レ虚　飛二朱鳥一使二先驅一兮　駕二太一之象輿一

江河の紆曲を觀、四海の霑濡に離ふ、北極を攀て一たび息ひ、沆瀣を吸うて以て虚に充つ、朱鳥を飛して先驅せしめ、太一の象輿に駕す。

【句解】紆曲は紆廻曲折、江も河も東西に紆廻し、南北に曲折する、往來共に辛酸なるなり。離は遇なり。霑濡　四海は常に風波起る、衣服之が爲めに悉く霑濡なり。攀北極而一息　洪子曰く『晉志』云ふ北極五星、天運窮り無し、三光迭に耀き、極星は移らず、故に曰ふ其の所に居て、衆星之に拱ふと。其の動搖なき所に至りて以て一たび休息し、是に於て沆瀣の氣を吸うて以て虚卽ち飢渴の療に充んとなり、而して我が先驅者と爲る者は朱雀卽ち神鳥なり。洪子曰く沈存中云ふ朱雀は何物を知ること莫し、但鳥にして朱なる者を謂ふ。羽族赤うして翔り止り、集るときは必ず木に附く、此れ火の象なり。或は曰ふ鳥は卽ち鳳なり。然れども天文家の朱鳥は乃ち象を鶉に取る、南方の七宿を鶉首と曰ふ、鶉火鶉尾是れなり。太一は卽ち天帝、極星なり、北辰は本星なし、其の象は明め難し、其の旁の一星を取り以て之を識す。之を名けて極星

と曰ふ。興は極星の象で飾る輦輿を曰ふ。以上悉く屈原が賦中より來る文字、江河、四海、沆瀣、先驅、屈が一度用ひ來りし文字ならざるは無し。「遠遊篇」を讀む者は其の事知り易し。濡と虚と興と韵なり。

蒼龍蚴虯於左驂兮　白虎騁而爲二右驪一　建二日月一以爲レ蓋兮　載二玉女於後車一　馳二騶於杳冥之中一兮　休二息虞嵩之墟一

蒼龍は蚴虯たり、白虎は騁て右驪と爲る、日月を建て以て蓋と爲し、玉女を後車に載す、杳冥の中に馳騶して、嵩嵩の墟に休息す。

【句解】蒼龍は角亢、白虎は參氏、共に星の名。驂と驪は共に「ソヘウマ」なり。蚴虯は蒼龍の自由自在に奔馳する貌、隨行者として、此の驂驪あり、威風堂堂たり、其の上に日月を以て車蓋とし、而して後車に載る所の者は玉女なり。杳冥　卽ち雲霧茫漠たる中を馳騶て、又休息せんと欲する所は何處ぞ。嵩嵩の墟卽ち太邱であるなり。虞は一本乎に作る、文法上使用する文字のみ、何等の意義無し。以上の文字亦皆屈原が既に用ふる所、賈が發明にはあらず。驪と車と墟と韵なり。

樂窮極而不レ猒兮　願從二容虞神明一　涉二丹水一而馳騁兮　右二大夏

之遺風」　黃鵠之一舉兮　知山川之紆曲」　再舉兮睹天地之圜方」

樂窮極して閒ず、願くは神明に從容たらん、丹水を涉りて駝騁し、大夏の遺風を右にす、黃鵠の一たび擧る、山川の紆曲を知り、再び擧る天地の圜方を睹る。

【句解】樂窮極●●　塵世と別れて、極星の所に於て遊戲する其の樂、何ぞ窮極あらん、厭意生せざる所以。從容は「オチツク」なり。神明と從容遊戲するなり。丹水は赤水なり、崑崙を繞るの水。大夏●●『淮南子』云ふ九州の外、八殥あり、西北方を大夏と曰ふ。遺風は古の狀況を右方に見んとなり。黃鵠が其の羽翼一たび飛ぶときは、則ち山川の紆曲を見、再び擧るときは、則ち天地の圜方を知る。洪子曰く白鵠は池中に下る、黃鵠は大鳥一擧千里なるものなり。王逸曰く身を居くこと益す高く、睹る所愈よ遠きなり。明と風と方と韵なり、六句にして足るを七句とせり。

臨二中國之衆人一兮　託二回飇乎尚羊一　乃至二少原之墜一兮　赤松王喬皆在」旁　二子擁」瑟而調均兮　余因稱二乎淸商一　澹然而自樂兮　吸二衆氣一而翱翔　念二我長生而久僊一兮　不」如」反二余之故鄉一

中國の衆人に臨み、回飇を尚羊に託す、乃ち少原の墜に至れば、赤松王喬皆旁に在り、二子瑟

を擁て調へ均し、余因て淸商を稱ぐ、澹然として自ら樂む、衆氣を吸うて翱翔す、我が長生して久僊せんことを念へども、余が故鄉に反るに如かず。

【句解】臨は臨望なり。中國は楚國を言ふ。回飇は回風なり。尚羊は徜徉なり。回風の如く廣き天上を繞りて、以て尚羊遊戲、吾が樂を恣にするに名を託すとなり。少原之墜●●●は王逸曰く仙人の居る所、此の少原の野に至れば、此に赤松子あり、又王喬もあり、是れ皆沆瀣を吸ひ、以て虛に充つるの人なり。二子が彈瑟を聞くに因て、余も亦淸商の歌曲を稱へんとなり。澹然●●　澹は一本淡に作る。淡は『說文』に薄味と注し、澹は水の動搖する貌と注す。而かも淡は澹なり、澹は淡なりとの解もあれば、非常の相違あるにあらず。和語の何の屈託も無く、淸灑たるを澹然と見るべし。衆氣●は「遠遊篇」に謂ふ所の六氣なり、陰と陽と四時の正氣となり。此の如くにして長生●樂しむ者の如きも、故鄉●即ち中國衆人の居る所に反るに如ずとなり。王逸曰く忠信の厚、恩義の篤なり。「遠遊篇」に澹無爲而自得、終不」反二其故都一、從二王喬一而娛戲、餐二六氣一飮二沆瀣一、以て此の章の粉本たるを見るべし。羊と旁と商と翔と鄉と韵なり。

黃鵠後」時而寄處兮　鵾鵾羣而制」之　神龍失」水而陸居兮　爲二

螻蟻之所」裁　夫黃鵠神龍猶如」此兮　況賢者之逢二亂世一哉

黃鵠時に後れて寄處すれば、鴟梟羣て之を制す、神龍水を失て陸居すれば、螻蟻の爲めに裁せらる、夫の黃鵠神龍猶ほ此の如し、況や賢者の亂世に逢ふをや。

【句解】黃鵠は一飛千里、尋常一樣の禽族にあらず。然るに此の神鳥も、時ならぬ世に出で、人間に寄處すれば、鴟梟、羣起して以て一鳥を制服するに至る。而して神龍も水を得ればこそ、其の神龍たる本靈を示せども、水を失するに於ては、螻蟻●即ち蚍蜉の爲め制裁せらる。黃鵠と神龍は賢人君子に喩へ、鴟梟と螻蟻は佞者小人に喩ふ。嗚乎屈子は遂に其れ時に後れしなり、水を失せしなり。之と哉と韵なり。

壽冉冉而日衰兮　固儃回而不」息　俗流從而不」止兮　衆枉聚而矯」直　或偸合而苟進兮　或隱居而深藏　苦二稱量之不審一兮　同二權槩一而就」衡

壽冉冉として日に衰ふ、固に儃回して息まず、俗流從て止らず、衆枉聚つて直きを矯む、或は偸合して苟くも進み、或は隱居して深く藏む、稱量の審ならざるを苦しみ、權槩を同うして衡に就く。

【句解】儃回は王逸曰く運轉なり、己が壽は日に以て衰老、而して楚國の羣臣、君即ち楚王が非に承順して之に隨ひ、運轉常に止息せざるなり。王逸に依れば固の六字は楚國羣臣の事にして、屈原が事にあらず、然るに『字書』に儃回を注して不進の貌と曰ふ、憂心を持するが故に進まんと欲するも能はず、乃ち以て息ふ能はざるなりと解釋するも亦通ず。固を一本國に作る、王逸の解は國としての解なり、壽の七字は屈子が事、固の六字は楚國の事と定めて可なり。俗流は楚國の俗人流輩なり、皆從つて諂諛を學び、禁止すべからず。楚國の衆邪姦枉の徒、聚まつて以て直を反て邪と爲し、邪を正と爲さんと欲す。乃ち邪曲の徒は偸合して爵位富貴に進み、乃ち正直の士は山林に隱居して復出ず。是を以て國を憂ふるの士は、其の上の爲す所、稱量の審明ならざるを苦しむ。權　洪子曰く稱錘なり。衡は平なり、重きものは重く、輕きものは輕く、公平無私なるを希望する是れ國を憂ふる士の至誠なり。息と直と韵、藏と衡と韵なり。

或推遂而苟容兮　或直言之謂諆　傷誠是之不」察兮　并二紉茅絲一以爲」索　方二世俗之幽昏一兮　眩二白黑之美惡一　放二山淵之龜玉一兮　相與貴二夫礫石一　梅伯數諫而至」醢兮　來革順」志而用」國

悲仁人之盡節兮　反爲二小人之所一賊

或は推逐して苟も容られ、或は直言して諤諤たる、傷む誠に是れ之を察せず、茅絲を幷せ紉で以て索と爲し、世俗の幽昏に方て、白黑の美惡に眩す、山淵の龜玉を放て、相與に夫の礫石を貴ぶ、梅伯は數ば諫て醢にさるるに至り、來革は志に順じて國に用ひらる、悲む仁人の節を盡して、反て小人が賊ふ所と爲るを。

【句解】推逐　逐は移の古字、「漁父辭」に聖人與レ世推移　とある。然れども世と推し移る者、多くは聖人にあらずして、小人にあるなり。苟容　聖人は動もすれば容れられず、容れらるる者は世と濁昏を同じうすればなり。諤諤は他の面を犯して直言するの貌、前は小人、此れは正士なり。誠是不察　苟容せらるる人と、直言する士との是非善惡を明察せず、恰も茅「チガヤ」と絲「イト」を幷せ紉「ムスン」で、以て索と爲すが如きなり。索の索たる眞の用は到底爲す能はず。幽昏は世俗の不明なるを言ふ。眩は眩惑。白黑の孰か美、孰か惡なるに眩惑す。用ひらる者は暗君、用ひらるる者は暗臣なり。山淵は地名にあらず、山と淵と共に其の深幽にして美玉を產する處を稱す。『齊書』高帝紀贊に同度二宇宙一合二量山淵一　とあり。龜玉　龜以て吉凶を決す可し。此の龜玉を放弃せずんば、白黑の美惡、茅絲の區別は容易なるべし。然るに此の龜玉を

放弃して、反つて相與に碌碌たる瓦石を貴重する。梅伯至醢は「天問篇」の條下に於て已に辨せり。來革は紂王の惡虐を扶けし惡臣、惡來と革と二人なり。紂王は梅伯や比干の如き諤諤の臣は極刑に處したるも、惡來や革は反て重用せらる。畢竟梅伯の如き仁人は惡來の如き小人の爲め殘賊せらる。諤と索と惡と石と國と賊と韵なり。

比干忠諫而剖レ心兮　箕子被レ髮而佯狂　水背レ流而源竭兮　木去レ根而不レ長　非レ重レ軀以慮難兮　惜二傷一身之無レ功

比干忠諫して心を剖れ、箕子髮を被りて佯狂せり、水流に背いて源竭き、木根を去て長からず、軀を重んじ以て難を慮ばかるにあらず、身を傷るの功無きを惜む。

【句解】比干　箕子佯狂は共に「天問篇」に出る所。剖は解剖、又は剖割なり。水背流而源竭は朱子曰く疑ふらくは當に背レ源而流竭に作るべし。王逸が水背二其源一則枯竭と云ふは、其の本末を誤るに似たり。今後句の木去根而不長の語に依て之を案ずれば、朱子の說可なるを覺ゆ。木は根幹が大切なり、水は源泉が大切なり。其の大切なる處を大切にせず、水は竭きざるを得ず、木は枯れざるを得ず。君たる楚王は源泉なり、木根なり、臣たる屈原は流なり、枝なり。水流や樹枝は源泉と根幹とを離れ去らば、要するに何等の功無きを言ふなり。王逸曰く人仁義に

背き、忠信に違ふときは、亦將に害に遇んとするを言ふなり。賈誼が意を得ず、朱子にあらざるも亦其の誤を知るなり。非重軀以慮難　惜傷身之無功　軀と身とは同義の字。比干や箕子の如きは共に國家の爲め難を慮ぱかりし人なり。然りと雖も軀を重んずるの策を取らず、是を以て一は剖心せられ、一は被髮せる如く、我が一身を傷害すれども、遂に天下に於て何等の功も無かりしとなり。屈原も亦是れなりとの意を含むなり。狂と長と功と韵なり。

已矣哉獨不見　夫鸞鳳之高翔兮　乃集大皇之墜　循四極而回周兮　見盛德而後下　彼聖人之神德兮　遠濁世而自藏

使麒麟可得羈而係兮　又何以異虖犬羊

【句解】已矣哉は痛歎の極、發する言なり。大皇之墜は大荒の藪なり。王逸曰く鸞鳥鳳皇は乃ち高く大荒の野に飛び、四極に循ひ、回旋して戲ぶ。仁聖の王、卽ち盛德を見て而して後下る。賢者も亦此の如く、宜しく山澤の中に處し、周流觀望、高明の君を見て、出て以て仕へ已ぬる哉獨り見ずや、夫の鸞鳳の高く翔る、乃ち大皇の墜に集り、四極を循て回周し、盛德を見て而して後下る、彼の聖人の神德ある、濁世に遠かりて自ら藏る、麒麟をして羈て係ぐを得べからしめば、又何を以てか犬羊に異らん。

ふべきなり。聖人之神德　遠濁世　聖人の用は濁世にあるなり、昭代には聖人の用無きなり。是の故に聖人は多く濁世に出興せり。此の語疑ふべきに似たれども、疑ふ能はざる所以のもの存す。何ぞや濁世は畢竟するに奸者小人の跋扈する時にして、聖人は害を蒙るも、決して容れられざるなり。若し聖人を容るるに於ては、彼等は其の惡事を爲すを得ず。是を以て聖人は濁世たるを知らば、深く自ら藏れて決して出ること勿れとなり。例せば麒麟の如き靈獸も、羈して繫がるるに於ては、何ぞ犬羊が如きものと異ならんや。故に鳥は野に下るなかれ、麒麟は出世することなかれ、聖人は自藏せよとなり。墜と下と韵、翔と藏と羊と韵なり。

卷の第十二

弔屈原

弔屈原は漢の長沙王の太傅賈誼が作る所なり。賈漢廷に容れられず、既に謫を以て去る、意自得せず、湘水を度るに及んで、此を賦し以て弔す。屈原汨羅に沈んで、已に百餘年、誼之を追傷し、因て以て自ら諭ふと云ふ。

恭承二嘉惠一兮竢二罪長沙一　仄聞屈原兮自沈二汨羅一　造二託湘流一兮敬弔二先生一　遭二世罔極一兮迺隕二厥身一

恭しく嘉惠を承け罪を長沙に竢つ、仄に聞く屈原自ら汨羅に沈りと、湘流に造り託し敬て先生を弔ふ、世の極り罔きに遭うて迺ち厥の身を隕せり。

【句解】●嘉惠　文帝が絳灌等の讒言を信じて賈誼を殺すも亦恨む可らず。然るに左遷とは言ひながら、長沙の太傅として、生を全うして此の湘水を度るに至る、是れ嘉惠ならずして何ぞ。●竢罪　臣として君の命に服す、之を竢罪と言ふ。●仄聞は直聞の反對。仄は側の古字、百年前の

事なるが故に仄聞、●湛は音「チン」訓「シヅム」沈なり。●造は至なり。●託は寄託、今此の湘流を渡るに「カコツケテ」以て先生を弔すとなり。●罔極は際限無く亂れたる世を言ふ、罔は無と同じ。●迺は乃と同じ。『詩經』に讒人罔極の語あり、●隕は音「キン」訓落なり、墮なり。屈原が自ら投死したるを言ふ。沙と羅と韵、生と身と韵なり。

烏虖哀哉兮逢二時不祥一　鸞鳳伏竄兮鴟梟翱翔　闒茸尊顯兮讒諛得志　賢聖逆曳兮方正倒植　謂二隨夷溷一兮謂二跖蹻廉一　莫邪爲鈍兮鉛刀爲銛

烏虖哀いかな時の不祥に逢へり、鸞鳳伏し竄れ鴟梟翱翔し、闒茸尊び顯れて讒諛志を得たり、賢聖逆に曳れて方正倒植せり、隨夷を溷と謂ひ跖蹻を廉なりと謂ふ、莫邪を鈍と爲し鉛刀を銛なりと爲す。

【句解】●不祥　祥は福なり善なり。哀い哉屈原は祥福なる時に生れざりしなり。●鸞鳳の如き靈鳥は伏し竄れて出でず。●鴟梟の如き惡鳥は縱横に翺翔し、而して人としては闒茸　卽ち左も右も塞も暖も分別する能はざるが如き徒輩が尊顯し、之に加ふるに讒諛を是れ事とする小人等が志を得、賢者や聖人は所謂逆に身を曳かれ、而して●方正の徒は顚倒して立つに至る。賢聖は

方正にと讀みし人あり、今用ひず、賢聖と方正とを分けて見るべし。然りと雖も文章の上にては此の如くなりしのみ。賢聖の士は卽ち方正、方正の士は卽ち賢聖なること勿論なり。隨夷　隨は卞隨、天下を讓りて受けざりし人、夷は伯夷、國を讓りて餓死せし人、此の清潔の士を溷濁なりと謂ふ。跖は盜跖、蹻は莊蹻、此の二人は秦楚の間に於ける大盜なり、此の溷濁の輩を反て清廉なりと謂ふ、共に『莊子』雜篇の讓王と盜跖に詳密なり。莫邪は『吳越春秋』曰ふ干將は吳人なり、能く劍を爲る、一を莫邪と曰ふ、干將の妻なり。干將劍を作る三月成らず、莫邪髮を斷り爪を剪り、爐中に投ず、遂に以て劍を成す。陽を干將と曰ひ、陰を莫邪と曰ふ。干將其の陽を匿し、其の陰を出して之を吳王に獻ず。吳王は闔閭なり。後世以て寶劍の名とす。世は顚倒せり、是を以て鈍と爲すなり。鉛刀は字の如く「ナマリ」製の刀。銛は鈍の反對、銛利なり。祥と翔と韵、志と植と韵、廉と銛と韵なり。

于嗟默默生之亡兮　斡棄周鼎寶康瓠兮　騰駕罷牛驂蹇驢離此咎兮　驥垂兩耳服鹽車兮　章父薦屨漸不可久兮　嗟苦先生獨于嗟默默たり生の故亡こと、周鼎を斡棄し康瓠を寶とす、罷牛に騰駕して蹇驢を驂にす、驥は兩

耳を垂れ鹽車に服す、章父屨に薦く漸く久しかる可らず、嗟苦なり先生獨り此の咎に離るや。

【句解】默默生之亡故　朱子曰く默默は自得せざるの意なり、生は屈原を謂ふ。本故無うして此の禍に遭ふなり。今謂ふ然らず、天下の爲め辯せんと欲するも、天下誰か吾が言ふ所を聞かんや、是を以て默默す。而かも其の默默たる實は吾が本志にあらず。本志にあらずして、此の生を此の世に送るは良に故無しとなり。禍に遭ふなぞの意は此の句に見る能はず。斡棄　斡は「クワン」の音「アッ」の音は後世の誤讀なり。周鼎は非常に尊貴なるもの、然るに之を斡棄して反て康瓠　卽ち瓦製の陋壺を寶物と爲すに至る。斡は「ツマラヌ」器物となして、破壞すれば破壞して可しとして斡轉して疎末に取扱ふを言ふ。罷牛は疲牛なり。蹇驢は跛の小馬、跂跛卽ち行くに正しからざる馬。騰駕し、驂にする馬を驂にするは世が溷濁にして顚倒すればなり。驥は乃ち是れ騰駕すべき驥は反て鹽車　卽ち鹽を運搬する荷車の用に服事す。章父は章甫と同じ、冠の名。冠を以て履の用に薦に至る。漸不可久は冠と履と顚倒するに至る時は漸く久しからずして見んと解するか、又此の如く顚倒の世は、久しからずして亡ぶと見るか。此の二說共に通ずるが如し、拘泥する要無し。嗟苦先生獨離此咎　顚倒の世を顚倒と知る者一人も無し、然るに屈原は獨り之を

知る。之を知るを以て他人の勞苦とせざることを獨り之を勞苦とす。遂に其の讒に遭うて身を沒するに至る所以なり。瓠と驢と車と韵、久と咎と韵なり。

誶曰　已矣國其莫吾知兮　子獨壹鬱其誰語　鳳縹縹其高逝兮　夫固自引而遠去　襲九淵之神龍兮　沕淵潛以自珍　偭蟂獺以隱處兮　夫豈從蝦與蛭螾　所貴聖之神德兮　遠濁世而自臧　使麒麟可係而羈兮　豈云異夫犬羊

誶て曰く、已ぬるかな國其れ吾を知ること莫し、子獨り壹鬱として其れ誰と語らん、鳳縹縹として其れ高く逝く、夫れ固に自ら引て遠く去る、九淵を襲ふの神龍は、沕として淵潛以て自ら珍とす、蟂獺に偭いて以て隱處す、夫れ豈蝦と蛭螾とに從はんや、貴ぶ所の聖の神德は、濁世に遠ざかりて自ら臧る、麒麟をして係で羈す可らしめば、豈夫の犬羊に異ると云はんや。

【句解】誶は音「サイ」訓「ツグル」告なり。又讓、罵の義あり、今は唯告の意のみ。此の罵る義あるを以て淺見絅齋曰ふ屈原の賢なるは千載一人じやが、其の上ながら云はうならば、屈原にももそつと足らぬ處あると云ふのことぞ。或は此の意も含むならん。已矣は俗に言ふ舍詞なり。莫吾知　吾は屈原を指す。子は賈より屈原を指して言ふ。壹鬱は拂鬱と同じ。其誰語　國中に

知る者莫し、誰と語らんと欲するも亦語る者は無きなり。縹縹は輕く上る形容。自引遠去　屈原が鳳凰を引て遠く去ると解するは兒解なり、自身が自身と遠去すと解すべし。襲は襲重。九淵を襲重するなり。九淵は龍の棲處の極深を言ふ詞なり。沕は水の速流を言ふにあらず、沕穆と成語して水の深くして微幽なる貌を言ふ。淵潛自珍　水底に深く臧れて其の身を自愛するは此れ神龍の神龍たる所以なり。偭は偭偝「ソムク」なり、「スツル」棄なり。蟂は水蟲「ヰモリ」なり。獺は水に居て魚を食ふ、「カハウソ」なり。神龍は此等下等の魚族と同一に棲む可らずとなり。況や蛭　卽ち「ヒル」水蟣や、蝦　卽ち「カヘル」蝦蟇や、螾　卽ち「ミミズ」蝉螾の類に從ふべけんやとなり。蝦を「エビ」と訓したる本あり。今取らず、皆水族と解する朱子の說に誤らる者なり。餘の語義は前句に於て明白なり。語と去と韵、珍と螾と韵、臧と羊と韵なり。

般紛紛其離此郵兮　亦夫子之故也　歷九州而相其君兮　何必懷此都也　鳳凰翔于千仞兮　覽德輝而下之　見細德之險微兮　遙增擊而去之　彼尋常之汙瀆兮　豈容吞舟之魚　橫江湖之鱣鯨兮　固將制於螻螘

般紛紛として其れ此の郵に離り、亦夫子が故なり、九州を歷て其の君を相なば、何ぞ必ずしも此

の都と懐んや、鳳凰千仞に翔けて、徳輝を覽て之に下る、細徳の險微なるを見ては、遙に撃を増して之を去る、彼の尋常の汙瀆、豈呑舟の魚を容んや、江湖に横はるの鱣鯨も、固に將に螻蟻に制せられんとす。

【句解】●般は反なり、隱處に居れば善なりしに反て出てとなり。●紛紛は種種と大異なし。●郵は郵過、種種の過に遭離したるは、畢竟するに夫●子●卽ち屈原夫子自身が故ならずや。余を以て夫子を視れば、此の楚都を懐はんより、寧ろ四海●九州●を遍歴して、相當の明主を得て、之が相輔となり、良政を布かるが宜しかるべきなり。見よ鳳●凰●は千●仞●の高處に翺翔するの鳥なり、濁世に飛翔する鳥にあらず、偶ま堯舜の如き聖者が德輝を覽るときは乃ち下る、細德險微の君が臨御するときは、乃ち羽を擊て去る。又彼の尋●常●の汙●瀆●卽ち汚れたる瀆溝の如き、呑舟の大魚を容るる處ならんや。●鱣鯨の如き大魚も、終には螻蟻に制伏せらるるに至る。皆高く飛ばず、深く藏れざるの致す所。要するに屈原を弔して以て、又自況とするなり。●絅齋は賈が本意を知らずして、賈を難ず、朱子の爲め叱呵せらるるを知らざるなり。故と都と韵、之と微と韵、魚と螳と韵なり。

卷の第十三

服賦

服賦は賈誼が作る所なり。誼長沙王の傅と爲ること三年、服あり飛んで誼が舍に入り、坐隅に止まる。服は鴞に似、不祥の鳥なり。誼既に以て長沙に謫居す、長沙卑濕、誼自ら傷悼、以爲らく壽長きを得ずと、迺ち賦を爲り以て自ら廣む。司馬遷曰く「服鳥賦」を讀めば死生を同うし、去就を輕んず、又爽然自失す。朱子曰く誼が稱する所、列子、莊子が常言にして、傷悼無聊の故の爲め、之を藉て以て自ら誑く者なり。夫豈眞に能く始を原ね終に反り、夫の朝聞夕死の實を得んや。誼經世の才あり、文章は蓋し其の餘事なり。其の奇偉卓絶、亦司馬相如が輩の能く彷彿する所にあらず。而かも揚雄が論常に彼(司馬相如)を高しとし、此(賈誼)を下しとす。韓愈亦馬揚を以て、孟子屈原が列に厠へ、而して一言以て誼に及ぶ無し。余皆其の何の說なるを知らず。是を以て因て其の賦を序し、幷せて之を論じ、以て後の君子を俟つと云ふ。今曰く列子莊子が常言ば賈が固より甘んずる所、其の此れに甘んずるは是れ年少の致す所、賈をして四十五

十に至らしめば、何ぞ朝聞夕死の道を聞かざらん。朱子が賈に望むや其れ大に失するなり。韓愈の論せざる固より其の所。蘇東坡が誼を論じて曰く孟子三宿して後晝を出づ。猶は曰ふ王其れ庶幾くは我を召せ、君子の其の君を棄るに忍びずと、此の如く其れ厚きなり。誼が湘水を度るに於て、屈原を弔し、其の後哭泣して天絶するに至る、善く窮に處せざる者なり。要するに志は大、而して量は小、才は餘あり、而して識足らず。乃ち曰ふ誼は君を棄るに躊躇せざるの人、是を以て鳳は千仞の上に翔るの文あり。誼は識足らざる人、是を以て絳灌の徒を凌轢するに至る。韓愈が孟子屈原と彼を同一視せざるは卓見なりと謂ふ可し。朱子が之を疑ふは、是れ亦大に疑はざる可らず。余も亦後の君子を俟つて、是正を乞ふものなり。

單閼之歲　四月孟夏　庚子日斜　服集余舍」止于坐隅」貌甚閒暇

單閼の歲、四月孟夏、庚子の日斜なるとき、服余が舍に集る、坐隅に止まる、貌甚だ閒暇なり。

【句解】單閼は卯の異名、正に是れ漢の文帝の丁卯六年、日本孝元天皇の四十一年に當る、賈誼卒するの七年前とす。孟夏は初夏。庚子日斜　庚は十幹の名、カノエネ日の黄昏なり。服　卽ち怪鳥の名。集は居なり。唐突に何處とも無く來りて誼が舍に止る。閒暇　悠然として坐隅に止る貌を言ふ。夏と舍と暇と韵なり。

異物來崒　私怪其故」發」書占」之　識言其度」曰野鳥入」室　主人將」去

異物來り崒る、私に其の故を怪しむ、書を發きて之を占ふ、識其の度を言へり、曰く野鳥室に入れば、主人將に去んとす。

【句解】崒は聚なり。私は竊と同じ。發書　何の書と明示せず、『易』と見て然るべし。易に案じて其の故を占ふに、易には識　卽ち其の驗、顯然とあり。度は法度なり、其の法度に依れば、野鳥が來りて室に入るときは、室中の主人將に去らんとするの兆なりと。故と度と去と韵なり。

問於子服」余去何之　吉凶告我　凶言其灾」淹速之度　語」余其期」

子服に問ふ、余去て何くに之く、吉ならんか我に告よ、凶ならんか其の灾を言へ、淹速の度、余に其の期を語れ。

【句解】子服は服に對して敬語を用ふ。余が去るや、其の去るが吉ならば、吉なる所以、凶ならば如何なる灾あるか。淹速の度、卽ち早いか遲いか、余に豫じめ其の期を語れとなり。之と

災と期と韵なり。

服乃太息　擧ㇾ首奮ㇾ翼　口不ㇾ能ㇾ言　請對以ㇾ意　萬物變化　固亡ニ休息一

服乃ち太息して、首を擧げ翼を奮ひ、口言ふ能はず、請ふ對るに意を以てせん、萬物變化、固に休息すること亡し。

【句解】服は固より鳥なり、口言ふ能はざるは其の理なり、是を以て主人が其の意を言ふ。亡は無と同じ。萬物皆變化し、或は吉と爲り、或は凶と爲り、休息すること有る無し。翼と意は臆字の義を以て韵と爲す。卽ち翼と臆と息と韵なり。

斡流而遷　或推而還　形氣轉續　變化而嬗　汩穆亡ㇾ間　胡可ニ勝言一

斡流して遷る、或は推して還る、形氣轉續して、變化して嬗る、汩穆として間亡し、胡ぞ勝て言ふべけん。

【句解】斡流はグルリグルリと回りての意、或は春と爲り、或は夏、或は秋冬と推して循環す。形氣は渾ての生物を言ふ。嬗は服虔曰く變蛻を謂ふなり。蘇林曰く相傳與するを謂ふ。師古曰く此れ卽ち禪の代字と。春は夏に禪り、夏は秋に禪るの類なり。汩穆は深微の貌、江海の中に何が出るや間斷亡き故、的確の物を擧げて答ふる能はずとなり。還と嬗と言と韵なり。

禍兮福所ㇾ倚　福兮禍所ㇾ伏　憂喜聚ㇾ門　吉凶同ㇾ域　彼吳彊大夫差以敗　越棲ニ會稽一　勾踐伯ㇾ世

禍は福の倚る所、福は禍の伏する所、憂喜門に聚り、吉凶域を同じうす、彼の吳の彊大なる夫差以て敗る、越の會稽に棲しも、勾踐世に伯たり。

【句解】禍兮以下十字は『老子』の下篇に出る語なり。禍と憂と凶とは人の嫌ふもの。福と喜と吉は人の欲するもの。其の嫌ふものと、欲するものと固より是れ定まらざるものと。『老子』の道より之を判じて、服の怪鳥室に入るも必ずしも嘆息するに及ばずと自ら慰むる意の存すること見るべし。彊は强と同じ、彊固を言ふ。吳は天下に彊大なりしも、夫差は勾踐の爲め亡ぼされ、勾踐は遂に越を保ちて天下に伯たるを得たりとなり。伏と域と韵、大と敗と韵、稽と世と韵なり。

斯遊遂成　卒被ニ五刑一　傅說胥靡　乃相ニ武丁一　夫禍之與福　何異ニ糾纆一　命不ㇾ可ㇾ測　孰知ニ其極一

斯が遊遂に成て、卒に五刑を被り、傅說が胥靡なりしも、乃ち武丁に相たり、夫れ禍と福と、

何ぞ糾纆に異らん、命測る可らず、孰か其の極を知らん。

【句解】斯は李斯、楚の上蔡の人、天下遊ぶに足る所無しとして、秦に遊び遂に始皇の爲め用ひられて其の丞相と爲る。後趙高が讒言する所と爲りて、二世の爲め五刑を具して、咸陽の市に腰斬せらる。秦の五刑は古の五刑にあらず、先づ黥し、二に劓り、三に左右の趾を斬り、四に之を笞殺し其の首を梟し、五に其の骨肉を市に葅する也。傅說は『離騷』に於て辨せり。胥靡は囚徒を役し、土木を事とする役官の名、罪人にはあらず、而かも此の小役人が、遂に武丁に輔相として蠻夷を征服して功ありしなり。武丁は殷の成湯より二十代の天子高宗是れなり。糾纆は未詳、朱子曰く纆は音墨なり。絅齋曰く禍と福とは長く綯うた繩のやうなもの、くるりくるりと常住持ち合うて居るもの、人の命も計られぬもの故云はれぬ。孰知其極は『老子』の語なり。刑と丁と韵、纆と極と韵なり。

水激則旱　矢激則遠　萬物回薄　震蕩相轉　雲烝雨降　糾錯相紛　大鈞播物　坱圠無垠

水激きときは旱し、矢激きときは遠し、萬物回薄し、震蕩相轉ず、雲烝し雨降る、糾錯相紛る、大鈞物を播し、坱圠として垠り無し。

【句解】旱は「ヒデリ」雨降らざるなり、大雨の時、地の乾くこと早きを見て以て此の水激則旱を解すべし。細雨の蕭蕭たる時は之に反し、地面が久しく濕ふ、豪雨白雨一過の際は忽ちにして地面乾く是れなり。或は云ふ旱は悍なり、其の水勢の猛を言ふと。旱を以て解する方、味あるなり。遠は遠方を射るなり。回薄は萬物が或は西、或は東とメグリ又セマルなり。震蕩は震撼蕩搖するなり。相轉は寒が暖と爲り、雪が雨と爲るを言ふ。糾錯は相紛の狀態を言ふ。大鈞は洪鈞と同じ。朱子曰く瓦を造る者、轉ずる所の者を謂うて鈞を爲す、造化の物を播す、亦猶ほ陶師の瓦を造るがごとし、故に之を大鈞と謂ふ。坱圠は坱軋と同じ、「楚辭」の句なり。或は曰ふ不測を言ふ。或は曰ふ垠際なき貌と、今垠際なきの義を取る。大鈞の物を播す、古今千萬年、坱軋として垠無きなり。遠と轉と韵、紛と垠と韵なり。

〈天不可與慮　道不可與謀　遲速有命　烏識其時　且夫天地爲鑪　造化爲工　陰陽爲炭　萬物爲銅

天與に慮る可らず、道與に謀る可らず、遲速命あり、烏んぞ其の時を識らん。且つ夫れ天地を鑪と爲し、造化を工と爲し、陰陽を炭と爲し、萬物を銅と爲す。

【句解】天不可與慮　道不可與謀　此の語に就て朱子は說無し。淺見絅齋曰く天を相手にして

談合ふ様ない、これが賈誼が學を知らぬ云ひ分、道が計られぬと云ふは無い、己を正しうして死ぬるは天命ぞ。聖賢は何うあらうと、斯うあらうと、子としては子の道を盡し、臣としては臣の道を盡し、賈誼が道は、道を知てからが、後が宜からうやら、悪しからうやら知れぬと云ふことぞ。今謂ふ天と道とを別句に置くも、要するに天道は與に慮る可らず、天道は與に謀る可らずとの意なり。誼が意は決して綢繆が言ふ如く、道を知て而して後の事を言ふにあらず、禍と福とは、糾纆に異ならず、禍は禍、福は福と定まらば、善人は幸福にして、悪人は妖禍ならざるべからず。然るに世は顚倒して、悪人が幸福にして、善人が妖禍を蒙るが事實なり、然るときは、天道は正に與すと言ふべからず、其の正に與せざる天道は何ぞ慮るに足らん、何ぞ謀るに足らん。況や遲速は自然の運命なり、何れの時が速かなるや、何れの時が遲きやは知らざるなりと。憤世の言として、此の如く發せるは當然なり。綢繆之を察せず、忠孝の道を以て賈誼を難ぜんとす、太平の世の儒者は不平の士を了解する能はざるなり。『老子』に依るの言、儒眼を以て見るべからず。老子曰ふ正も復奇と爲り、善も復妖と爲り、民の迷ひ、其れ固に日に久し。以て知るべし。天地造化陰陽」萬物、一は鑪卽ち火爐と爲し、一は工人と爲し、一は炭卽ち火爐を動かす具と爲し、一は卽ち正しく製せられる銅と爲す。「老莊列」三

子の意に準據して之を言ふ、殊に『莊子』を以て骨子と爲す。儒家の言はざる所なり。謀と時と韵、工と銅と韵なり。

合散消息　安有常則」千變萬化　未始有極　忽然爲」人　何足控揣」化爲異物」又何足」患

合散消息、安んぞ常則あらん、千變萬化、未だ始より極りあらず、忽然として人と爲る、何ぞ控揣するに足らん、化して異物と爲る、又何ぞ患ふるに足らん。

【句解】常則は常法なり、常則ありとせば、千變萬化が有るなり。忽然爲人　造化の工業師に因て、人と云ふ者が出來る、其の人と云ふ者に爲りたりとて、特別に愛惜するに足らんや。控揣は『史記』に控摶に作る、揣は「ハカル」度なり、摶は「マルメル」圜なり、控は「ヒク」引なり。朱子の所謂玩弄愛惜の意、然らば揣を借りに「タン」の音に讀む、揣は「タン」の本音にあらず、人と爲りても愛するに足らず、又化して異物卽ち服の如き怪鳥と爲るも、又患ふるに足らず、千變萬化が世の習なればなり。全く『莊子』より來る文字、莊子は樂と爲し、此れは患ふるに足らんと、此れ異なるのみ。則と極と韵、揣を摶の音に發して患と韵を合す。

小智自私　賤ㇾ彼貴ㇾ我　達人大觀　物亡ㇾ不ㇾ可　貪夫徇ㇾ財　列士徇ㇾ名　夸者死ㇾ權　品庶每ㇾ生

小智は自ら私し、彼を賤み我を貴ぶ、達人は大觀し、物可ならずといふこと亡し、貪夫は財に徇ひ、列士は名に徇ふ、夸者は權に死し、品庶は生を每る。

【句解】●小智●自私　『老子』に人を知る者は智、自ら知る者は明とあり。唯是れ小智、是を以て人を知らず、私する所以なり、是の故に彼我の區別を立、彼と我との賤貴を劃し、強て己を小なる者と爲す。然るに●達人は區劃を設けず、服の如き怪鳥でも是を愛するに至る。『老子』に上善は水の若し、水善く萬物を利して爭はず、衆人が惡む所に處す、故に道に幾しと。達人は要するに上善の人なり。●貪夫徇●財　徇は總ての慾求を從せ盡くすを云ふ詞なり、守錢奴は總ての事を財の爲めに從ず。而して●列士　卽ち烈士は名の爲めに生命を擲に至る。●夸者　卽ち誇者は權の爲めに死し、●品庶　卽ち尋常一樣の平民は唯だ此の一生を一日も長かれと每る。此の四者は竟に達人にあらざるなり。我と可と韵、名と生と韵なり。

忧迫之徒　或趨ニ西東一　大人不ㇾ曲　億變齊同　愚士繫ㇾ俗　儻若ニ囚拘一　至人遺ㇾ物　獨與ㇾ道俱

忧迫の徒、或は西東に趨る、大人は曲らず、億變するも齊同なり。愚士は俗に繫がれ、儻せらること囚拘の若し。至人は物を遺れ、獨り道と俱なり。

【句解】●忧は悚懼なりと注して「オソル」なり。而して又「イザナフ」誘ふの義も含む。朱子曰く忧は利の爲めに誘ふなり。●迫は勢の爲めに逼るなり。端然として居ることの出來ぬ奴輩を言ふなり。●西東に趨り利の爲めに齷齪するなり。然るに●大人は端然として曲らず、境遇が變化するも、必ずや守る所のもの一あるなり。●愚士繫●俗　俗と言へば凡俗なること勿論なり、自分の守る所が無ければ、羣俗の事に繫がれて、身も心も囚●拘せらる。●至人は大人と同じ。●遺●物　俗物の事を遺忘するなり、唯道の爲めに動止を取るのみ。東と同と韵、拘と俱と韵なり。

衆人惑惑　好惡積ㇾ意　眞人恬漠　獨與ㇾ道息　釋ㇾ智遺ㇾ形　超然自喪　寥廓忽荒　與ㇾ道翱翔

衆人は惑惑して、好惡意を積む、眞人は恬漠して、獨道と息ふ、智を釋て形を遺る、超然として自ら喪ふ、寥廓忽荒として、道と翱翔す。

【句解】●衆人は凡俗なり。●惑惑は迷亂、確乎たる立脚地無きなり。●積●意は好も惡も己が智臆より分別を逞するを言ふ。●眞人は至人なり。●恬漠は安恬靜漠なり、眞人は狐疑狐疑せざるなり。

釋は棄なり、小智は棄釋せざる可らず。形骸は遺忘するを以て貴しと爲す。形骸に貪著する者は眞人にあらず、眞人は超然として凡俗の外に智も形も自喪するなり。寥廓忽荒は眞人が道と翺翔する、其の翺翔する所の道は極めて鴻大にして打ち開けるなり。

乘レ流則逝　得レ坎則止　縱レ軀委レ命　不レ私二與己一　其生兮若レ浮　其死兮若レ休　澹虖若二深淵之靚一　汜虖若二不レ繫之舟一　不レ以二生故一　自寶上　養レ空而游

流に乘て則ち逝き、坎を得れば則ち止る、軀を縱にし命に委せ、己に私與せず、其の生や浮べるが若く、其の死や休が若く、澹虖として深淵の靚なるが若く、汜虖として繫ざる舟の若し、生故を以て自ら寶とせず、空を養うて游ぶ。

【句解】逝は逝行なり。坎は種種の義ある文字なるが、今は水の平處又は水中の小洲と見るべし。則止　小洲が有らば止る、無きときは舟を流るる儘にする。縱軀委命　不私與己　流るれば流れ、止まれば止る、總て天命に委せ、敢て此の五尺の軀を強て大事にせずとなり。生は浮ぶが若く、死や休するに似、唯其れ心は澹乎として深淵の靜靚なる若くにし、又汜乎として繫がざる舟の若くす、此の形骸を自寶とするに足らず、唯空寂を養うて遊ばんとなり。至人や大人

や眞人や德人やは皆以て自身を指すなり。止と已と韵、休と舟と游と韵なり。

德人無レ累　知レ命不レ憂　細故芥蔕　何足以疑一

德人は累無し、命を知て憂へず、細故芥蔕と、何ぞ以て疑ふに足らん。

【句解】無累　德人は大人なり、煩累が無きなり。細故芥蔕　卽ち小微な事や、瑣細な事、何ぞ疑を容るるに足らんやと、服が室に入らうが、出でようが、我は決して驚かず、又悲しまずとなり。疑を牛の音に發して以て憂と韵を合す。賈の思想は全く莊周と列子と老子とに得來る、賦法も亦然り、道同じからざるを以て、一概に之を罵る者は余取らざるなり。

卷の第十四

招隱士

王逸曰く招隱士は淮南小山が作る所なり。昔淮南王安、博雅好古、天下俊偉の士を招懷す。八公の徒あり、咸其の德を慕ひ、其の仁に歸す。各の才智を竭し、篇章を著作し、辭賦を分造し、類を以て相從ふ。故に或は小山と稱し、或は大山と稱す。其の義猶ほ詩に小雅大雅あるがごとし、小山の徒、屈原を閔傷し、又怪む、其の文、昇天乘雲、百神を役使し、仙の若き者に似たり。身沈沒すと雖も、名德顯聞、山澤に隱處すると異無し。故に招隱士の賦を作り、以て其の志を章にす。

桂樹叢生兮山之幽　偃蹇連蜷兮枝相繚
谿谷嶄巖兮水曾波

桂樹叢生せり山の幽、偃蹇連蜷して枝相繚る、山氣龍嵷して石嵯峨たり、谿谷嶄巖として水曾波。

【句解】桂樹　王逸曰く桂樹の芬香を以て、屈原が忠貞を興するなり。洪子曰く郭璞云ふ桂は

白華叢生、山峯冬常に青し、間に雜木無し。山之幽は以て都の譟に對す。王逸曰く遠く朝廷を去て隱るるなり。偃蹇連蜷は王逸曰く容貌美好、德の茂盛を言ふ。今謂ふ桂樹の叢生して、其の樹形を形容す、所謂凡樹に容れられざる形なり。王逸曰く屈原が才德高明、賢君を輔けて貞幹と爲るべきを言ふ。龍嵷は山氣卽ち雲氣の形容。石嵯峨は山石の高く聳ゆる形容。嶄巖は谿谷の崎嶇嶮阻の形容。曾波は水の疾く流るるを以て波を揚るなり。幽と繚と韵、峨と波と韵なり。

猨狖羣嘯兮虎豹嗥　攀援桂枝兮聊淹留　王孫遊兮不歸　春草生兮萋萋

猨狖羣嘯して虎豹嗥ぶ、桂枝を攀援して聊か淹留し、王孫遊んで歸らず、春草生じて萋萋たり。

【句解】猨は赤色の「サル」狖は黑色の「サル」なり。此れは嘯く。而して虎と豹とは嗥ぶ。是れ信に深山怖るべきなり。此の怖る可き深山に我を援くる桂樹の枝あり、此の枝に攀ぢて以て淹留するを得。王孫　原は楚と同姓、故に王孫なり。不歸　舊室家に歸らず。春草萋萋　其の久しく歸らざる間に早や春草は萋萋として萌芽を發するに至る。嗥と留と韵、歸と萋と韵なり。

歲暮兮不自聊　蟪蛄鳴兮啾啾　坱兮軋山曲嵷　心淹留兮恫

慌忽

歳暮ぬ自ら聊んせず、蟪蛄鳴て啾啾たり、坱として軋山曲嵲、心淹留して恫慌忽たり。

【句解】歳暮　年齒漸く老ゆ、壽命衰ふ。不自聊　聊は安意なり、安意なきは常に憂を含むなり、歳暮を以ての故に感慨之を憂ふ。蟪蛄は種種の説あるも蜩蟬、夏來れば則ち啾啾と鳴くなり。其の音悲哀、啾啾を以て形容する所以。坱兮軋は山霧の氣が昧き形容とす。山曲嵲　山路の盤詰屈する形容を曲嵲と曰ふ。嵲と云ふ山もあるなり。心淹留　前には聊淹留とあり、此には心淹留とあり、最早絶望して淹留する意。恫慌忽は五臣曰く憂思深きなり。聊と啾と韵、嵲と忽と韵なり。

罔兮沕憭兮栗虎豹穴　叢薄深林兮人上慄　嶔岑碕礒兮硱磳磈硊　樹輪相糾兮林木茷骫

罔として沕憭として栗虎豹の穴、叢薄深林人上りて慄く、嶔岑碕礒たり硱磳磈硊、樹輪相糾り林木茷骫たり。

【句解】罔は惘なり、精氣を失する貌。沕は潛み藏るなり。憭は罔の反對、ハット氣の付くことなり。氣を失した後、氣が付くなり。栗は慄の誤ならん、乃ち「オソルル」畏なり。虎豹穴

五臣曰く既に危苦し、又虎豹の穴に進む。叢薄は深草なり。人上慄　顔色を失して戰くなり。嶔岑は山の高險なる形容。碕礒は石の突兀たる形容。硱も磳も磈も硊も皆石の奇狀を言ふ。樹輪相糾は樹枝の縱横に交錯する形容、輪は横枝を言ふ。茷は雜草の茂る貌、骫は屈曲なり。拔骫と成語するときは是れ亦林木の茂盛なる形容。骫は「ワイ」の音と「ヰ」の音とあり、今「ヰ」の音を取る。穴と慄と韵、硊と骫と韵なり。

青莎雜樹兮薠草靃靡　白鹿麏麚兮或騰或倚　狀貌崟崟兮峨峨淒淒兮漇漇　獼猴兮熊羆慕類兮以悲

青莎と雜樹と薠草靃靡たり、白鹿と麏麚と或は騰り或は倚る、狀貌崟崟と峨峨淒淒と漇漇、獼猴と熊羆と類を慕うて以て悲しむ。

【句解】青莎は洪子曰く古人詩を爲る多く之を用ふ、此れ草根、香附子と名く、荆襄の人之を莎草と言ふ。薠は一に蘋に作る水草。靃靡は草容の柔弱の形容、麏は麕と同じ、和名「クシカ」なり。麚は「ヲジカ」牡鹿なり。騰躍するあり、又坐倚するあり。崟崟も峨峨も、頭角の高き形容。淒淒と漇漇は鹿毛の恰も濡ふが如きを言ふ。獼猴は猿なり。熊と羆との別は虎と豹との如きのみ。慕類以悲は王逸曰く己が不遇を哀しむなり。此れより以上皆山林は傾危、草木は茂盛、

麋鹿の居る所、虎兕の聚る所、道德を育ひ、情性を養ふに宜しからず。屈原をして郢都に還らしめんと欲するなり。五臣曰く山中の獸も猶ほ其の朋類を慕うて悲しむ、獨處に放弃せらるるは、實に心を爲し難し。靡と倚と滯と悲と韵なり。

攀援桂枝兮聊淹留　虎豹鬬兮熊羆咆　禽獸駭兮亾其曹」王孫兮歸來　山中兮不」可以久留」

桂枝に攀援して聊か淹留し、虎豹鬬ひ熊羆咆ゆ、禽獸駭き其の曹を亾ふ、王孫や歸來せよ、山中や以て久しく留る可らず。

【句解】●●聊淹留　王逸曰く踟躕低回して明時を待つなり。●闘は相互に殘賊するなり。●咆は相互に咆哮するなり、虎豹や熊羆以外の禽獸卽ち雉兎の羣は駭きて奔走す。是を以て多く●其曹を失し、皆離散するに至る、山中の害此の如く甚だし。●●王孫や早く歸來せよ、山中は久留すべからずとなり。曹と留と韵なり。

哀時命

哀時命は梁の孝王の客、莊忌が作る所なり。孝王は今の河南省卽ち漢代の睢陽縣梁國に在りて宮室を修め、天下の文人を招く。漢の景帝は文學を好まざるの天子、偶ま孝王が來朝したるや、司馬相如を筆頭に、鄒陽、枚乘、莊忌の諸文豪は悉く景帝を去て、梁王の朝へ趨りしなり。『史記』の司馬相如傳に此の事詳かなり。淺見絅齋曰く梁の孝王は漢の景帝の弟と。其の誤り明白なり、後昆信ず可からず。

哀時命之不及古人兮　夫何予生之不」遘」時　往者不」可」扳援」兮　徠者不」可」與期」　志憾恨而不」逞兮　抒」中情」而屬」詩　夜炯炯而不」寐兮　懷」隱憂」而歷」茲　心鬱鬱而無」告兮　衆孰可」與深謀」　欲愁悴而委惰兮　老冉冉而逮」之

時命の古人に及かざるを哀しむ、夫れ何ぞ予が生の時に遘はざる、往者は扳ち援可らず、徠者も與に期す可らず、志憾み恨んで逞からず、中情を抒て詩を屬る、夜炯炯として寐ず、隱憂を懷いて茲を歷、心鬱鬱として告ること無し、衆孰か與に深く謀る可き、欲と愁悴して委惰たり、老冉冉として之に逮べり。

【句解】●●時命　孟子曰く之を致すこと莫うして至る者は命なり。但し吉凶定め無し。或は吉命あり、或は凶命あり、昭代に生れ、賢臣が明主に遇ふは是れ吉命なり、賢臣が暗主に會ふは是

れ凶命なり、屈原の如きは卽ち此の凶命に出會して、古人卽ち伊尹が成湯に會ひ、傅說が武丁に遇ふが如きには及かざるなり。●●● 不遘時　不幸凶命の致す所、生れて聖時に遘遇せず、而かも●●往者は旣に過ぐ、吉も凶も逐ふも詮無し、乃ち扳援すべからず。扳は攀に同じ、援は援引なり。●●徠者は未だ至らざる者なり、吉も凶も知るに由無し、是を以て乃ち興期すべからず。憾恨は共に「ウラム」なり、煩悶の意味に解しても通ずるなり。我が智の及ばざるを煩悶して、卽ち不遘なり。遑は快と同じ、獨り煩悶して誰に告ぐるも由なし。然らば此の中情は何に向つて抒んや、唯是れ詩を屬爲せんのみ。炯炯は氣が精明なる形容。隱憂　言はずして獨憂するなり。歷茲憂を散せずに其の儘で居ることなり。欿は本義「ムサボル」貪惏なり。朱子曰く不滿足の意と。愁も悴も共に「ウレフ」なり、悴は「カジケル」の和訓あり。委惰は疲勞懈怠、隱憂の極、痛く疲勞するを覺ゆ。莊忌は孝王に用ひられ、屈原が楚王に放てらるると反對の人、而かも此の言辭を爲すは深く屈原に同情すればなり。模倣のものは多く眞の血無し、然るに此の哀時命は能く騷の神髓を得たり。時と期と詩と茲と謀と之と韵なり。

居レ處レ愁以隱約兮　志沈抑而不レ揚　道壅塞而不レ通兮　江河廣而無レ梁　願至二崑崙之懸圃一兮　采二鍾山之玉英一　擘二瑤木之櫹枝一兮　望二閶風之板桐一　弱水汩其爲レ難兮　路中斷而不レ通　勢不レ能レ凌レ波以徑度兮　又無二羽翼一而高翔　然隱惘而不レ達兮　獨徙倚而彷徨　悵惝罔以永思兮　心紆軫而增レ傷

愁に處るに居り以て隱約し、志沈抑して揚がらず、道壅塞して通ぜず、江河廣うして梁無し、願くは崑崙の懸圃に至り、鍾山の玉英を采ん、瑤木の櫹枝を擘て、閶風の板桐を望む、弱水汩としして其れ難を爲す、路中斷して通ぜず、勢波を凌ぎて以て徑に度ること能はず、又羽翼にして高く翔る無し、然して隱惘して達せず、獨徙倚として彷徨す、悵として惝罔して以て永く思ふ、心紆軫して傷を增す。

【句解】●●隱約は隱憂約纏なり、結んで解けず。●●沈抑　オサヘ付ける故に揚がらず。壅塞　フサガル故に通ぜず。懸圃玉英　瑤木は上に辨せり。櫹枝は樺は木の名なるが今は枝の大と見るべし。閶風も板桐も共に仙人が住する山の名、此の山に至らんと願ふも弱水の流れ、汩汩としてこれを涉るには頗る辛難と爲す、辛難は猶ほ忍ぶべきも、路の中斷して不通なるは奈何ともする無し。徒倚は彷徨と同じ、心に憂を懷きながら東西定め無くブラブラすることなり。惝罔は志を失して悅びざる形容。●紆軫は紆軫に作るを正とす。軫は車の横木、心に憂あるに由て、一直

道に進まず左右にヨロヨロする意味なり。揚と梁と英と桐と通と翔と徨と傷と韵なり。

倚躊躇以淹留兮　日饑饉而絶糧　廓抱景而獨倚兮　超永思乎故鄉　廓落寂而無友兮　誰可與玩此遺芳　白日晼晚其將入兮　哀余壽之弗將　車既敝而馬罷兮　蹇邅徊而不能行　身既不容於濁世兮　不知進退之宜當　冠崔嵬而切雲兮　劍淋離而從横

倚て躊躇して以て淹留し、日に饑饉して糧を絶り、廓として景を抱いて獨り倚る、超として永く故鄉を思ふ、廓落と寂にして友無し、誰か與に此の遺芳を玩そぶ可き、白日晼晚として其れ將に入らんとす、余が壽の將らざるを哀しむ、車既に敝れ馬罷る、蹇邅徊して行くこと能はず、身既に濁世に容れられず、進退の宜く當るべきを知らず、冠崔嵬として雲を切り、劍淋離として從横なり。

【句解】躊躇は進まんと欲して進まざる形容、已むを得ずして又淹留する、希望の處に達する能はず、中道に淹留す。其の中に饑饉に出會して糧食を絶たるるの慘を見る。廓は空廓、抱景は我と伴うて離れざるは獨景のみ。友の我と共に古人の遺芳を玩ぶ者無し。晼晚は晼は景昳、

卽ち日昃日の將に入らんとする貌。弗將は不長なり。敝は破敝なり。罷は罷疲なり。邅徊濁世は前に數ば辨せり。崔嵬は冠弁の高き形容。淋離は劍佩の滴る形容。高きが故に雲を切り、滴るが故に從横なり。糧と鄉と芳と將と行と當と横と韵なり。

衣攝葉以儲與兮　左袪挂於榑桑　右衽拂於不周兮　六合不足以肆行　上同鑿枘於伏戲兮　下合矩矱於虞唐　願尊節而式高兮　志猶卑夫禹湯　雖知困其不改操兮　終不以邪枉而害方　世竝擧而好朋兮　壹斗斛而相量　衆比周以肩迫兮　賢者遠而隱藏

衣攝葉と以て儲與、左袪は榑桑に挂りて、右衽は不周を拂へり、六合以て肆行するに足らず、上鑿枘を伏戲に同じくし、下矩矱を虞唐に合す、願くは節を尊んで高きに式らん、志猶ほ夫の禹湯を卑とす、困らるるを知ると雖も其れ操を改めず、終に邪枉を以て方を害せず、世竝擧して朋を好し、斗斛を壹にして相量り、衆比周して以て肩迫し、賢者は遠かりて隱れ藏る。

【句解】攝葉　儲與は朱子曰く衣の舒展せざる貌。袪は袪袂なり。榑桑と曰ふ大木に袪が挂る、又右の衽　卽ち衣襟は不周山を拂ふ。六合の間、以て肆行するを得ず、然れども上古に遡りて

伏戲　黃帝と鑿も枘も同じうし、之を下にしても矩矱　卽ち法を虞唐に合す。鑿枘と矩矱は規則の代名詞と心得べし。尊節は大節を尊崇して、以て伏戲や虞唐の高きに式らん。禹湯は聖人なり、然かも猶ほ之を卑しと爲すの志を有す。困苦に遇ふも、決して貞操を改めず。邪枉に會ふも決して方正を害せず。世竝擧而好朋は善友にあらず、惡人共が朋黨を言ふ。世上の鼠輩、是非邪正を問はず朋黨を結んで、相互に自己の利益を計る、而かも賢者を見るときは、彼等の妨害と爲るが故に比周して以て我に肩迫し、其の惡黨の中間に入れんとす。我は決して彼等の黨には入らずとなり。桑と行と唐と湯と方と量と藏と韵なり。

爲鳳凰作鶉籠兮　雖翕翅其不容　靈皇其不寤知兮　焉陳詞而効忠　俗嫉妬而蔽賢兮　孰知余之從容　願舒志而抽馮兮　庸詎知其吉凶　璋珪雜於甑窐兮　隴廉與孟娵同宮　擧世以爲恆俗兮　固將愁苦而終窮　幽獨轉而不寐兮　惟煩懣而盈匈　魂渺渺而馳騁兮　心煩冤之懥懥

鳳凰が爲めに鶉籠を作る、翅を翕すと雖も其れ容れず、靈皇其れ寤り知らず、焉んぞ詞を陳して忠を効さん、俗嫉妬して賢を蔽ふ、孰か余が從容たるを知らん、願くは志を舒て馮りを抽でん、

詎を庸てか其の吉凶を知らん、璋珪甑窐に雜はり、隴廉孟娵と宮を同じうす、擧世以て恆俗と爲す、固に將に愁苦して終に窮らんとす、幽獨轉た寐られず、惟煩懣して匈に盈つ、魂渺渺として馳騁す、心煩冤すること懥懥たり。

【句解】鳳凰は鶉「ウヅラ」の籠に容れるものにあらず。翕は合なり。左右の翅を合すと雖も、固より大、到底鶉籠は鳳凰を容るべからず。靈皇は臣より君を稱する語、鳳と鶉の大小をすら寤知せず、是を以て諫詞を陳述するも用ひず。効忠の功全く無し。況や凡愚の鼠輩嫉妬するに於てをや。鼠輩共は我が道を守り從容として處する其の意を知らずとなり。其の從容たる態度を一變して、我が馮滿する志を舒んと欲するも、其の事に當りての吉か凶か、到底分明に知る能はず。試に見よ、璋　卽ち半珪も、珪　卽ち玉瑞も、甑窐　卽ち瓦製の釜と混雜してあるにあらずや。又隴廉の如き醜婦と孟娵の如き美人とが同一に取扱はれ居るにあらずや。恆俗　滔滔として皆是れ、是非美醜の區別を知る者は無し。是に於て我は從容として居らんか、又起て馮滿を舒んか、決する能はず、憂悶が胷中に馳騁して、渺渺　卽ち際限無く、懥懥　卽ちムナサワギして止まずとなり。容と忠と又容と凶と娵と宮と窮と匈と懥と韵なり。

志欿憾而不憺兮　路幽昧而甚難　塊獨守此曲隅兮　然欿切

而永歎

志欿慨として憺らず、路幽昧にして甚だ難し、塊獨此の曲隅を守る、然して欵切にして永く歎ず。

【句解】欿も慨も「ウラム」なり。憺は安靜なり。幽昧は路の明白ならざるなり。塊獨は一塊孤獨と成語す。曲隅 前路進む能はず、曲隅を守る所以。難と歎と韵。

愁脩夜而宛轉兮　氣涫濞其若波　握剞劂而不用兮　操規榘而無所施

脩夜を愁へて宛轉し、氣涫濞して其れ波の若し、剞劂を握りて用ひず、規榘を操つて施す所無し。

【句解】脩夜は長夜なり。宛轉は從容の反對、從容たらざるが故に宛轉するなり。涫濞は水のクラクラ湧き出る貌、今以て吾が氣が種種に紛亂して波の若きに譬ふなり。剞劂は刻鏤刀、卽ち小刀なり。規榘は尺度なり。我に剞劂あり、又規榘あるも、依賴者無きときは、何等の用も施も爲さざるなり、所謂寶財の持ち腐れの類。波と施と韵。

驥伏櫪於中庭兮　焉能極夫遠道　置猿狖于檻檻兮　夫何以責其捷巧

驥驥を中庭に騁す、焉ぞ能く夫の遠道を極めん、猿狖を檻檻に置く、夫れ何を以てか其の捷巧を責めん。

【句解】驥驥は千里の遠道に馳騁して始めて其の能を見はす、然るに之を中庭に騁す、何の功か之れ有らん。猿狖も亦然り、彼は山中に在てこそ其の捷巧を見はす、何ぞ檻檻中を自在に捷巧するを得ん。「離騷」に乘騏驥以馳騁とあり。道と巧と韵。

駟跛鼈而上山兮　吾固知其不能陞　釋管晏而任臧獲兮　何權衡之能稱

跛鼈を駟にして山に上る、吾固に其の陞ること能はざるを知る、管晏を釋て臧獲に任す、何ぞ權衡を能く稱らん。

【句解】跛鼈はビッコの大龜、平地すら滿足に步する能はざるもの、然るに之を副馬として山に上らんとするは滑稽ならずや。管は管仲、晏は晏嬰なり。管仲は齊の桓公を輔けて功あり、晏嬰は齊の靈公と莊公と景公との三世に事へて國家に功あり。臧獲は朱子曰く臧は人の爲めに賤繫せらるるなり、獲は人の爲めに係得せらるるなり。方言に云ふ臧獲は奴婢の賤稱と。管晏を釋て、臧獲を任用するなどは、如何かして其の權衡を稱量するや。陞と稱と韵。

箟簬雜於麖蒸兮　機蓬矢以躲革　負擔荷以丈尺兮　欲伸要而不可得　外迫脅於機臂兮　上牽聯於矰隿　肩傾側而不容兮　固陿腹而不得息

箟簬麖蒸に雜はる、蓬矢を機つて以て革を躲る、負擔荷するに丈尺を以てす、要を伸んと欲するも得べからず、外機臂に迫脅せられ、上矰隿に牽聯す、肩傾側して容れられず、固に陿腹にして息を得ず。

【句解】箟簬は朱子曰く竹箭なり。麖は麻藍、蒸は竹炬、竹を束ねて炬火と爲すもの。機は將に放たんとするなり。蓬矢はヨモギにて製する矢、躲は射なり。背には之を擔と曰ひ、肩には之を荷と曰ふ。以丈尺　人の身體は長短大小あり同じからず、然るに同じ寸法を以て製するに於ては、身體の自由を失なふこと知るべし。要は腰なり。機臂は弓を射る弩なり、丈尺が合はざるときは邪魔になりて其れが爲め外部が迫脅せらるるなり。矰隿は「イグルミ」なり、矢に紐を付けて射て鳥を失なはぬ爲めにする。牽聯するが故に又邪魔と爲る。肩傾側　肩がつかへて自由を缺く、是の故に腹を陿隘して居るより外はない、到底射法を知らずとなり。革と得と隿と息と韵なり。

務光自投於深淵兮　不獲世之塵垢　孰魁摧之可久兮　願退身而窮處　鑿山楹而爲室兮　下被衣於水渚　霧露濛濛其晨降兮　雲依斐而承宇　虹霓紛其朝霞兮　夕淫淫而淋雨　怊茫茫而無歸兮　悵遠望此曠野　下垂釣於谿谷兮　上要求於僊者　與赤松而結友兮　比王僑而爲耦　使梟楊先導兮　白虎爲之前後　浮雲霧而入冥兮　騎白鹿而容與

務光自ら深淵に投じ、世の塵垢を獲ず、孰か魁摧の久しかる可き、願くは身を退いて窮處せん、山楹を鑿て室と爲し、被衣を水渚に下す、霧露濛濛として其れ晨に降り、雲依斐として宇に承く、虹霓紛として其れ朝霞あり、夕に淫淫として雨を淋ぐ、怊と茫茫として歸ること無し、悵として遠く此の曠野を望む、下釣を谿谷に垂れ、上僊者を要求し、赤松と友を結び、王僑に比して耦と爲し、梟楊を先導せしめ、白虎之が前後を爲し、雲霧に浮んで冥に入り、白鹿に騎て容與す。

【句解】務光は『莊子』に出づ。古の清白の士と、歷史上の人にあらず、唯清白を言ふ爲めの人と見れば可なり。深淵に身を投じたるは、世上の塵垢に汚を厭うてなり。魁摧は未詳、要するに此の生の久しかる可んやとの意。是を以て世上と離れ、山楹に窮處し、山の自然を室とし、水

の自然を衣とし、依斐たる雲は天宇に承け、吾が頭上にあり。朝霞暮雨　紛紛たり、淫淫たり。此の自然を愛して、世上に歸ること無し、而して此の曠野を望見して、以て釣を谿谷に垂れ、古の仙人赤松子を友とし、又王僑仙人を吾が耦とし、梟楊　卽ち山神をして、我が往處を先導せしめ、其の上に白虎を前後に隨へ、雲霧に浮み、以て冥冥の中に入らん。身騎る所の物は輿にあらず、車にあらず唯白鹿なり。垢と處と渚と宇と雨と野と者と耦と後と與と韵なり。

魂眖眖以寄獨兮　汩徂往而不」歸　處卓卓而日遠兮　志浩蕩而傷懷

魂眖眖として以て寄獨、汩として徂き往て歸らず、處こと卓卓として日に遠し、志浩蕩として傷懷す。

【句解】眖眖は獨視と注して、我が魂氣が澄明にして物を視る貌、矇矇と反對の字なり。汩は「イツ」水流の速き形容。卓卓は高處を言ふ。日遠は久しく歷なり。歸と懷と韵なり。

鸞鳳翔於蒼雲兮　故矰繳而不」能」加　蛟龍潛於旋淵兮　身不」挂於罔羅」　知貪餌而近死兮　不」如下遊乎清波」　寧幽隱以遠」禍兮　孰侵辱之可」爲　子胥死而成」義兮　屈原沈於汨羅」　雖

體解」其不」變兮　豈忠信之可」化　志怦怦而內直兮　履」繩墨」而不」頗　執」權衡」而無」私兮　稱」輕重」而不」差

鸞鳳蒼雲に翔る、故に矰繳而かも加ふる能はず、蛟龍旋淵に潛る、身罔羅に挂らず、餌を貪つて死に近きを知れば、如かず清波に下遊せんには、寧ろ幽隱して以て禍に遠ざかる、孰か侵辱することの爲す可き、子胥死して義を成し、屈原汨羅に沈めり、體解すと雖も其れ變せず、豈忠信の化す可んや、志怦怦として內に直し、繩墨を履んで頗まず、權衡を執て私無し、輕重を稱て差はず。

【句解】鸞鳳　以下多くは解し易し、一一細辨するは無用とす。其の要は餌を貪るが爲めに死する者は、是れ自業自得なり、義の爲めに死する者は是れ貴ぶべしとなり。怦怦は心急なりと注して、心の「イソガハシキ」なり。繩墨も權衡も規則の代名詞。加と羅と波と爲と化と頗と差と韵なり。

撫二塵垢之狂攘一兮　除二穢累一而反」眞　形體白而質素兮　中皎潔而淑清　時厭飫而不」用兮　且隱伏而遠」身　聊竄」端而匿」迹兮　曖寂默而無」聲　獨偃悁而煩毒兮　焉發」憤而舒情　時曖曖其將」罷兮　遂悶歎而無」名　伯夷死二於首陽一兮　卒天隱而不」榮

太公不遇文王兮　身至死而不得逞　懷瑤象而佩瓊兮　願陳列而無正　生天墜之若過兮　忽爛漫而無成　邪氣襲余之形體兮　疾憯怛而萌生　願壹見陽春之白日兮　恐不終乎永年

塵垢の狂攘を概ひ、穢累を除て眞に反る、形體白うして質素なり、中皎潔にして淑淸なり、時厭飫して用ひず、且らく隱伏して身を遠ざく、聊か端を竄して迹を匿し、瞙とし寂默して聲無し、獨り偃悁として煩毒す、焉んぞ憤を發して情を舒ん、時曖曖として其れ將に罷なんとす、遂に悶歎して名無し、伯夷首陽に死し、卒に天隱して榮えず、太公文王に遇はずんば、身死に至るまで逞するを得じ、瑤象を懷いて瓊を佩にし、陳列せんことを願へども正すこと無し、天墜に生れたるの過るが若し、忽ち爛漫として成ること無し、邪氣余が形體を襲ふ、疾憯怛して萌生ず、願くは壹たび陽春の白日を見ん、恐くは永年を終へざらんことを。

【句解】概は概滌なり。狂攘は狂亂なり。反眞　塵垢や穢累は固より外物、之が爲めに汚さるるは道の眞を失すればなり。本眞に反るには塵穢は除去せざるを得ず、我と天地と德を合するが本眞なり。本眞に反らば卽ち形體は白うして質は素、又潔皎にして淑淸なり。『楚辭』の橘頌に精色內白にして道を任ずるに類すとあるは、卽ち此の謂なり。厭飫　人の食を求むるや、飽

滿すれば再び求めず之を厭飫と言ふ、「イトフ」は俗語の「イヤガル」なり。時不用　時に用ひらるるの願無きなり。願無きにはあらず、時世が用ひざるなり。是を以て隱伏し、又竄端　又匿迹　決して人に我か隱迹を知らしめず。寂默するが故に無聲なり。偃悁は忿憂卽ち自ら忿り自ら憂へて、遂に煩毒の疾と爲る、焉んぞ發憤して中情を舒述せざるを得ん。而かも時世は曖曖として暗澹、我の才を認めずに罷なんとす。遂に才人は悶歎中に生を終て、世に名を顯はすの事無し。伯夷の如き淸士は首陽山に餓死し、一生遂に不榮なり。太公卽ち呂望の如きも、若し文王に遇はずんば、終身又快心の時あらざりしならん。瑤象や瓊の如き寶器を持ち居るも、之を陳列して誰か之を正なりと認むる者ありや、曾て達眼の士は在らず。自ら惟ふ此の如くんば、我は此の天墜　卽ち天地の間に生れたるは過て生れたるかと。爛漫の義は詩家一定せず、要するに十分滿足の意を稱する語なるが如し。絅齋曰く爛漫は色の定かに定まらぬ體、キラキラと風に錦の吹かれて見えるやうなぞ。是の解は臆斷なり。今忽爛漫而無成と言ふは、十分に我が志の達せし事の無きを言ふなり。忽字妥當ならざるが如きも要するに此の意に外ならず。世人が用ひざるのみならず、邪氣　卽ち病の氣、形體を襲うて、憯怛は慘澹と同じ、病に罹りて切に陽春の白日　卽ち平愈の日の來らんことを願へども、恐くは此の願は空想にして永年を保

つに至る能はずとなり。不終の二字著目して其の意を知る可し。眞と清と身と聲と情と名と榮と逞と正と成と生と年と韵なり。序でに一言を記するは前文悉く日本音を以てし、此に至り支那音にて記したるは稍や奇恠なる感を爲す人もあるべし。決して奇恠を好むにあらず、上平十一眞と下平八庚との音、日本讀としては全然相違して、此に身「シン」聲「セイ」と假名を付するときは大人は固より之を知るも、三尺は之を解する能はず。是故に特に支那音を以て假名を付せしのみ。讀者悋しむ莫くんば幸なり。此の「哀時命」の一章莊忌が直に其の本心を舒述せしものか、又楚辭其の文を模倣せんが爲めか、又屈原其の人を憫んで致す所なるか、此の三者に就て明白に其の意の在る所を知る能はず。朱子は固より之を輕視せるが故に、屈賦の如く敬意を表せず。先儒の朱子を奉ずる者、亦朱意に背かず。余を以て之を觀るに、屈を慕ふが故に此の賦あり、我が本心を舒述せるを以て其の氣魄十分とは言へざるが、全く氣魄無しとは言ふべからず。詩人の情、憂士の心、此の如くなるを知らば、一概に聖道を以て之を責むるの愚は宜しく廢棄すべきなり。

國譯楚辭終

國譯楚辭後語

釋清潭譯並註

朱子曰く楚辭後語は晁氏が集錄する所の續變の二書を以て刊補定著す。凡て五十二篇、晁氏が此の書を爲る、固に辭を主として、而かも亦義を兼ざるを得ず。今其の舊に因ときは其の辭を攷ふること宜しく益す精しかるべし、義を擇ぶこと當に益す嚴なるべし。此れ余が兢兢として其の謹を致さざるを得ざる所以なり。朱子は是の語に續き猶ほ辨ずるが、要するに幽憂の文字は取る可く、懽愉の語詞は取らず、楚辭の本志は幽憂に在りて懽愉に在らざればなり。荀卿及び柳宗元は屈原が徒にあらざるも、取て以て之を贊するは乃ち其の文字の上にあるなり。朱子の意太だ公平なるを覺ゆ。余も亦楚辭に次ぐに此等の諸子を取る所以なり。

傴詩第一

荀卿は趙の人、名は況、人之を荀卿子と稱す。年五十（十五の誤なりとの說あり）始めて來りて齊に遊學す。威王、宣王、襄王の三世に事へて三たび祭酒と爲る。（祭酒とは今日の大學の總長なり）後讒者を避け楚に適く、春申君之を迎へて蘭陵令と爲す。春申君死して荀卿も亦廢められ、遂に蘭陵に家して卒す。其の學統は分明ならず。朱子は孔氏の門人仲弓子弓なりと斷ずと雖も、臆說にて明證無し。子弓を尊崇せる意味は『荀子』の中に於て明白なるも、是れ我が學ぶ所の師にはあらず。或は謂ふ仲弓なりと、是れ亦明證無し。唯其の學孔子を

宗とし、王道を明かにするを以て本志とし、而して禮樂に及ぶ。一家の見解、今に於て其れ猶は用ふべきあり。其の學醇粹ならずと言ふ者は、身を春申君に託する故を以てなり、性惡を主張するを以てなり。何ぞ知らん身を春申君に託し、性に於て惡を主張す、其の主張の半面、大に諷諭する所のものなきにあらず。其れ色に白あり紅あり青あり黃あり。孟子は白なり、荀子は紅なり。白を稱して醇粹なりと爲す者は、紅を以て不醇粹と稱す可し。紅を以て醇粹なりと爲す者は、亦白を以て不醇粹と稱す可し。醇粹と不醇粹は彼我の一方より言ふべき語のみ。彼と我とは固より異なる、彼より與へられたる語を以て我も亦之を信ぜざる可らざる理由斷じて無し。孟子と荀子を同一列に爲したる太史公は眞に是れ識ありと謂ふべし。而して今「成相篇」を茲に省く所以は國譯漢文大成の中經子史部第八卷に於て笹川講師が譯せる荀子あればなり。是を以て朱子に於ては成相を第一とす。余に於ては佹詩を以て第一と爲すなり。

天下不治　請陳佹詩」　天地易位　四時易鄉　列星隕墜　旦暮晦盲　幽闇登昭　日月下藏　公正無レ私　反見二縱橫一」　道德純備　讒口將將　仁人細約　敖暴擅強　天下幽險　恐失二世英一」　鴟梟爲二鳳凰一　比干見レ刳　孔子拘レ匡

天下治らず、請ふ佹詩を陳ん、天地位を易へ、四時鄉こと易ふ、列星隕墜し、旦暮晦盲なり、幽闇登昭して、日月下藏す、公正私無し、反て縱橫と見る、志公利を愛れば、重樓疏堂あり、私無うして人を罪すれど、革の二兵を慙しむ、道德純備なれど、讒口將將たり、仁人は細約せられ、敖暴は擅強なり、天下幽險、恐くは世英

を失はん、螭龍爲二蝘蜓一と爲し、鴟梟を鳳凰と爲す、比干は刳れ、孔子は匡に拘せらる。

【句解】　佹詩　朱子曰く佹詩は荀卿子が作る所。或は曰く荀卿既に蘭陵の令と爲る。客の春申君に說く者あり、曰く湯は亳（地名）を以てし、武王は鎬（地名）を以て、皆天下を有てり。今荀子賢なり、而るに君借に百里の勢を以てす。臣君の爲めに之を危むと。春申君乃ち荀子を謝す。荀子去て趙に之く。人又春申君に說て曰く昔し伊尹夏を去て殷に入る、殷王として夏に仕ふ。管仲魯を去て齊に入る、魯弱くして齊強し。賢者の在る所、其の君未だ嘗て尊榮ならずんばあらず。今荀子天下の賢士なり、君何爲ぞ之を謝する。春申君又人をして荀子を請しむ。荀子還らず、之に賦を遺る、蓋し卽ち此の佹詩なり。然れども此れ其の說、又前と異なり。未だ知らず其の果して孰れか是なるを。朱子言ふ所此の如し、余も亦孰れか是なるを知らざるなり。朱子曰く佹詩は佹異激切の詩なり。今曰く誰か自ら好んで佹異の詩を作る者あらん。佹は宜しく重累卽ち「ワヅラハシ」の義、又は佹戾卽ち「モトル」の義を取るべし。佹は詭なりと解するも全く無用なり。世の佹戾なるを述べたること文義彰章、何の疑ふべきなし、戾る所以は何ぞ。夏日は暑かる可きに雪飛び、冬日は寒かる可きに霜降らず、天地位を易ふればなり。然らば春夏秋冬の四時が鄉ふ所を誤るなり。幽闇は下藏なる可きに反して登昭し日月は眷昭なる可きに反して下藏す。而して公正無私なる人を反して縱と爲り橫と爲る獨操無き不正の人と見るに至る。志は意と同じ。公利を貪愛する徒は重樓や疏堂に住するを得。疏堂とは桁に透し窗ある建築物。公家卽ち公金を以て私腹を肥す小人共を言ふ。無私罪人　慙革二兵　檢事や判事の如き人は法を以て惡人を罪する役なり。而かも惡人は己が非を知らずして罰する人を怨とす。是を以て革を著けたる兵士二人を護衞として警戒

せざるを得ず。而して道德高き人は、讒口の將將とワメクを聞くに至る。仁人は黜細卽ち「シリゾケ」られ、又纏約卽ち「タシナメ」らる。此の如くなれば敖慕の徒は勝を制し、天下に賢聖出でず。道路往還皆幽險なり。嫡龍の語は「九歌」の中に在り。鴟梟の語は「惜誓」の中に在り。鄉と旨と臧と横と堂と兵と將と強と英と皇と匡と韵なり。

昭昭乎其知之明也　郁郁乎其遇時之不祥也　拂乎其欲禮義之大行也　闇乎天下之晦盲也　皓天不復憂無疆也　千秋必反古之常也　弟子勉學天不忘也　聖人共手時幾將矣

昭昭乎たり其れ知の明かなることや、郁郁乎たり其れ時の不祥に遇ふことや、拂乎たり其れ禮義の大に行はんことを欲するや、闇乎たり天下の晦盲なるや、皓天復らず憂無疆なり、千秋には必ず反る古の常なり、弟子學を勉めて天を忘れざれ、聖人も手を共す時幾將ぞ。

【句解】　知之明は知識の十分にある人。郁郁は文章ある貌。朱子曰く下の拂乎の二字を其遇の上に移すべし、而して郁郁乎の三字を下の其欲の上へ移すべし。拂は拂戻「モトル」なり。時不祥に遇ふは卽ち拂戻なり。郁郁乎として禮義大行せんと欲するも、哀い哉天下は晦盲の人のみ多くして、昭昭として道德に明かなる人を顧ず、となり。皓天の幸運は去て復らず、我が憂疆無し、而かも循環は古今の常理、又幸運の來ることある可し。幸に弟子は勉學して天命を忘却する勿れ。聖人は聖人として世に仰がるる秋があるなり。共手は卽ち徒らに手を拱して爲す有る能はざる時は幾將も無し、天運の開く亦將に久しからざるなり。明と祥と行と旨と疆と常と將

と韵。卽ち前韵に續くなり。

與愚以疑　願聞反辭　其小歌曰　念彼遠方　何其塞矣　仁人紲約　暴人衍

愚に與るに疑を以てす、願くは反辭を聞ん。其の小歌に曰く、彼の遠方を念ふに、何ぞ其れ塞がる、仁人紲約せられ、暴人衍なり、忠臣危殆にして、讒人は般り。

【句解】　愚とは弟子が稱する語。先生は弟子に教ふるに天不忘とか聖人共手とかの詞を以てす。弟子の攷ふる所に依れば聖人が共手する道理無し、又天も忘るるごときこと無し。然るに先生示す所彼の如し、弟子愚にして其の疑を解く能はず、先生請ふ愛に反辭を賜へ弟子喜んで之を聞かんとなり。其小歌とは念彼以下の文字を指して言ふ。弟子に對する先生の反辭とす。其の反辭は卽ち前言と同樣の意味を反覆して以て弟子に教ふるなり。此の小歌の韵は未考。

琁玉瑤珠　不知佩也　雜布與錦　不知異也　閭娵子奢　莫之媒也　嫫母刀父　是之喜也　以旨爲明　以聾爲聰　以危爲安　以吉爲凶　嗚乎上天　曷維其同

琁玉瑤珠あれど佩を知らず、雜布と錦と異るを知らず、閭娵子奢あれど之を媒する莫し、嫫母刀父是を喜ぶ、旨を以て明と爲し、聾を以て聰と爲し、危を以て安と爲し、吉を以て凶と爲す、嗚乎上天、曷ぞ維其れ同じからん。

【句解】　琁玉は朱色の玉。瑤珠は玉の美なる者、玉は石を主とし、珠は貝を主とす。然れども同一義に用ふ

ること多し。雜布は字の如く麤雜の衣類、一は佩ぶることを知らず、一は異同を辨ぜざるなり。閭嫂と子奢は古の美人、嫫母と刀父は古の醜婦、美人と醜婦に就ての好惡は世が顚倒すと雖も、此れは是れ誤らざるが、要するに眞の善きものは用ひられず、反て惡なるもの用ひらるるを譬喩するのみ。盲明以下の文字、世が皆顚倒せるを言ふ。嗚乎上天　曷維其同　朱子曰く長亂の極、人私意を懷き、乖異反易、此の如くなるに至る。故に天に呼んで之を問ふ。曰く何爲ぞ之を同じからしむべきや、同じきときは天下の公に合ひ、是非善惡、皆理に當りて天下治る。此れ天意禍を悔るときは禍を轉じて福と爲し、亂を撥め正に反る、難しと爲すに足らざるを言ひ、以て弟子の惑を解くなり。此の句は佩と媒と異と喜と共に隔句に韵を踏み、而して明と聰と凶と同と又韵を踏む。其の作法は詩に雜ふるに七言を以てし、而して四言も琁玉より喜也に至る句は二句一讀法を以てせり。今四字として、中間一字を虛にしたるは讀み易からしめんが爲めのみ。

易水歌第二

易水歌は燕の刺客荆軻が作る所なり。燕の太子丹、秦の諸侯を攻伐して己む時無きを患へ、荆軻をして督亢の圖（督亢は燕國の膏腴の地今日の直隸省順天府）と樊將軍於期が首を奉じて秦に入り秦王を刺さしむ。發するに臨み、太子及び賓客其の事を知る者、皆白衣冠して以て之を送り易水の上に至り既に祖す、高漸離筑を擊つ、荆軻和して歌ふ、變徵の聲を爲す。士皆涙を垂れ涕泣す。又前んで歌ふ。復羽聲を爲して忼慨す。士皆目を瞋し、髮盡く上りて冠を指す。是に於て荆軻車に就て去る。朱子曰く軻は匹夫の勇、其の事言ふに足る無

し。然れども此に於て以て秦政の無道、燕丹が淺謀を見つ可し。而して天下の勢、已に此に至る、聖賢を復生ぜしむと雖も、亦未だ知らず其の何を以てか之を安んずることを。且余此に於て又特に其の詞の悲壯激烈、讀に非ずして楚、觀るに足るもの有るを以て、是に於て之を錄す、他は固に深く論ずるに遑あらず。

風蕭蕭兮易水寒　壯士一去兮不ㇾ復還ㇾ

風蕭蕭として易水寒し、壯士一たび去て復還らず。

【句解】●●易水は燕の中央を貫流して幽州に向ふ川なり。今日の直隸省易州に當る。秋風の蕭蕭たる時に於て、●壯士　國の爲め他國に赴き、以て天下の憂を除かんと欲す。而かも其の志遂げずんば再び此の川を渡らずと誓ふ。果して事成らず、壯士の身は秦に殺る。荆軻は固に一屠夫のみ。而して此の千載不朽の詩を遺す。豈氣を以て勝るの故にあらずや。

越人歌第三

越人歌は楚王の弟鄂君、舟を新波の中に泛て枻を榜す、越人棹を擁して歌ふ。此の詞其の義、鄙褻言ふに足らず、特に其の越よりして楚、學ばずして其の餘韵を得、且周の太師が六詩の所謂興と云ふものに於て亦契ふことあり、聲詩の體、古今貫を共にし、胡越一家にして、人の能く爲す所にあらざる者あるを知るを以て、是を以て其の遠して且曉きを以て之を遺すを得ざるなり。

今夕何夕兮搴ㇾ洲中流ㇾ　今日何日兮得ㇾ與ㇾ王子ㇾ同ㇾ舟　蒙羞被ㇾ好兮不ㇾ訾詬恥ㇾ心

幾頑而不絕兮得知王子　山有木兮木有枝　心說君兮君不知

今夕何の夕ぞ洲の中流に寨る、今日何の日ぞ王子と舟を同じうするを得、羞を蒙むり好を被むれども詬恥を嘗はず、心幾ど頑にして絕ざれども王子を知るを得たり、山に木あり木に枝あり、心に君を說くも君知らず。

【句解】　今夕　今日　樂今夕の如きは無し、娛今日の如きは無し。　何夕　何日　何とも言語に絕せる夕なり。

何とも譬喩すべき無き日なり。王子と舟を同じうして水蘋を搴て以て戲遊懽樂す。如何に羞恥を蒙むるも、羞恥とは嘗はざるなり。王子に秋波を贈り、王子は一向に知らぬ顏の半兵衞でも而かも我は羞恥と嘗はざるなり。

心幾頑不絕　頑は頑鈍と成語して聰明の反對なり。如何に羞恥を蒙むるも心聰明ならざれば執拗に之を思うて其の念が絕たざるなり。得知王子　此の四字は解釋の仕樣によりては王子と懽を通じたりとも見らるるなり。又一面には僅に王子の面を知るを得たりとも解釋するを得、多くは後者を取る。若し此の後者說の王子の面を知るに止まるのみなれば千載一遇の此の夕此の日も又空しからんのみ。山有木木有枝　心說君君不知　此等の句を解するに古來より興なりと曰ふ。山は君なり、我は木なり。木は山に倚らざる可らず、山は木を植るざる可らず。而して其の木には枝葉あり、枝葉は木を美にする所以なり。我は容色美なり、心情潔つ、心に說て口に說かず、君の察知を冀ふも、無情の君は遂に之を知らずとなり。作法として良に楚詞の堂に上る傑作なり。流と舟と韵、恥と子と韵、枝と知と韵なり。

垓下歌第四

垓下歌は楚の項羽が作る所、楚の軍漢の爲めに破られ、羽垓下に在て夜四面楚歌するを聞く。驚て曰く漢已に楚を得るか、何ぞ楚人の多きや。乃ち起て帳中に飲し、美人虞氏と是の詩を歌ふ。

力拔山兮氣蓋世　時不利兮騅不逝　騅不逝兮可奈何　虞兮虞兮奈若何

【句解】　力拔山氣蓋世　我が力は以て天下の重きものも、拔き、我が氣は天下の廣きものを蓋ふに足る。如何せん時は不利なり、騅　卽ち我が愛する駿馬も已に逝かざるなり。騅逝かずとせば我が運命は已に谷まる、是に於て我が氣殘りは獨り此の愛女のみ。朱子曰く羽は固より楚人なり、而して其の詞慷慨激烈、千載不平の餘憤あり。是を以て之を著はす。其の成敗得失の若きは亦以て強不義者の深戒と爲す可し。今曰く羽に於て何ぞ不義なることあらん、軍中に女子を伴ふ彼の邦の常事なり。舜の如きは姉妹を妻と爲したるにあらずや、又羽が暴逆殘忍なりと言ふ證も明白ならず。其の將に自劉せんとするに臨み、常に愛する女の身を憐む、英雄の本色此に在り。淺見絅齋曰く死にざまに女を何うしたものであらうと云ふやうなことは、いかにとぼけたことぞ。トボケテ居ては此の如き雄篇は作れざるなり、トボケざるときは如何なる雄篇が出るやも知るべからず。詩人の境界は道學先生の知る所にあらず。世と逝と韵、何と何と韵なり。

大風歌第五

大風歌は漢の高祖が作る所、高祖黥布を破て還り、途沛を過ぎ、沛に於て故人父老を召し、共に飲酒し、高祖

乃ち此の詩を歌ふ。

大風起兮雲飛揚　威加海内兮歸故鄉　安得猛士兮守四方

大風起て雲飛揚す、威海内に加つて故郷に歸る、安んぞ猛士を得て四方を守らしめん。

【句解】大風は何、雲は何と兒戲的の注は全く無用なり。安得はドウにかして猛士を我が手に入れてとの意。朱子曰く文中子云ふ大風は安にして危を忘れず、其れ霸心の存せるか、美なるかな其の之を言ふや。漢の天下を有ちて而かも三代の王たる能はざる所以、其れ是を以てか。然かも千載より以來人主の詞、亦未だ是の若く其れ壯麗にして奇偉なる者はあらず、嗚乎雄なる哉。此の歌と垓下歌と比較するに彼は四句、此は三句、彼は悲痛、此は雄豪、固より其の調を異にすと雖も、詩と云ふものの上より見るときは同一均量にして共に命世の作とす。是に由て之を考ふるに是れ羽が作にもあらず、高祖が作にもあらず、當時史官の作る所なるべし。羽は羽の面目、高祖は高祖の面目を想像して其れ之を歌ふのみ。之を眞に羽が作、高祖が作と思へる者は吳下の阿蒙のみ。揚と鄉と方と一韵なり。誰が命名せしやは知らざるが一名を三侯之章と曰ふ。

鴻鵠歌　第六

鴻鵠歌は漢の高祖が作る所、初め呂氏閻闇より起て高祖を佐け天下を定む。既に老て疏ぜらる。太子盈も又柔弱なり。高祖は戚夫人を愛するの故を以て、其の子如意を太子と爲さんと欲す。呂氏憂へ、張良と議して商山の四老人を召し、太子盈に侍せしむ。四老人は高祖の召せども至らざるもの而かも來りて太子に侍す。高祖豈

驚かざるを得ん。四老人高祖に謂て曰く陛下士を輕んじ善く罵る、臣等義辱られず、故に亡げ匿る。今聞く太子仁孝にして士を愛すと、故に臣等來るのみ。高祖戚夫人を召し曰く我之を易んと欲するも、彼の四人の者之を輔く。羽翼已に成る動かし難し。呂氏は眞に迺が主なり。戚夫人泣涕す。高祖曰く我が爲めに楚舞せよ、吾若が爲めに楚歌せん。歌ふこと數闋、戚夫人歔欷流涕す。高祖竟に太子を易ず。

鴻鵠高飛　一舉千里　羽翼已就　橫絕四海　橫絕四海　又可奈何　雖有繒繳　尙安所施

鴻鵠高く飛で、一舉千里なり、羽翼已に就り、四海に橫絕す、四海に橫絕す、又奈何かすべき、繒繳ありと雖も、尙安か施す所あらん。

【句解】此の歌を『古樂府』に「楚歌」と題す。鴻鵠以下の意味、商山の四老人が太子盈を羽翼する以上、所謂四海に橫絕せる者を如何に廣大なる繒繳「イグルミ」あるも、術の施すべき樣無しとなり。高祖が眞に此の歌を歌ひたりとせば、戚夫人の泣涕するも亦當然なり。朱子は張良の遺策無きを嘆ず。今謂ふ張良の智謀も此の時は是れ以上の策の施すべき樣無かりしならん。而かも高祖が其の愛の尤も深き戚夫人が子の如意を僅に四老人の一言にして之を立るを廢し、以て柔弱なる盈を立てしは是れ亦疑ふべき心事なり。四海に橫絕すと言はれたる惠帝は十四にして卽位し、二十歲にて死せしにあらずや。如意を立るも五十步百步ならんのみ。而かも一旦の愛を翻して此の歌を歌ふ。羽以上に殘忍の人なりし事知るべし。史に稱す呂氏は悍戾の心なりと。悍戾の心は女子の特有、獨り唯呂氏ならざるなり。又疑ふ是れ後人の僞作な

らんかと。里と海と韵、何と施と韵。

瓠子歌第七

瓠子歌は漢の孝武帝が作る所、帝既に封禪して、乃ち卒數萬人を發し、瓠子の決河を塞ぎ、還るとき自ら臨んで祭り、白馬玉璧を沈め、羣臣百官をして皆薪を負ひ、決河に實しむ。時東郡燒け、薪柴少し、乃ち淇園の竹を下して以て楗と爲す。（楗は鍵と同じクワンヌキなり）天子其の功の就らざるを悼み歌詩二章を作る。是に於て卒に瓠子を塞ぎ、宮を其の上に築き、名けて宣防と曰ふ。而して河を導いて北二渠に行り、禹の舊迹に復す。此れより梁楚の地、復水災無し。歸來子曰く是より先き帝封禪して山川を巡祭し、財を殫くし、侈を極む、海内之が爲めに虛耗す。此の歌を爲るに及んで、乃ち閔然として、神に顯ひ民を憂ふる惻怛の意ありと云ふ。

瓠子決兮將奈何　浩浩洋洋兮虛殫爲河　殫爲河兮地不得寧　功無已時兮吾山平　吾山平兮鉅野溢　魚弗鬱兮柏冬日　正道弛兮離常流　蛟龍騁兮放遠遊　歸舊川兮神哉沛　不封禪兮安知外　爲我謂河伯兮何不仁　泛濫不止兮愁吾人　齧桑浮兮淮泗滿　久不反兮水維緩

瓠子決す將に奈何せんとす、浩浩洋洋殫く河と爲と慮る、殫く河と爲らば地寧きことを得ず、功已む時無うして吾山平かならん、吾山平かならば鉅野溢れん、魚弗鬱として冬日に柏る、正道弛て常流を離る、蛟龍騁て遠遊を放ままにす、舊川に歸せしめば神なるかな沛たらん、封禪せずんば安んぞ外を知らん、我が爲めに河伯に謂へ何ぞ不仁なるぞと、泛濫として止ず吾人を愁しむ、齧桑浮んで淮泗滿つ、久しく反らずんば水維緩ならん。

【句解】瓠子河は今日の直隸省大名府開州を流るる河なり。孝武帝は景帝の子にして、西漢の帝王中特に英武なりと稱せらる。此の河が決壞するや、大地の上、浩浩洋洋　水ならざるは莫し、然るときは世人安寧を得ず。功無已時は土木工事に力功を盡くすなり。而かも功擧がらず、吾山まで水に沒するに至らん。朱子曰く吾山は疑ふらくは東阿の魚山を謂ふか、是れ然らん。然れども吾山平を注して曰く山を鑿ち以て河に塡む故に山平かなりと。今謂ふ恐くは誤る。水が浩浩洋洋とならば山の高きも平地と同じからんとの意なり。山が已に平なり。鉅野　卽ち禹貢の大野澤の溢るるは當然なり。弗鬱は憂へて樂しまざるの貌。柏は迫なり。冬日に迫るときは愈よ困苦ならん。正道は河の中心地を曰ふ。常流も卽ち中心地。弛は弛壞、若し其の常流を離るる時に於ては蛟龍は平居の棲家を失し、竟に遠遊するに至らん、是れ河を護るの神龍なり。歸舊川神哉沛　水を治めて舊川卽ち水の正道に歸せしめば、我が神靈は滂沛たるものあらん。不封禪安知外　我が封禪して處處の山河を跋涉するに依て民の困苦も知るなり、侈奢なりと言ふこと勿れよとなり。河伯は河神、「カハ」と訓み「カハク」と訓む共に可なり。河伯は眞に不仁なり、天下の困苦を憫まざるなり。齧桑は縣の名、水で一面に成る、淮水も泗水も共に渺漫たらん。水維は水の守るべき綱維、水德が弛緩するに至らんと大に河伯を責むるの詞なり。何と河と韵、寧と平と韵、溢と日と韵、流と遊と韵、沛と外と韵、仁と人と韵、滿と緩と韵なり。

二

河湯湯兮激潺湲　北渡回兮迅流難　搴長茭兮沛美玉　河伯許兮薪不屬　薪

不レ屬兮衞人罪　燒薪條兮噫乎何以御水　隤二林竹一兮楗二石菑一　宣防塞兮萬福來

河湯湯と激して潺湲たり、北渡回て迅流難し、長茭を塞て美玉を湛む、河伯許せども薪屬す、薪屬ざるは衞人の罪なり、燒て蕭條たり噫何を以てか水を御がん、林竹を隤し石菑を楗にす、宣防塞ぎ萬福來らん。

【句解】湯湯は水の盛んなる貌。潺湲は水の流るる聲。北渡　北方へ渡らんと欲すれども回流するが故に甚だ難む。茭は竹葦を組て以て土石を引く物、「タケゾナ」竹綱なり。湛は沈と同じ、此の竹綱を塞りて以て美玉を湛る策を取る。河伯は此の渠を許さるるが如きも、惜い哉薪が屬かざる爲め、工事が進行せざるなり。其の薪の屬かざるは衞人　卽ち東郡の人の怠慢の罪であるなり。燒蕭條　衞人は折角の薪も誤て燒失せしものと見ゆるなり、乃ち以て水を禦ぎ難きなり。是に於てか林竹　卽ち淇園の竹を伐採し來つて石菑を楗にし、僅に宣防を塞ぎ其の工を終ふとなり。「タケヲナ」乃ち一歳の田を言ふなるが此には此の義にあらず。朱子曰く菑は臿なり、石を臿み之を立て以て楗と爲すなり。潺と難と韵、玉と屬と韵、罪と水と韵、菑と來と韵なり。

秋風辭第八

秋風辭は漢の武帝の作る所、武帝河東に幸し、后土を祠り、中流に讌飲して懽甚し、此を作る。文中子曰く秋風辭は樂極て哀來る、其れ悔心の萌せるか。

秋風起兮白雲飛　草木黃落兮雁南歸　蘭有レ秀兮菊有レ芳　懷二佳人一兮不レ能レ忘
汎二樓船一兮濟二汾河一　橫二中流一兮揚二素波一　簫鼓鳴兮發二櫂歌一　懽樂極兮哀情多　少

壯幾時兮奈老何

秋風起て白雲飛ぶ、草木黃落して雁南に歸る、蘭に秀あり菊に芳あり、佳人を懷うて忘るること能はず、樓船を汎べて汾河を濟る、中流に橫つて素波を揚ぐ、簫鼓鳴て櫂歌を發す、懽樂極て哀情多し、少壯幾時ぞ老を奈何。

【句解】河東は河東道、今日の山西省汾州の地。武帝は英武の主なるも、一面には奢侈も亦極めて比類無し、其の后土を祭祀するは天子の職務なるも、中流に飲讌は職務なりと言ふ可らず、是れ亦奢の一端、文中子の嘆息する所以なり。蘭秀菊芳は朱子曰く以て下句の詞を興す、湘夫人及び越人歌と同法なり。此を知るときは興の體を知らん。乃ち羣臣を以て蘭の秀たる如く、菊の芳なる如きを興したるなり。佳人も亦羣臣を言ふ、栢梁臺を作りて始めて聯句を作る。其の人卽ち衞青、倪寬等の二十有五人皆以て佳人と稱せらるるなり。此の「秋風辭」と「栢梁詩」との作に就て、孰れか先孰れか後なることは判然せざるも、懽樂　究極して哀情を發し、少壯の幾時ならざるを知て衰老するを奈何と嘆ぜられたるに依て、之を案ずれば此の詩は栢梁の後ならんと思ふなり。晩年平常の奢を悔い、詔して曰く卽位以來、爲す所狂悖、天下を愁苦せしむ、追悔すべからず。自今百姓を傷害し、天下を糜費するあらば悉く之を罷むべし。飛と歸と韵、芳と忘と韵、波と歌と多と何と韵なり。

烏孫公主歌第九

烏孫公主歌は漢の武帝元封年中に江都王建が女細君（細君は名）を以て公主と爲し（公主は卽ち皇女、武帝に於ては孫女に當る）烏孫王昆莫に妻はし右夫人と爲す。公主其の國に至り、自ら宮室を治め居り、歲時に一再、昆莫と會して、置酒飮食す、昆莫年老、言語通ぜず。公主悲み愁て歌を爲る、昆莫乃ち上書して其の孫をして公主に尙ぜしめんと。（下の者を以て上の者を娶とす之を尙と曰ふ）詔して之を許す。公主聽かず、亦上書して狀を言す。天子乃ち報じて、其の俗に從はしむ。

吾家嫁二我兮天一方一　遠託二異國一兮烏孫王　穹廬爲レ室兮旃爲レ牆　以レ肉爲レ食兮酪爲レ漿　居常土思兮心內傷　願爲二黃鵠一兮歸二故鄕一

吾が家我を天の一方に嫁せしむ、遠く異國に託す烏孫王、穹廬を室と爲し旃を牆と爲す、肉を以て食と爲し酪を漿と爲す、居常土を思うて心內に傷む、願くは黃鵠と爲て故鄕に歸らん。

【句解】●烏孫は今日の伊犁地方を領して、屢ば漢の爲め害を爲ししなり。此の平和の神卽ち犧牲と爲りし美人は幾人なるを知らず、公主も亦其の一人なり。吾家は卽ち漢家なり。天一方●●●烏孫は『漢書』にも長安を去る八千九百里とあり、遠からずとせず。而かも烏孫の種族は形醜なるに於てをや。穹廬●は卽ち烏孫が住する家屋、穹は窮なり大なり。所謂穹窿然として其の高きを曰ふ。旃●は今日の所謂天幕なり、毛織の布を以て牆と爲すは上流の家庭なり。而して食は多く肉、酪●は牛乳。土思●●●は鄕土を思ふなり。心內傷內は以て口に廢せざるなり。『史記』大宛傳に烏孫千匹の馬を以て漢女を聘す。漢宗室の女江都翁主を遣はし往て烏孫に妻はす。烏孫昆莫以て右夫人と爲す。匈奴亦女を遣はし昆莫に妻はす。昆莫以て左夫人と爲す。昆莫曰く我老ゆ。乃ち其の孫岑陬

をして翁主を妻とせしむ。此の詩卽ち是れ此の時に成るものならん。公とし翁とする共に同じ。詩境神品に入る、一女子の手に成るとは思へざるなり。方と王と牆と漿と傷と鄕と一韻の作なり。

長門賦第十

長門賦は漢の司馬相如が作る所、朱子曰く梁の蕭統が『文選』云ふ漢の武帝陳皇后幸せらるるを得て頗る妬、別れて長門宮に在り、蜀都の司馬相如、天下工に文を爲ると聞て黃金百斤を奉じ、相如文君が爲めに酒を取り、因て悲愁を解くの辭を求む。而して相如文を爲り以て主上を悟しむ、皇后復幸せらるるを得と。而して『漢書』の皇后及び相如傳に奉金賦を求め復幸せらるる事無し。然れども此の文古妙最も楚辭に近し。或は相如后の罪を得るを以て自ら文を爲り以て諷す。后の之を求むるにあらずと。知らず敍者何に從て此を實とす。今謂く昭明太子は決して虛辭を設くる人にあらず。此の事だる『漢書』以外に何の典か據る所ありしならん。而かも今日に於て之を證するの史實無きを悲しむのみ。

夫何一佳人兮　步逍遙以自虞　魂踰佚而不返兮　形枯槁而獨居　言我朝往而暮來兮　飮食樂而忘人　心慷移而不省故兮　交得レ意而相親　伊予志之慢愚兮　懷二貞慤之懽心一　願賜二間而自進一兮　期二城南之離宮一　修薄具二而自設一兮　君不レ肯二幸臨一

夫れ何ぞ一佳人、步して逍遙し以て自ら虞む、魂踰佚して返らず、形枯槁して獨り居り、言く我朝に往て暮に來

らん、飲食樂んで人を忘る、心慊移して故を省ず、交も意を得て相親む、伊予が志の慢愚なる、貞愨の懽心を慊く、願くは問を賜はりて自ら進まん、君の玉音を尚するを得ん、虛言を奉じて誠を望む、城南の離宮に期す、薄具を修して自ら設く、君は幸臨するを肯ぜず。

【句解】 佳人は皇后陳氏。逍遙は心期する所無くしてブラブラ遊ぶなり。虞は頗る多義を有する字、今は虞娛の訓を取る、憂中に虞娛を求むるなり、眞の虞娛にはあらず。蹶は蹶越、佚は佚遊、我が身は君に棄てられたるを以て其の魂は身を脫して地上の外に在て我と我に不返なり。然らば形卽ち身の枯槁獨居は固より當然なり。言は天子の言なり。朝往暮來 女の處には我朝に去て暮に來らんと其の寵辭を蒙むりし、而して飲食 天子と共に飲食以て樂み、他人の事は忘るるとなり。然るに何ぞ料らん近來は心天子の心慊移 他の愛人に心を移して我が故を省みずとなり。慊は恨の義を以て第一義とす。交は二人以上に用ふる字、乃ち天子が或る一人の女を寵して以て得意として相親しむなり。予は陳氏自身を指す。慢愚は天子に對する我が智の足らざりしを悔んで以て發するなり。俗語で言はば妾は馬鹿なりしなり、決して天子を恨まずとなり。貞愨は貞誠正愨、純粹にして蕪雜ならざる「マコト」を言ふ。妾に於ては君に對し永く寵愛せらるることと信じ、貞愨の懽心を懷き居りしなり。願くは其の下問を賜はりて自進し、尙は尙承、種種天子が命ずる儘を尙承して背かざらんとなり。奉虛言望誠 天子よりは虛言を仰せられたが、我は誠と思うたぞとの注を書きし人あり。天子に對して虛言の文字を以てするは聊か不審なりと雖も、相如は輕薄なる文人或は是の注者の說の如くならん。城南離宮は皇后陳氏の居所にあらず、是の離宮に於て汝と共に飮食せんと天子が虛

言を吐きしなり。其れを虛言と知らずして、薄具 皇后が手製料理を修して以て君の幸臨するを待つ、而して天子は終に幸臨するを不肯 卽ち承知せざるなり。

廓獨潛而專精兮　天飄飄而疾風　登蘭臺而遙望兮　神怳怳而外淫　浮雲鬱而四塞兮　天窈窈而晝陰　雷隱隱而響起兮　聲象君之車音　飄風廻而起閨兮　舉帷幄之襜襜　桂樹交而相紛兮　芳酷烈之鬰鬰　孔雀集而相存兮　玄猿嘯而長吟　翡翠脅翼而來萃兮　鸞鳳飛而北南　心憑噫而不舒兮　邪氣壯而攻中　下蘭臺而周覽兮　步從容於深宮

廓として獨り潛て精を專らにす、天飄飄として疾風あり、蘭臺に登つて遙に望む、神怳怳として外に淫ぶ、浮雲鬱として四に塞がる、天窈窈として晝陰し、雷隱隱として響起る、聲君の車音に象れり、飄風廻りて閨に赴く、幄帷を擧て襜襜たり、桂樹交りて相紛たり、酷烈の鬰鬰たるを芳にす、孔雀集つて相存ふ、玄猿嘯て長く吟ず、翡翠を脅て來り萃る、鸞鳳飛で北南す、心憑噫して舒ず、邪氣壯にして中を攻む、蘭臺を下つて周く覽る、步して深宮に從容す。

【句解】 廓は「ヒロシ」空廓にして我を慰むる人無し。專精 獨り潛居するが故に天子を念ふの心が精一にして專ら茲に在るなり。況や其の時我が耳に入る音は飄飄として來る疾風あり。是の風聲に驚いて蘭臺に登攀して遙望すれば、我が精神は怳怳 卽ちトボトボとして外に淫ぶ。而して見る所のものは何ぞ、浮雲は濛濛として四方を閉塞し、天色は窈窈 卽ち深黑にして白晝夜の如く陰し、時に雷聲も隱隱として響起る。其の雷聲は恰

も君が車音にあらずやと想像する。飄風廻赴閨　閨は閨閤、『說文』曰く宮中の門之を閨と謂ふ、其の小なる者之を閨と謂ふ。上圜にして下方、圭卽ち圭玉の形に似たるを以てなり。案ずるに閨は女子の專用にあらず、士人にも通ぜしなり。然るに小門中多くは是れ婦の住する所なるを以て遂に婦女子の專用となりしものならん。乃ち今飄風がグルグル廻りて以て陳氏が閨房を襲ふなり。而して帷幄　卽ち納簾の幕を擧げて其の幕が襜襜と飜るなり、襜は名詞としては膝を蔽ふの具、形容詞としては動搖する貌、卽ち襜襜の類となるなり。而して桂樹は飄風の爲め紛紛として酷烈の芳氣を吐く、其の芳氣は閶閶と盛んなり。『說文』に閶閶は中正の貌、又和敬とあり。言が主意にして門は主意にあらざるなり。而かも君は至らず、相存問する者は曰く孔雀　曰く玄猿　曰く翡翠　曰く鸞鳳。此等の物は相互に我が中庭に翺翔して遊べども、君は遂に至らざるなり。然らば則ち我は中心憑噫　卽ち憤悶して君を恨み君に寵遇せらるる婦女を憤り我と我が氣は舒る時無きなり。邪氣のみ壯に起りて中心を攻む、是を以て蘭臺を下りて以て深宮に從容す。

正殿塊以造天兮　鬱竝起而穹崇　間徙倚於東廂兮　觀夫靡靡而無窮　擠玉戶以撼金鋪兮　聲噌吰而似鐘音　刻木蘭以爲榱兮　飾文杏以爲梁　羅丰茸之游樹兮　離樓梧而相撐　施瑰木之欂櫨兮　委參差以棟梁　時髣髴以物類兮　象積石之將將

正殿塊として以て天に造る、鬱として竝び起て穹崇たり、間東廂に徙倚す、夫の靡靡として窮無きを觀る、玉戶を擠きて以て金鋪を撼かす、聲噌吰として鐘音に似たり、木蘭を刻んで以て榱と爲し、文杏を飾つて以て梁と

爲す、丰茸の游樹を羅ね、離樓と梧と相撐ふ、瑰木の欂櫨を施し、委て參差として以て棟梁あり、時に髣髴として以て物類あり、積石の將將たるに象る。

【句解】正殿　以下の文悉く其の建築物の壯麗比無きを言ふ。造天　塊然として高く天に造る。穹崇は鬱然として其の穹崇卽ち天を衝くが如きを言ふ。間は暫時と同じ。徙倚は或は步し或は休み、其の急遽ならざるなり。東廂は西廂に對して言ふ。靡靡は建物の連續する形容。金鋪は黃金にて製せる錠前。玉戶を擠開して以て此の金鋪を撼かす。乃ち其の錠前の音、鐘の如き音を發すとなり。噌吰は其の音の形容。榱は音「スヰ」訓に桷椽卽ち「タルキ」なり。木蘭を以て刻める「タルキ」なり。而して其の梁は文杏、卽ち「アンズ」の木の理目正しきものを以て製せり。丰茸は樹木の枚葉繁茂する形容。游樹は枡形の彼此相交はる貌。離樓は種種の木を以て枡形に作る。梧は枝梧と成語し、小柱を枝と爲し、斜柱を梧と爲す、卽ち「ハシラ」柱なり。以て互に相撐へて張り合ふなり。欂櫨は卽ち壁柱「タルキ」椽なり。委は積み重なるなり。參差は物のソロハヌ形容、左右遣りちがへてあるなり。棟梁は「ウツバリ」なり。髣髴は似たること。物類　西の物も東の物も皆似たる形式。積石は山の名。將將は高秀なる形容。以上は其の建造物に就て言ふ。以下其の副飾物の美なるを敍す。

五色炫以相曜兮　煥爛燁而成光　致錯石之瓴甓兮　象瑇瑁之文章　張羅綺之幔帷兮　垂楚組之連綱　撫柱楣以從容兮　覽曲臺之央央　白鶴噭以哀號兮　孤雌跱於枯楊　日黃昏而望絕兮　悵獨託於空堂　懸明月以自照兮　徂清夜於洞房　援雅琴以變調兮　奏愁思之不可長　案流徵以却轉兮　聲幼妙

而復揚　貫歷覽其中操兮　意慷慨而自卬　左右悲而垂淚兮　涕流離而從橫
舒息悒而憎欷兮　蹝履起而彷徨

五色炫として以て相曜く、煥爛爛として光を成す、錯石の瓴甓を致す、瑇瑁の文章に象り、羅綺の幔帷を張り、楚組の連綱を垂れ、柱楣に撫て以て從容し、曲臺の央央たるを覽る、白鶴噭として以て哀號し、孤雌枯楊に跱り、日黃昏にして望絕ゆ、悵として獨り空堂に託り、明月を懸て以て自ら照し、清夜を洞房に徂く、雅琴を援て以て調を變じ、愁思の長すべからざるを奏す、流徵を案じて以て却轉し、聲幼妙として復揚る、貫いて其の中操を歷覽し、意慷慨として自ら卬る、左右悲んで淚を垂る、涕流離として從橫なり、息悒を舒て欷を憎す、蹝履して起て彷徨す。

【句解】　爛爛は青黃赤等の五色がギラギラ光を發する形容。錯石は種種の石。瓴甓は「カベ」なり、敷石と見るも亦妨げず。而して此の五色の敷石が煥然として瑇瑁と稱する玉の文章に象るとなり。而して窗の邊は羅綺卽ちウスモノの好絹を張る。楚組は楚國より出る組糸なり。柱は「ハシラ」楣は柱上の鴨居なり。柱楣に倚撫して以て從容す。曲臺は臺の名。央央は盛美を形容す、「中ダカナコト」と解するは誤る。噭は鶴聲を形容す。枯楊に跱て鶴が鳴く。何の爲め哀號するやを知らざるが、蓋し雄鶴を慕うて鳴くならん。而も日は已に黃昏に逼る、君は猶ほ至らず、我が望は絕えなんとす、復悵然として空堂に獨在す。明月は我を照す。洞房　唯空しく清夜を送るのみ。援は援引なり。雅琴を彈援して以て變調する、變調する所以は我が心恨あればなり。而して彈奏する意義は何ぞ、愁思は短かるべし、其の長うすべからざるを願ふなり、强て自ら慰むるなり。案流徵以却

轉心恨あれば聲調も亦狂はざるを得ず、其の調子の狂へるに氣が著き又其の正調を奏せんとす。聲幼妙は窈妙と同じ。復揚　乃ち正調に復するなり。貫歷覽其中操　貫は彈聲を亂さず宮聲や角聲を一貫して以て其の中操に歸するなり。而かも其の中操を得ざる所以は何ぞ。意慷慨すればなり、慷慨するが故に聲は自から高卬する所以。左右　聞く者、彈者の意を悲しまざる者無し、我も彼も共に涕泣するに至る。息悒は「タメイキ」なり。憎は增と同じ、欷は哀欷。蹝履は履を穿つこと。彷徨は徘徊と意義少しく異なる、心中に愁ありて以て「サマヨフ」是を彷徨と言ふ。

投長袂以自翳兮　數昔日之謇殃　無面目之可顯兮　遂頹思而就牀　搏芬若以爲枕兮　席荃蘭而茝香　忽寢寐而夢想兮　魂若君之在傍　惕寐覺以無見兮　魂迋迋若有亡　衆鷄鳴而愁予兮　起視月之精光　觀衆星之行列兮　畢昴出於東方　望中庭之藹藹兮　若季秋之降霜　夜漫漫其若歲兮　懷鬱鬱其不可再更　澹偃蹇而待曙兮　荒亭亭而復明　妾人竊自悲傷兮　究年歲而不敢忘

長袂を投て以て自ら翳す、昔日の謇殃を數ふ、面目の顯す可き無し、遂に思を頹して牀に就く、芬若を搏て以て枕と爲し、荃蘭を席て茝香あり、忽ち寢寐して夢想す、魂君の傍に在るが若し、惕として寐覺て以て見ること無し、魂迋迋として亡る有るが若し、衆鷄鳴て予を愁しむ、起て月の精光あるを視る、衆星の行列を觀るに、畢昴東方に出たり、中庭の藹藹たるを望む、季秋の霜を降すが若し、夜漫漫として其れ歲の若し、懷鬱鬱として其れ再び更

ふ可らず、澹偃蹇として曙を待つ、荒亭亭として復明なり、妾人竊かに自ら悲傷す、年歳を究むとも敢て忘れず。

【句解】長袂は長き袂なり。自翳は自ら其の顔を翳すなり。曾殃は過失なり。昔日　君寵を蒙りし時は隨分と勝手の事を君に申し、今日之を數へて見れば、面目の又顯はすべき無しとなり。遂に耐へきれずして牀に就き寐んと欲す。乃ち芬若　香木の枕を摶り、荃蘭　香木の席に倚る、枕も席も共に茝香を發す、忽ち我は寢寐するに至る、何ぞ料らん魂夢は君王の側に在るが若し。惕然として驚き覺むる時は遂に君を見ず。迋迋は未詳、若有亡　魂が茫然として失神の貌を言ふ。衆鷄　鳴くに至るは已に曉天に向へばなり。起て視れば猶ほ殘月精光を餘す、而して衆星は猶ほ行列し、曉天に出る畢昴星は早や東方に出でて、中庭を照すが故に中庭は藹藹として暗からず、庭中は白うして降霜かと疑ふ。句意一轉して又夜に至る。漫漫は夜の長き形容。鬱鬱たる我が懷は再び之を回り返すべからずと其の之を嫌ふなり。是を不可再叟と言ふ。澹は澹然、偃蹇は我と我自ら悠長にする貌、既にして亭亭と旭日上り夜は旦と爲る。妾人は自ら稱する語、天子に對するが故に卑稱を用ふ。「ワタクシ」と言ふがごとし。不敢忘　何の事を忘れざるやは文意分明ならず、蓋し君王が事を年歳を經るも忘れずと見るを以て詩人の本意とすべし、他は何ぞ言ふに足らん。

哀二世賦第十一

哀二世賦は司馬相如が作る所、相如武帝に從て長陽に至て獵す、宜春宮に過ぐ、宜春は本秦の離宮、閻樂が胡亥を殺すの地なり。相如賦を作り以て二世が行失を哀む。朱子曰く相如が文、能く侈て約なること能はず、

能く諂して諒なる能はず、其の上林子虛の作、既に以て誇麗にして楚詞に入るを得ず。大人の遠遊に於ける其の漁獵又泰甚なり。然れども亦終に諛に歸す。特此の二篇は諷諫の意ありと爲す。而して此の篇は爲めに作る所の者は正に當時の商監なり、尤も當に意を傾け言を極め以て主聽を寤すべし。顧て乃ち低回局促して肯て其の詞を盡くさず、亦以て其の意に阿り容らるるを取るの賤むべきを知るに足る。然らずんば豈其の將に死せんとし猶ほ封禪を以て言を爲さんや。文人行無しとは夙に聞く所のもの、而かも朱子が相如を責むるの甚しき此の如し。文人をして盡く孔子たらしむる能はざるは今古皆同じ。獨り相如を責むるは是れ亦孔子の道に非ざるなり。己は道を守り、他人は守らずと定むるの儒者あり。此等は皆僞孔子の徒、相如が以下に在るものと知る可し。

登陂陀之長阪兮　坌入曾宮之嵯峨　臨曲江之隑州兮　望南山之參差　巖巖

深山之谾谾兮　通谷豁乎谽谺

陂陀たるの長阪に登り、曾宮の嵯峨たるに坌び入る、曲江の隑州に臨み、南山の參差たるを望む、巖巖たる深山の谾谾たるあり、通谷豁として谽谺たり。

【句解】陂陀は途の險阻を曰ふ、陀は陁の正字なり。長阪が險阻なるなり。坌は塵なり。朱子曰く坌は竝なり、塵と我と竝に共に曾宮の嵯峨たるに入る。隑州　朱子曰く隑は曲岸頭なり、碕と同じと。今謂ふ隑は「キ」の音にあらず「ガイ」の音なり、碕と同じからず。今案ずるに或は曲江の隑州を臨覽するにあらずやと。而して望む所のものは終南山の參差たるあり。而して谾谾は山の深き形容、而して谽谺は谷の深き形容、豁は「ホガ

ラカ」空谷の謂ひなり。

汩淢靸習以永逝兮　注平皐之廣衍　觀衆樹之蓊薆兮　覽竹林之榛榛　東馳土山兮　北揭石瀨　弭節容與兮　歷弔二世　持身不謹兮　亡國失勢

汩淢靸習として以て永く逝く、平皐の廣衍に注ぐ、衆樹の蓊薆たるを觀、竹林の榛榛たるを覽る、東土山に馳せ、北石瀨を揭る、節を弭て容與とし、二世を歷弔す、身を持すること謹しまず、國を亡し勢を失へり。

【句解】汩淢は急流の形容。靸習は輕流の形容。平皐は水邊中の平處を言ふ。蓊薆は衆樹の繁茂する形容。榛榛は竹林の盛茂する形容。石瀨は水の淺處、乃ち衣を蹇げて揭るを得。弭節は杖節を弭めてなり。容與は從容と同じ。

信讒不寤兮　宗廟滅絕　烏乎操行之不得　墓蕪穢而不修兮　魂亡歸而不食

讒を信じて寤ず、宗廟滅び絕ゆ、烏乎操行の得ず、墓蕪穢して修めず、魂歸すること亡して食ず。

【句解】信讒　二世胡亥は趙高の策言を容れ遂に兄を廢して自ら二世と爲る、不義此の如し、四年ならずして宗廟滅絕するに至る。不食は本二世が述し言なり。趙高が不義を策言せし時、胡亥曰く兄を廢し弟を立つ是れ不義なり。父の詔を奉ぜずして死を畏る是れ不孝なり。能薄く材謭、强て人の功に因るは是れ不能なり。三の者逆德、天下服せず、身殆ど傾危、社稷血食せず。是の語を以て利用するに至る惡も茲に在り、利も亦茲に在るなり。

自悼賦第十二

自悼賦は漢の成帝の時班倢伃が作る所、班氏世世儒學を以て顯れ、倢伃選を以て宮に入て寵幸せられ、嘗て從て後庭に游ぶ、帝召して同輦して載んと欲す。辭して曰く古の圖畫を觀るに、聖賢の君は皆名臣有りて側に在り、三代の末主、迺ち嬖女あり。今同輦せんと欲す、之に近似する無からんや。帝其の言を善とし止む。倢伃詩及び窈窕德象女師の篇を誦す。進見する每に上疏して古禮に依則す。後趙飛燕姊弟微賤より興る、倢伃復進見すること稀なり。飛燕遂に譖す倢伃主上を咒詛すと。倢伃を考問す。倢伃對て曰く妾聞く死生命あり、富貴天に在り、正を修むるも尙未だ福を蒙らず、邪を爲して以て何を望んと欲する。鬼神をして知るあらしめば、不臣の愬を受けず、如其れ知る無くんば、之を愬ふるも何の益かあらん、故に爲ざるなり。上其の對を善とし事遂に釋然たり。倢伃久うして終に危うせらるるを恐れ、太后を長信宮に供養するを得んと求む。因て賦を作り以て自悼す。歸來子曰く其の詞甚だ古、楚人に侵尋す、特に婦人女子が能く言ふものにあらず。朱子曰く是の言固に然り、其の情幽怨に出づと雖も、能く分を引て自ら安んじ、古を援て以て自ら慰め、和平中正、終に慘傷に過ぎず。又其の德正の美、學問の力、人に過ぎたる者あり。則ち論者及ばざるあり。烏乎賢なる哉柏舟綠衣、經に錄せらる。其の詞義の美殆ど此に過ぎず。

承祖考之遺德兮　何性命之淑靈　登薄軀於宮闕兮　充下陳於後庭　蒙聖皇之渥惠兮　當日月之盛明　揚光烈之翕赫兮　奉隆寵於增成

祖考の遺德を承け、性命の淑靈を何り、薄軀を宮闕に登げ、下陳に後庭に充らる、聖皇の渥惠を蒙むりて、日月の盛明に當れり、光烈の翕赫たるを揚げ、隆寵を增成に奉く。

【句解】 何は負荷なり。性命淑靈は語を替て之を言へば祖考の遺德を承けるが故に我は非常に幸福なる運命を荷へりとなり。薄軀はツマラヌ軀。下陳は宮女の卑役。渥惠は優渥慈惠なり。日月盛明 光烈翕赫 非常に寵遇せられ、其の極に達するを言ふ。增成は倢伃が居る所、卽ち後宮の舍名なり。靈と庭と明と成と韵なり。

既過幸於非位兮 竊庶幾乎嘉時 毎寤寐而粲息兮 申佩離以自思 陳女圖以鏡監兮 顧女史而問詩 悲晨婦之作戒兮 哀褒閻之爲郵 美皇英之女虞 榮任姒之母周 雖愚陋其靡及兮 敢舍心而忘茲

既に過て非位に幸せらる、竊に嘉時に庶幾す、毎に寤寐して粲息し、佩離を申て以て自ら思ふ、女圖を陳して以て鏡監し、女史を顧て詩を問ふ、晨婦の戒を作すを悲み、褒閻の郵を爲すを哀む、皇英の虞に女たりしことを美なりとし、任姒が周に母たるを榮とす、愚陋にして其れ及ぶ靡しと雖も、敢て心を舍て茲を忘れんや。

【句解】 非位は寵幸を蒙むる資格無きに而かも寵幸を蒙むるとなり。竊時はセメテ皇后と爲らざるも、妃と爲らんと其の好期を待ちしとなり。粲息は累息なり。粲は累の古字なり。寤ても寐ても其の事のみを思うて累息するとなり。佩離は佩褵なり、袿衣の帶を言ふ。女將に嫁に適かんとす、父其の褵を結んで之を戒しむ。乃ち以て自思する所以。陳女圖鏡監 女人が或は畊織、或は佚游、善と無く悪と無く古より傳來する圖畫を陳列して以て自ら鏡監として自ら戒しむ。問詩 詩を問うて以て古の賢婦悪婦が事を知らんと欲す。此の如き事は詩に於て多く顯はるれば也。晨婦は『尙書』に出づ、牝鷄は晨を告げざるもの、然るに牝鷄が曉を報じて鳴くは不祥の兆なり。婦人は外事に預からざるに喩ふ。女の差し出者は

到底貞婦にあらざればなり。褒閻は周の幽王を魅して遂に天下を亡ぼし褒姒が事なり。郵は郵過なり、彼は天下の爲めに大過を釀し悪婦なり。乃ち以て晨婦と褒姒との二者は悲哀すべしとなり。皇英は娥皇と女英の姊妹、此の二妃は虞舜に嫁して貞婦の名を留めしものなり。任姒は大任と大姒なり。大任は文王を生み、大姒は武王を生む、乃ち以て皇英と任姒との四人は美榮とすべきなりを知ると雖もなり。舍心忘茲 中心常に悪婦の事を哀しみ、善婦の事を學ばんと欲するの念は忘れずとなり。愚陋は倢伃自身を言ふ。靡は無なり、及ぶ無き時と思と郵と周と茲と韵なり。郵と周は今韵異なりと雖も、古韵は同一に用ひしものなり。

歷年歲而悼懼兮 閔蕃華之不滋 痛陽祿與柘館兮 仍襁褓而離災 豈妾人之殃咎兮 將天命之不可求 白日忽已移光兮 遂晻莫而昧幽 猶被覆載之厚德兮 不廢捐於罪郵 奉共養于東宮兮 託長信之末流 共洒掃於帷幄兮 永終死以爲期 願歸骨於山足兮 依松柏之餘休

年歲を歷て悼み懼れ、蕃華の滋からざるを閔む、陽祿と柘館とを痛む、仍襁褓にして災に離り、豈妾人の殃咎あるか、將天命の求むべからざるか、白日忽として已に光を移し、遂に晻莫として昧幽なり、猶ほ覆載の厚德を被むつて、罪郵に廢捐せられず、共養を東宮に奉じ、長信の末流に託し、洒掃に帷幄に共す、永く終へ死以て期と爲ん、願くは骨を山の足に歸し、松柏の餘休に依らん。

【句解】 悼懼 多年恩寵を蒙むりしを悼懼するなり。閔は憫の正字、憐憫と成語して不憫に思ふことなり。蕃華不滋 折角花が開くも滋茂せざるを自ら閔むなり。陽祿と柘館は倢伃が嘗て子を產し館の名、而かも數月

にして死す、痛む所以なり。襁褓は「ムツキ」離災は數月にして死せしを以てなり。豈は否定の詞。妾人之殃咎自分の强て爲せる殃咎にはあらず。天命は遂に求むる能はずとなり。白日移光　此の意義は種種に取れるが、要するに折角生し子は死せしを以て、天子の心も我を疏んずるに至り、我も亦何と無く氣が晴晴せずとなり。晻莫は昧幽の形容、而かも天子は猶ほ我を覆載し、我を罪として廢捐せず、遂に長信　宮に太后を共養するの志願を許さる。幸に之を許さる、身は永く太后の爲め洒掃を奉じ、死せば以て此の長信宮の陵足に葬られ、松柏の餘休卽ち餘廕に依らんとなり、太后の境遇と我と極めて相似たるあるを以て深く其の誠意を發露し、千載の下人をして泣かしむる者あり。滋と災と求と幽と郵と流と期と休と韵なり。

重曰潛玄宮兮幽以淸　應門閉兮禁闥扃　華殿塵兮玉階苕　中庭萋兮綠草生
廣室陰兮帷幄暗　房櫳虛兮風泠泠　感帷裳兮發紅羅　紛綷縩兮紈素聲　神
眇眇兮密靚處　君不御兮誰爲榮

重て曰く玄宮に潛て幽にして以て淸し、應門閉ぢ禁闥扃す、華殿塵あり玉階苕あり、中庭萋として綠草生ず、廣室陰くして帷幄暗し、房櫳虛にして風泠泠たり、帷裳を感して紅羅を發す、紛とし綷縩として紈素聲あり、神眇眇として密靚に處り、君御せず誰か榮と爲ん。

【句解】重曰　前言足らず、茲に重て曰ふ。玄宮は長信宮の深幽なるを言ふ。玄宮と稱する宮名にはあらず、以て太后の寂寞を知るべし。應門は正門。扃は短關、所謂表門も裏門も皆鎖すとなり。自然と華殿に塵を積み、玉階に苔落を生ず。而して中庭は綠草萋萋たり。廣室は大、房櫳は小、一面は暗く、一面は風泠泠　風の爲め

帷幕は感く、乃ち紅色の羅を發すに至る。綷縩は風が帷を感し其の風と布と相搖くの聲なり。紈素は帷裳を組ぐ白色の索なり、其の索が鳴る音する。眇眇は淒狀を言ふ。靚は靜なり。君不御誰爲榮　上の如き淒狀も天子が御幸でも賜はる事なれば、亦以て光榮とすべきも、そは空想のみ、太后と我と唯此の薄倖を閔むのみ。文の妙此に至り層一層進入するものなり。淸と落と生と裳と聲と榮と韵なり。

俯視兮丹墀　思君兮履綦　仰視兮雲屋　雙涕兮橫流　顧左右兮和顏　酌羽觴兮銷憂　惟人生兮一世　忽已過兮若浮　己獨享兮高明　處生民兮極休　勉虞精兮極樂　與福祿兮無期　綠衣兮白華　自古兮有之

俯して丹墀を視、君が履綦を思ふ、仰で雲屋を視、雙涕橫に流る、左右を顧みて顏を和らげ、羽觴を酌で憂を銷す、惟人の一世に生る、忽として已に過ぎ浮ぶが若し、己獨り高明に享り、生民に處して休を極む、勉て精を虞しめ樂を極む、福祿と期無けん、綠衣白華、古より之有り。

【句解】丹墀は宮禁に限り用ふ。履は「クツ」綦は履下の飾なり。昔は丹墀に君の履綦あり、今は唯之を思ふのみ。雲屋は平たく言へば天井を視ると言ふが如し、唯空を視ると解するも亦可なり。上下を俯仰し叟に左右を顧る。而して怨恨の心は起さず、柔和なる顏色を以てす。酌羽觴　是れ男子ならば强烈の酒を酌で以て憂を銷するならんが、女子なるが故に葡萄酒の如きものを飮で以て憂を銷却せしならん。人の一生は眞に浮萍の若し、幸は少なく禍は多きなり。然るに己一人は休を極めて今日に至る。今弃らると雖も、猶ほ此の長信宮中に在りて、尋常女子の知らざる幸福を享く、何ぞ亦君を恨んや、何ぞ亦世を怨んや。志す所は古の賢婦、卽ち

衞國の莊姜の如く、周の幽王の申后の如くならんとなり。綠衣は莊姜が作る詩の題、白華は申后が作る詩の題、共に是れ天子に寵を失して自ら傷んで作る詩、而かも怨恨嫉妬の意は微塵も寓せざるなり。『詩經』の國風邶と小雅の白華之什を見よ。棊と流と愛と浮と休と期と之と韵なり。嗚乎此等の賦を讀んで泣かざる者其れ幾人ぞ。天子感動して亦恩寵を加ふと傳ふる所なるが良に然るべきなり。

反離騷第十三

反離騷は漢の給事黃門郎新莽諸吏中散大夫揚雄が作る所、揚雄少うして詞賦を好み、司馬相如が所作を慕ひ以て式と爲す。又屈原が文相如に過るを怪んで、離騷を作り自ら江に投じて死すべからずと云ふに至る。其の文を悲んで之を讀み、未だ嘗て流涕せずんばあらず。以爲らく君子時を得て大に行ふ、得ざるときは龍蛇のごとし、遇不遇は命なり、何ぞ必ず身を湛めんや。迺ち書を作り、往往に離騷の文を摭うて、之に反して岷山より諸を江流に投じて以て屈原を弔すと云ふ。始め雄學を好んで博く覽、勢利に恬たり。漢に仕へて三世、官に徙らず。然かも王莽安漢公爲る時、雄法言を作つて已に其の美を稱して伊尹周公に比す。王莽が漢を簒ひ帝號を竊むに及んで雄遂に之に臣たり。耆老の久次を以て轉じて大夫と爲る。又相如が封禪文に放うて劇秦美新を獻じて以て莽が意に媚び、書を天祿閣上に校するを得たり。會劉尋等符命を作るを以て莽が爲め誅せらる。辭連て雄に及ぶ、使者來り之を收めんと欲す。雄恐懼閣上より自ら投下し幾ど死なんとす。是より先き雄解嘲を作る。爰清爰靜　遊神之廷　惟寂惟寞　守德之宅の語あり。是に至りて京師之が爲めに語て曰く爰に清淨にして

符命を作る、唯寂寞として自ら閣より投ず。雄病に因て免ず。既に復召して大夫と爲る。竟に莽が朝に死す。其の出處大致、本末此の如し、豈其の所謂龍蛇なる者か。然らば則ち雄は固に屈原が罪人たり、而して此の文乃ち離騷の讒賊なり、他尚何の說かあらんや。（朱子）

有周氏之蟬蜎兮　或鼻祖於汾隅

有周氏が蟬蜎たる、或は汾隅に鼻祖し、靈宗諜を伯僑に初め、末の楊侯に流る。

【句解】有周氏は卽ち周代を言ふ、雄が祖先の系脈を敍べんと欲するなり。蟬蜎は朱子曰く連なり、所謂系脈が連續して今日の我に至るなり。鼻祖は家の興起、祖先を言ふ。汾隅は汾水の邊隅、汾水が祖の住せし地、卽ち楊邑なり。靈宗は祖先を稱す。諜は諜譜、家の系譜、其の系譜は伯僑より初るとなり。末は後裔と言ふが如し。楊侯と爲る。屈原が胙皇考之苗裔と云ふ文意を取る。隅と侯と韵なり。

淑周楚之豐烈兮　因江潭而泝記兮　欽弔楚之湘纍

周楚の豐烈を淑して、超に既に皇波に離ふ、江潭に因て記を泝ぐ、欽で楚の湘纍を弔ふ。

【句解】淑は淑善と成語す、周より楚の地を慕うて移住し來ることを言ふ。皇波は大波なり、大波を侵して以て楚地へ來りたるなり。虖は乎と同じ、其の途次江潭に因て此の反離騷を作り以て水に投ずとなり。泝は音「キヤウ」訓「ユク」「ソソグ」注なり。今記文を作り水に流し其の往くままに任すを言ふ。湘纍は湘水の神卽ち屈原を指す、纍は囚と同じ。波と纍と韵。

惟天軌之不辟兮　何純絜而離紛　紛纍以其淟涊兮　暗纍以其纉紛

惟天軌の辟けず、何ぞ純絜にして紛に離ふ、纍を紛するに其の淟涊を以てし、纍を暗するに其の繽紛を以てす。

【句解】天軌　天道と同じ、軌は軌轍必ず往く可き道なり。不辟は不開と同じ、天道正しからずと言ふに同じ、其の意は善人にして禍を蒙むり、惡人にして榮を全うする者あればなり。純絜なる者紛　卽ち難に離ふは天道は善に與する道に背けばなり。紛纍　卽ち屈原をして難義せしむるに其の淟涊　卽ち垢濁を以てし、又繽紛を以てす、此れ天軌の辟けざる所以なり。紛と紛と同字を以て韵とす。

漢十世之陽朔兮　招搖紀于周正　正皇天之清則兮　度后土之方貞

漢十世の陽朔に、招搖周の正に紀して、皇天の清則を正し、后土の方貞に度る。

【句解】漢十世は高祖より數て成帝に至る。陽朔は成帝の年號なり、十一月を指したるにあらず。招搖は星なり。紀周正は周の曆法を紀すとなり、陽朔の十一月なるやも知れず。正皇天之清則　度后土之方貞　朱子の憤慨する所、此等の語にあるべし。漢の社稷高祖、景帝、文帝と數へ來れば成帝に至り九世ならざるを得ず、文帝の前に呂后を入るるを以て十世と爲す。呂氏は漢の正統にあらず、此の正統にあらざる者を加へて以て清則を正し、方貞に度ると言ふ、亦以て大に誤れるにあらずや。而かも雄は呂氏を以て一世の數に入れたり。屈原の爲さざる所。屈原の爲さざる所のものを記して以て水に投ず、媿を知らざる者と謂ふべし。正と貞と韵なり。

圖纍承彼洪族兮　又覽纍之昌辭　帶鉤矩而佩衡兮　履攙搶以爲綦

纍を圖るに彼の洪族に承く、又纍が昌辭を覽る、鉤矩を帶びて衡を佩べり、攙搶を履で以て綦と爲せり。

【句解】圖纍は屈原が系圖を案ずるにの意。洪族は大族又は貴族なり。屈原は王族なればなり。昌辭は離騷

を指す、立派なる文章を指して昌辭と云ふ。鉤は規、矩は方、衡は平。屈原が文章は法度を有して正平なりとなり。攙搶は妖星卽ち彗星の類を言ふ。綦は履下の飾具。屈原は正平を守りて、妖怪に類することは悉く脚下に履んで身に之を受けずとなり。辭と綦と韵なり。

纍初貯厥麗服兮　何文肆而質鼸　資娵娃之珍髢兮　鬻九戎而索賴

纍初め厥の麗服を貯へて、何ぞ文の肆にして質の鼸しき、娵娃の珍髢を資て、九戎に鬻て賴を索む。

【句解】貯は積貯、屈原は自らの學に富むを以て屢ば麗服の文字を以てす、今乃ち反詰するなり。自ら誇るに足る德義を有するならば、泣言を言ふに及ばざるべし。文は肆放卽ち自由自在に草するが、其の質　卽ち天性は鼸狹にして甚だ不自由不自在の人であるなり。娵は閭娵、娃は吳娃、共に古の美人なり。珍髢は美髮なり。美人の美髮も之を索むる者の爲めには必要なり、索めざる者に於ては何等の價値も無し。然るに九戎の如き盡被髮して結ばざる者に向つて之を鬻んと欲す、九戎は決して此の無用の物は買はざるなり。賣者愚か買者賢か、之を論ずるの要無し、屈原が美才を抱きて楚に仕ふるは、九戎に向つて珍髢を鬻がんと欲すると同一の事なりと、之を閔笑するなり。鼸と賴と韵なり。

鳳皇翔於蓬陼兮　豈鴐鵞之能捷　騁驊騮以曲囏兮　驢騾連蹇而齊足

鳳皇蓬陼に翔る、豈鴐鵞の能く捷ならんや、驊騮を騁するに曲囏を以てす。驢騾連蹇として足を齊うす。

【句解】蓬陼は蓬萊の陼、鳳皇は鳳皇の翔る可き處に翔れよ。鴐鵞が如き凡鳥が之と競爭せんとするも能はざるなり。捷は勝ること、鴐鵞は鳳皇に勝ることは無きなり。驊騮は一日千里の名馬、此の名馬も曲囏　卽ち

曲り屈する如き處を往かしめば駑馬と何ぞ擇ばん。驢騾は鳥類とすれば駕鵞の如し、驊騮は猶ほ鳳皇の如し、然かも此の驢騾と足を齊うして往かねばならぬは其の曲囏を往けばなり。驊騮の本領にはあらず。一一屈原を反詰するなり。捷と足を接の音に叶へて韵とす。

枳棘之榛榛兮　蝯貁擬而不肯下　靈修既信椒蘭之唼佞兮　吾纍忽焉而不蚤睹

枳棘の榛榛たる、蝯貁擬うて肯て下らず、靈修既に椒蘭の唼佞を信ず、吾が纍忽焉として蚤く睹ず。

【句解】　枳も棘も共に「トゲ」を有する樹なり。榛榛は茂盛の形容。蝯貁は猿狖と同じ。擬は疑なり、サルが自由自在に樹上を走ると雖も、トゲのある樹は危險を感ずるゆゑ下らずとなり、以て賢者は危きに近寄らざるに喩ふ。靈修は屈原。信椒蘭之唼佞　山椒は專ら佞け、蘭も香を變ず。是を以て他の臭艸は知る可きのみと屈原自ら離騷に於て說けり。然るに何ぞや此等の事を知り乍ら此の枳棘中に身を處し而して頻に泣事を言ふや。忽焉は何の彼のと言を托すことを言ふ。反詰益す勉む。下と睹と韵なり。

衿芰茄之綠衣兮　被夫容之朱裳　芳酷烈而莫聞兮　不如襞而幽之離房

芰茄の綠衣を衿て、夫容の朱裳を被れり、芳酷烈にして聞ゆる莫し、如かず襞で之を離房に幽せんには。

【句解】　衿は衿帶「オビ」なり。芰茄は蓮荷卽ち「ハスノハ」なり。夫容は芙蓉なり、荷葉の衣と、芙蓉の裳を著けたるに於ては所謂芳氣が酷烈なるは言ふまでも無し。而して此の芳氣が誰にも聞ゆること莫ければ、襞で以て之を離房　卽ち別の處に置くに如かずとなり。襞は音「ヘキ」訓「ヒダメ」ヒダを折て丁寧に「タタム」なり。

前二句は共に屈原が騷に說ける句なり。裳と房と韵なり。

閨中容兢淖約兮　相態以麗佳　知衆嫭之嫉妬兮　何必颺纍之蛾眉

閨中の容淖約を兢ふ、相態するに麗佳を以てす、衆嫭の嫉妬を知らば、何ぞ必ずしも纍が蛾眉を颺げん。

【句解】　閨中は一般婦女子を指す。兢は競と同じ、容は容姿、淖約は綽約と同じ、容姿の美を互に兢ふなり。相態は朱子曰く態は猶ほ勝のごとし、私は美麗である、お前は醜陋であると他人を抑へ自分を揚ぐるなり。衆嫭は衆女なり、衆くの女が嫉妬することを知らば、蛾眉　卽ち己が美容は自ら藏すべきが可なり。然らずして自ら之を颺言するが如きは其れ大に誤ると反詰するなり。佳と眉と韵なり。

懿神龍之淵潛兮　竢慶雲而將擧　亡春風之被離兮　孰焉知龍之所處

神龍の淵潛を懿とし、慶雲を竢て將に擧がらんとす、春風の被離たる亡んば、孰か焉ぞ龍の處る所を知らん。

【句解】　懿は美と同じ。淵潛は神龍が深淵中に潛匿し、慶雲　卽ち何事か瑞祥の雲の起るを竢て以て上擧せんとす。此の如きは神龍の本分にて良に美なりと嘆ず。春風が被離　卽ち「ノドカ」に吹て雲を散ずるにあらざれば、龍の所處は誰人も知るを得ずとなり。神龍は身を隱す。屈原は德を隱す能はずして以て自ら禍を取りしことを譏るなり。擧と處と韵なり。

愍吾纍之衆芬兮　颺燿燿之芳苓　遭季夏之凝霜兮　慶夭頟而喪榮

吾が纍の衆芬を愍んで、燿燿の芳苓を颺ぐ、季夏の凝霜に遭うて、慶夭頟して榮を失ふ。

【句解】　衆芬　屈原は自ら譬ふるに蘭や芰荷や芙蓉の如き香木香艸を以てす。是に於てか此の衆芬を具する

人を惑むとなり。爛爛は光輝の形容。苓は香草の名。季夏は霜の降るべき時にあらず。而かも屈原は季夏に當て凝霜に遭ふ。天頽 卽ち早く憔悴して其の榮を喪失するとなり。慶は羌と同じ、嘆息の聲なり、是れ唯惑んで反詰するにあらず。苓と榮と韻なり。

橫二江湘一以南泝兮　云走二乎彼蒼梧一　馳二江潭之汎溢一兮　將折二衷乎重華一

江湘に橫つて以て南に泝き、云に彼の蒼梧に走く、江潭の汎溢たるに馳て、將に重華に折衷せんとす。

【句解】江湘 蒼梧 江潭 屈原が身の最後を托寄せし處。重華は舜なり。今日に於て我を知る者無し、我を知る者は唯古の舜帝あるのみと屈原は屢ば之を言ふ、之を嘲つての言なり。梧と華と韻なり。

舒二中情之煩惑一兮　恐二重華之不一レ豫與一　陵二陽侯之素波一兮　豈吾纍之獨見許

中情の煩惑を舒て、重華の豫に與せざるを恐る、陽侯の素波を陵ぐ、豈吾が纍の獨り許されんや。

【句解】舒中情の文字は「離騷」に多く用ふるもの、其の他の文字悉く「哀郢」中に出るものなり。陽侯は河伯、河の神なり。我が言は到底國に容れられず、是を以て素波を陵ぎ、江に投じて以て死し、而して重華 卽ち舜が處へ往かんと欲するも、重華は決して此の事を許さず、許さざるは卽ち不豫「クミシセザル」なり。與と許と韻なり。

精瓊靡與二秋菊一兮　將以延二夫天年一　臨二汨羅一而自隕兮　恐二日薄一於二西山一

瓊靡と秋菊とを精しうして、將に以て夫の天年を延んとす、汨羅に臨んで而して自ら隕つ、日の西山に薄るを恐るるならんや。

【句解】精の字拘泥するに及ばず、服する意味に見て妨げず。瓊靡は玉なり、玉と秋菊とを服用すること「離騷」に於て原自ら公言する所、而して是を服用する所以は何ぞ。天年を延長して五百年も千年も生きんと欲する仙人を慕へばなり。而して一面は天年を延長すると正反對に却て之を短縮し溺死するに至る。而かも其の死を急ぐこと日の西山に沒するを恐るるものの如し。君子は言行矛盾せず、原が矛盾せるは何ぞやと反詰するなり。洪興祖曰く吾恐くは重華は原が江に沈んで以て死するを許し、雄が閣より投じて以て生くるを許さじ。朱子曰く斯言之を得たり。余亦曰ふ斯言良に之を得たりと。年と山と韻なり。

解二扶桑之總轡一兮　縱令二之遂奔馳一　鸞皇騰而不レ屬兮　豈獨飛廉與二雲師一

扶桑の總轡を解て、縱に之を遂に奔馳せしむ、鸞皇騰て屬せず、豈獨り飛廉と雲師とのみならんや。

【句解】飛廉は風伯、此の四句は其の去るの疾速なるを言ふ。朝に天津を發し、夕に西極に至る、鳳凰翼翼、八龍の蜿蜿に駕るとは離騷に於て言ふ所、風伯も雲師も屈原が去るの疾速なるに及ばず、況や鸞鳳をや。馳と師と韻なり。

卷二薜芷與一若惠一兮　臨二湘淵一而投之　棍二申椒與一菌桂一兮　赴二江湖一而溫之

薜芷と若惠とを卷て、湘淵に臨んで投じ、申椒と菌桂とを棍かし、江湖に赴て溫す。

【句解】薜芷は香草、若は杜若、惠は蕙なり、皆香草。屈原が汨羅に赴て水に投ずるを言ふ。棍は大に束ぬること。申椒は「離騷」に申椒不芳と謂へり。溫は「ヒタス」なり。要するに此の語意は善も惡も香も臭も死に至りては何等擇ぶ所にあらず、故を以て屈原の死は徒爾にして功無しとの意も含む。之と之と韻なり。

費椒稰以要神兮　又勤索彼瓊茅　違靈氛而不從兮　反湛身於江皐

椒稰を費して以て神を要す、又勤めて彼の瓊茅を索む、靈氛に違うて從はず、反て身を江皐に湛む。

【句解】椒は香氣あり、巫をして神を降すに祭る供へ物なり。稰は糈とも書す、精米なり。是れも神に供するに用ふ。瓊茅は玉の茅繩なり、屈原が死する時製せし物、共に「離騷」に於て原が言ふ所、今之を反詰するの意は何ぞ。原は自身で自身を決する能はず、神巫なぞを賴んで神に會し、以て神と相談せんなぞと欲し、遂に身を江皐即ち汨羅に湛むるに至る。靈氛即ち古の吉凶を明かにする人は、決して死を奬勵せず、乃ち此の善占師に從はずして死するは誤なりとするにあり。茅と皐と韵なり。

纍既巫夫傅說兮　奚不信而遂行　徒恐鶤鴂之將鳴兮　顧先百草爲不芳

纍既に夫の傅說を巫づ、奚ぞ信ぜずして遂に行ふ、徒らに鶤鴂の將に鳴とするを恐る、顧て百草に先だちて芳からざるを爲せり。

【句解】巫は古の攀の字なり、坊間多く丞の字に作る。今宋板摸刻本に據る。傅說が賢者なることは屈原が嘆ずる所、攀は敬慕する意味。朱子は曰く傅說を嘆ずるは巫咸なり、屈原にあらず雄誤ると。今謂ふ巫咸が語は即ち屈原が語と見て可なり。雄が纍即ち屈原が夫の傅說を攀づと言ふ、誤なりと斷ずべきにあらず、言ふ意は既に傅說を慕ふからには、傅說が武丁を輔翼せし如く、屈原も亦楚王を輔翼すべきなり。然るに其の慕ふ所の人の言を信ぜずして遽に去て他に適き、鶤鴂の將に鳴かんとする前に既に死に就くは、其の志誤らずやと反詰するなり。「離騷」に恐くは鵜鴂先づ鳴て、夫の百草をして之が爲め芳しからざらしむと有るに對す。傅說

を宋板本に傳說に作る、古板も亦誤ありと知る可し。行と芳と韵なり。

初纍棄彼虙妃兮　叀思瑤臺之逸女　抨雄鴆以作媒兮　何百離而曾不壹耦

初め纍彼の虙妃を棄て、叀に瑤臺の逸女を思ふ、雄鴆を抨て以て媒と作す、何ぞ百離して曾て壹耦せざる。

【句解】虙妃　瑤臺　雄鴆　皆「離騷」に出づる語。抨は音「ハウ」訓「ヒク」彈又「セシム」使なり。要するに屈原は虙妃を求めて、之に飽けば叀に瑤臺の逸女と甲より乙に移り、而して媒介者としては雄鴆を以てしたるも鴆は遂に皆好からずと告げたるが故に蝨も取らず、蜂も取らずして死したりと嘲笑するなり。女と耦と韵なり

乘雲蜺之旖旎兮　望昆侖以樛流　覽四荒而顧懷兮　奚必云女彼高丘

雲蜺の旖旎たるに乘り、昆侖を望んで以て樛流す、四荒を覽て顧み懷ふ、奚ぞ必ずしも云に彼の高丘に女あらん。

【句解】旖旎は「シナヘル」貌、雲蜺が「シナヘル」なり。樛流は彼へ曲り此へ曲りて流るる形容。朱子曰く「離騷」に高丘無女と言ふは、高丘に美女の求むべき無きを言ふ。以て列國に賢君の事ふべき無きに喩ふ。此の詞の女の字乃ち去聲と作して讀む、恐くは亦本文の意にあらず。今案ずるに女の字元來上聲六語の韵にして男女の女は本韵に依る、去聲に變ずるときは妻即ち人に「メアハス」となるなり。屈原が「離騷」に哀高丘無女と言ひたるは女が無きを言ふ。「メアハス」にあらず、然るに揚雄は誤て去聲と爲して文を作る。是を以て誤と言ふなり。余は舊讀法の「ツカヘン」には從はずして矢張本韵の女と讀むこととせり。流と丘と韵なり。

既亡鸞車之幽藹兮　焉駕八龍之委蛇　臨江瀕而掩涕兮　何有九招與九歌

既に鸞車の幽藹たる亡し、焉んぞ八龍の委蛇たるに駕せん、江瀕に臨んで涕を掩ふ、何ぞ九招と九歌とあらん。

【句解】鸞車に乘り、又は八龍に駕し、天帝に謁するとか、或は佚女を問ふとか、屈原は自由な事を言ふが、其の實鸞車も亡く、又八龍も無きなり。唯眞に有るものは江瀨に赴て涕を掩ふの事のみ、九招を作り、九歌を爲るも要するに何かあらんとなり。屈原を反詰すること益す急なり。理窟を以て之を攻む、到底屈原を知るを得ず。蛇と歌と韵なり。

夫聖哲之不遭兮　固時命之所有　雖增歎以於邑兮　吾恐靈修之不變改

夫れ聖哲の遭はざる、固に時命の有る所、歎を增し以て於邑すと雖も、吾靈修の變に改めざらんことを恐る。

【句解】聖哲は廣く指して言ふ。不遭は明時に遭遇せざるなり。時命は其の時と其の運命となり。聖人も哲者も世に出るや必ず其の現想を實行する能はざるものなり。屈原が如何に增歎し、如何に於邑も、靈修　卽ち楚王は彙　卽ち屈原が爲めに其の行を改めずとなり。朱子曰く孟子曰ふ千里にして王に見ゆ、是れ予が欲する所なり、不遇なるが故に去る、豈予が欲する所ならんや。聖賢の心此の如し、原未だ及ばずと雖も、而かも其の宗國に拳拳たる尤も臣子の至情を見る。豈逆じめ其の諫む可らざるを料りて先づ自ら己むに忍びんや。此等の理、雄皆以て之を知るに足らず、唯生を偸み、命を惜むの一路ありて、則ち之を見ること明にして、之を行ふことを熟せるのみ。此を以て原を譏る、是れ鴟梟を以て鳳凰を笑ふなり。有と改と韵なり。

昔仲尼之去魯兮　斐斐遲遲而周邁　終回復於舊都兮　何必湘淵與濤瀨

昔仲尼が魯を去る、斐斐遲遲として周邁せり、終に舊都に回復り、何ぞ必ずしも湘淵と濤瀨とにせん。

【句解】斐斐は往來する貌、一處に安住する能はざるなり。遲遲は南北共に往くは往くが進行せざる貌。而

かも孔子は齊や衞や陳や宋の間に周邁せられたり。而して最後は魯に回復り、魯に於て逝けり。此の孔子が道を學んで以て然かる可きなり。湘淵に赴き、濤瀨に沒するは決して仲尼の徒にあらざるなり。朱子曰く孔子は異姓の臣、其の魯を去るや、但政亂のみ、未だ危亡の釁あらず。去る可くして去り、歸る可くして歸る。屈原が事と全く相似ず、雄が說誤る。邁と瀨と韵なり。

漁父之餔歠兮　絜汶汶之振衣

漁父の餔歠を溷れたりとし、汶汶の振衣を絜とす、由聃の珍とする所を棄て、彭咸が遺す所を蹠り。

【句解】漁父が事は「漁父」を見よ。汶汶振衣も亦「漁父辭」にあり。由は許由、聃は老聃、許由は一瓢一飮以て安然たりし人、老聃は虛無恬澹を以て別に一宗を建立せし人、此の二人の事を擧ばずして、翻て諫言以て殺されたる彭咸が遺則を蹠むは、良に惜むべく亦憫むべしとなり。衣と遺と韵なり。

丹陽の洪興祖曰く、揚雄が屈原を議する所以の者此の如し、而して班固亦其の才を露し己を揚ぐるを譏る、顏之推又其の顯に君の過を暴すを病む。愚(洪氏)嘗て折衷して之を論じて曰く或人問ふ古人言へることあり其の身を殺して君に益あらば則ち之を爲ん、屈原死すと雖も、何ぞ懷襄に益あらん。曰く忠臣が心を用ふること自ら其の君を愛するの誠を盡くすのみ、死生毀譽は顧ざる所なり。故に比干諫を以て戮せられ、屈原放たるを以て自ら沈む。比干は紂が諸父なり、屈原は楚の同姓なり。人臣爲る者、三諫して從はざるときは去る、同姓は去る可きの義無し、死あるのみ。「離騷」に曰く余が身を陷て死に危くとも、余が初を覽るに其れ猶ほ未だ悔ず、則ち原が自處する審なり。或又曰く寧武子、邦道無きときは愚なり、仲山甫、明哲にして以て其の身を保つ、

今原は乃ち智を無道の邦に用ひて、以て明哲保身の義を虧く、亦何ぞ賢と爲すに足らんや。曰く愚武子が如きは身を全うし害に遠かること可なり。官守言責あるときは斯に智を用ふ。山甫明哲保身の道なり。然かも曰はずや、夙夜解にあらず、以て一人に事ふ。士危を見ては命を致す、況や同姓恩と義とを兼て、而かも以て死せざるべけんや。比干が死、微子が去皆是れなり、屈原は其れ去る可らざるか。比干あり以て責に任ず、微子は之を去て可なり。楚に人無し、原去るときは國從て亡ぶ、故に身放逐せらると雖も、猶徘徊して去るに忍びず、生きて力爭して强諫するを得ず、死して猶ほ其の君を愛することを知て、眷眷として忘れざらしむ。臣子の義盡くせり。死を難と爲すにあらず、死に處するを難と爲す。屈原死すと雖も猶ほ死せざるなり。後の其の文を讀み、其の人を知る賈生が如き者は鮮し。然かも賦を爲り以て之を弔すること其の不遇を哀むに過ぎず。余古よりの忠臣義士を觀るに、慨然發憤、其の死を顧ずして、特立獨行、自信して回らざる者、其の英烈の氣、豈身と俱に亡んや。羽人に丹丘に仍り、不死の舊鄉に留り、無爲に超て以て淸く、太初と鄰を爲せり。此れ遠游の作れる所以にして、淺見寡聞の者の爲めに道ひ難きなり。又曰く天を樂み命を知るは、憂の大なる者あるなり。屈原が憂は國を憂ふるなり、其の樂るは天を樂るなり。離騷二十五篇、憂世の語多し。獨り「遠游」曰く道は受く可くして傳ふ可らず、其の小內無く、其の大垠無し、而が魂を滑ること勿れ、彼將に自然ならんとす。壹氣孔神、中夜に於て虛を存し、以て之を無爲の先に待つと。此れ老莊孟子が大に人に過ぐる所以の者にして、而して原獨り之を知る。司馬相如、「大人賦」を作る。宏放高妙、讀む者、淩雲の意あり、其の語多く此に出づ、

其の妙處に至りては、相如も能く識ると莫し。太史公傳を作て以爲く、其の文約其の辭微なり。其の志絜、其の行廉なり。其の文を稱すると小にして、其の指極めて大、類を擧ぐること邇くして義を見すこと遠し。其の志絜、故に其れ物の芳を稱す。其の行廉なり、故に死して容られず。自ら濯淖汚泥の中に疎ぜられ、以て塵埃の外に浮游す。此の志を推すときは、日月と光を爭ふと雖も可なり。斯れ深知己と謂ふ可し。楊子雲反離騷を作りて以爲らく君子時を得るときは大に行ふ、時を得ざるときは、龍蛇の如し、遇不遇は命なり、何ぞ必すしも身を沈めん。屈子が事は、蓋し聖賢の變なる者、孔子に遇はしめば、當に三仁と同稱すべし。雄未だ以て此に與かるに足らず。班孟堅、顏之推が云ふ所は妾婦兒童が見に異無し。余故に具に之を論ず。

絕命詞第十四

絕命詞は漢の息夫躬が作る所、躬、東平王雲が祠祭祝詛の事を變告するを以て官に拜し侯に封ぜらる。而して雲坐誅せられて死す、後又數上疏して事を論ず。語皆險譎竟に罪を以て詔獄に繫がる、天を仰ぎ大に譟ぶ、絕吧して死す。躬利口を以て妄を作し、死して責を償はず。而して此詞は乃ち忠を發し身を忘るるを以て上帝に號ぶ。甚だしいかな其の天を欺くや。特に其の詞高古にして賈誼に似たるを以ての故に錄して其の本末を備ふること此の如し。又以て文人無行の責むるに足らざることを見すと云ふ。

息夫躬字は子微、前漢哀帝の時なり。綱齋曰く後漢の章帝の時のもの、東平王を讒したるなりと。綱齋は東平憲王蒼と東平王雲とを混同して此の臆說を吐く全く誤る。夫躬は河內河陽の人、少うして博士弟子と爲り、春秋

を受け、記書を通覽す。容貌壯麗、衆の異とする所と爲る。後東平王雲が哀帝を祝詛する事あり。此の變を告ぐるの故を以て重封を受け、既にして罷められ、被髮して中夜北斗に向て祝盜の事あり、掠問せられ、血鼻耳より出で食頃して死す。此の時相連なり下獄する者百餘人、而かも此の絕命辭を屬る者は一人もあらず。朱子の所謂文人無行深く責むるに足らざるなり。

玄雲泱鬱將安歸兮　鷹隼橫厲鸞徘徊兮　矰若浮猋動則機兮　藂棘棧棧曷可棲兮

玄雲泱鬱として將に安か歸らんとする、鷹隼橫厲して鸞徘徊す、矰浮猋の若くにして動ば則ち機あり、藂林棧棧として曷ぞ棲べきや。

【句解】泱鬱は玄雲の盛なる貌、黑雲が空中に滿つるなり。鷹隼は「タカ」と「ハヤブサ」以て敵黨の橫厲に喩ふ。鸞は自身に喩ふ。徘徊　自分は鷹隼の如き徒輩が橫暴なれば東西をブラブラするのみで、安棲する地無し。矰は弋射矢なり。浮猋は疾風なり。師古曰く言ふこころは矰弋を張り設けて其の疾きこと風の若く動くときは機發すとなり。余を生禽せんと欲して待ち構て居るを言ふ。猋を防間本に焱に作るは誤る。藂棘は多くの「イバラ」棧棧は棘樹の衆盛なる形容、以て敵黨の多きに喩ふ。可棲　到底危險にて棲む能はずとなり。歸と徊と機と棲と韵なり。

發忠忘身自繞罔兮　冤頸折翼庸得往兮　涕泣流兮萑蘭　心結愲兮傷肝

忠を發して身を忘れ自ら罔を繞らす、頸を冤め翼を折り庸ぞ往くを得ん、涕泣流れて萑蘭たり、心結愲として肝

を傷ましむ。

【句解】發忠忘身は君國の爲め我が一身の事を忘るとなり。而かも罔、卽ち網を以て我を捕へんと欲する者あり。冤頸折翼庸得往は應劭曰く頸を冤むるも翼を折るも庸ぞ往かざるを得んとの意なり。張晏曰く讒人の網に陷り何を用て去るを得んの意なり。師古曰く張晏の說を可とす。冤は屈なり、往んと欲するも自由ならざるの謂なり。庸は和語の「ドウシテモ」なり、ドウシテモ往かれぬなり。萑蘭は臣瓚曰く闌干なり、涕泣して淚闌干たるなり、萑音完なり、水の音にあらず。結愲は師古曰く亂なり、心が紛亂して肝が傷破すとなり。罔と往と韵、蘭と肝と韵なり。

虹蜺曜兮日微　孽杳冥兮未開　痛入天兮鳴謼　冤際絕兮誰語

虹蜺曜きて日微なり、孽ひ杳冥にして未だ開けず、痛天に入て鳴謼す、冤なり際絕て誰と語らん。

【句解】虹蜺は張晏曰く邪陰の氣にして照曜あり、以て日月を蔽ふ、讒言流行して以て忠良浸微なるを言ふ。孽は「說文」に庶子なり、妾隸の子を孽と曰ふ、轉じて罪禍の義に用ふ。如淳曰く虹蜺が日の光明を覆ふ、之を孽と謂ふ。師古曰く孽は邪氣なり。杳冥は昧暗なるを言ふ。鳴謼は師古曰く鳥を以て自ら喩ふ、坊間本に鳴嘑に作る、誤る鳴謼卽ち痛んで以て「ナキサケブ」なり、「アア」と嘆息するにはあらず。際絕は讒せられて君との交際が斷絕せるを言ふ。君と交際斷絕せば其れ又誰と語んや。微と開と韵、謼と語と韵なり。

仰天光兮自列　招上帝兮我察　秋風爲我唫　浮雲爲我陰　嗟若是兮欲何留　撫神龍兮檻其須　游曠迥兮反亡期　雄失據兮世我思

天の光を仰いで自ら列し、上帝を招て我を察にし、秋風我が爲に唫じ、浮雲我が爲に陰る、嗟是の若くにして何くに留らんと欲する、神龍を撫して其の須を攄る、曠邈に游んで反ること期亡し、雄據を失して世我を思はん。

【句解】天光　上帝　我が本心は青天白日、毫も昧暗なる所無く、それは上帝も明察する所なりとなり。然るに秋風は肅殺の氣を以て我が爲めに唫じ、浮雲は暗澹の色を以て我が爲に陰る、是を以て我の安留すべき處此の土に有る無し。乃ち神龍を撫して其の須を攄り、曠邈　卽ち天上に飛遊して永遠に反る期は亡し。師古曰く一死復生く可らざるを言ふ。雄は師古曰く君上を謂ふ。據は尊位を謂ふなり、上據る所を失すれば乃ち我を思ふのみ。朱子曰く自ら言ふ英雄據ろを失うて後當に世の爲に思はるる所となるべしとなり。今案ずるに師古の說を以て朱子に勝ると爲す。何ぞや自分は既に神龍を撫し、其の須を執持して上天し去る、遂に反期は無きなり。其の上に何ぞ失據の字を用ふるを爲ん。讒を信じて天子は我を刑するに至ると雖も、後其の身が君位卽ち據る所を失せば其の時に及んで必ず我を思ひ出さんとなり。但雄と世との字に就て拘泥の結果、朱說を信ずる者少からず、余は舊說を信ずる者なり。列と察と韵、唫と陰と韵、留と須と韵、期と思と韵なり。

思玄賦第十五

思玄賦は後漢の張衡が作る所、衡字は平子南陽西鄂の人、少うして善く文を屬す。安帝順帝の二代に仕へ共に太史令と爲る、後侍中と爲る。天文曆算の學に通じ、恆に太玄經を讀み、楊子雲の賦を好む。順帝の帷幄に在て左右を諷議す。嘗て衡に天下の疾惡する所の者を問ふ。宦官其の己を毀らんことを懼れ、皆共に之を目す。

衡乃ち詭對して出づ。閹豎（宦官）終に其の患を爲さんことを恐る。遂に共に之を讒す。衡常に身を圖るの事を思ひ、以爲らく吉凶倚伏幽微明難しと。乃ち思玄賦を作り以て情志を宣寄す。

仰二先哲之玄訓一兮　雖二彌高一其弗レ違　匪二仁里一其焉宅兮　匪二義迹一其焉追　潛服膺以永靚兮　緜二日月一而不レ衰　伊中情之信修兮　慕二古人之貞節一　竦二余身一而順レ止分　遵二繩墨一而不レ跌　志圜圓以應レ懸兮　誠心固其如レ結

【句解】先哲は廣泛に古の聖賢を指す、狹義に言へば老子ならん。玄訓は幽玄なる教訓、章懷太子は玄訓は道德の訓なりと注すと雖も、賦中の意皆老子と反對なる點もあり。是を以て余は廣泛に見るを可とす。彌高の文字は『論語』に出づ。仁里　義迹　『論語』に曰く里は仁を美と爲す、宅るに仁に處せずんば焉ぞ知るを得ん、里と宅と皆居なり。服膺は『禮記』に出づ、拳拳として息ざるなり。仁に處り、義を追ひ、以て永久に靚思して忘れず。緜は緜亙、志の繼續するを言ふ。中情信修は「楚辭」の文字を用ふ。古人貞節は特に屈原を指す。竦は舊注に企立とあり今用ひず。竦敬卽ち「ツツシム」の訓を取る。順止は『禮記』に人の臣たらば恭に止る。人の子たらば孝に止る、是れ順從なり。繩墨は禮法なり。不跌は蹉跌せざるなり。圜圓は缺けし處無きを言ふ。如結は誠心の堅固なるを言ふ。違と追と衰と韵、節と跌と結と韵なり。

旌二性行一以制レ佩兮　佩二夜光與瓊枝一
以酷烈兮　允塵邈而難レ虧　既姱麗而鮮レ雙兮　非二是時之攸一レ珍　奮二余榮一而莫レ見
兮　播二余香一而莫レ聞　幽獨守二此仄陋一兮　敢忘皇而舍レ勤　幸二二八之逕一レ虞兮　喜
傳說之生レ殷

性行を旌にして以て佩を制す、夜光と瓊枝とを佩ぶ、幽蘭の秋華を綴て、又之に綴るに江蘺を以てす、斐積を美しくして以て酷烈なり、允に塵邈として虧難し、既に姱麗にして雙び鮮し、是の時の珍とする攸にあらず、余が榮を奮へども見ること莫し、余が香を播ども聞くこと莫し、幽獨にして此の仄陋を守る、敢て忘り皇ありて勤を舍んや、二八の虞に逕へることを幸とし、傳說が殷に生れたることを喜ぶ。

【句解】旌は旌明。性行は己が守持する所。夜光も瓊枝も珠玉なり。縄は音「サン」纂訓は「アツメル」なり。幽蘭も江蘺も共に香潔なり、皆楚辭に出る文字。斐積は丁寧に正しくヒダの明潔なる衣を美しくして其の香氣の酷烈なるを言ふ。允は良と同じ。塵邈は香氣の遠く亙ること。姱麗鮮雙は我が身の姱麗なる其の雙が鮮少なるを言ふ。非是時攸珍　姱麗なる時のみを以て珍とする所にあらず、乃ち余榮、余が光榮を奮ふも誰か之を見るや。余香　余が香氣を播くも誰か之を聞くや、此の二句は今日の事を敍す。幽獨にして此仄陋　即ち邊隅の地に住す。敢忘皇而舍勤　辛勤を舍て怠情に就くことは爲さず、皇は遑と同じ。二八は章懷太子曰く八元と八愷なり、八元は所謂伯奮、仲堪、仲熊、叔豹、季貍、八愷は蒼舒、隤敳、檮戭、大臨、龐降、庭堅、仲容、叔達なり。逕は音「ゴ」遻と同じ、訓は遇なり逢なり違ふなり戻なり逆なり。綱齋曰く二八は

舜の臣が二十八人あるなりと大に誤る、二八は支那の數として十六人を言ふ。漢文の上に於て二十八を略して二八と言ふことは無きなり。傳說は殷の爲めに大功を立て天下に忠名を顯はせり、枝と蘺と虧と韻、珍と聞と勤と殷と韻なり。

尙二前良之遺風一兮　恫後レ辰而無レ及　何孤行之煢煢兮　孑不レ羣而介立　感二鸞鷺之特棲一兮　悲淑人之稀レ合　彼無レ合其何傷兮　患二衆僞之冒レ眞　旦獲讒于羣弟一兮　啓二金縢而乃信　覽二烝民之多一レ僻兮　畏立辟以危レ身　曾煩毒二以迷惑一兮　羌孰可二與言一己　私湛憂而深懷兮　思繽紛而不レ理

前良の遺風を尙び、恫らくは辰に後れて及ぶこと無きを、何ぞ孤行の煢煢たる、孑として羣せずして介立せり、鸞鷺の特棲に感じ、淑人の合ふこと稀なるを悲しむ、彼の合ふこと無きは其れ何ぞ傷んや、衆僞の眞を冒ことを患ふ、旦は讒を羣弟に獲て、金縢を啓て乃ち信ず、烝民が僻多きを覽る、畏くは辟を立て以て身を危うせんことを、煩毒を曾て以て迷惑す、羌孰か與に己を言ふ可き、私に湛憂して深く懷ふ、思ひ繽紛として理らず。

【句解】前良は八元八愷等の賢人を指す。恫は恫痛、時代が後れて其の及ぶ無きを痛む。煢煢は光影の薄きを言ふ。孑は獨自のこと。鸞鷺は名鳥、鸞は女牀山にあり、鷺は九疑山にあり。淑人は善人なり、善人に契合すること稀なり。而かも契合せざるは大に傷ずと雖も、傷む所は衆僞の眞を冒ふことなり。旦は周公旦を言ふ。讒は誘讒なり。成王立て周公攝政と爲る、其の弟管叔、蔡叔等之を謗る、周公乃ち二叔を誅す。後大雷雨あり、田稻皆偃す。時に金縢の匱を啓き、卜筮の書を出し之を占ふに、周公昔日武王の死に代るに我が身を以て、